

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

4

蓮華谷古墳群（Ⅱ）
蓮華池遺跡（Ⅰ）

1994

徳島県教育委員会
財団法人徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

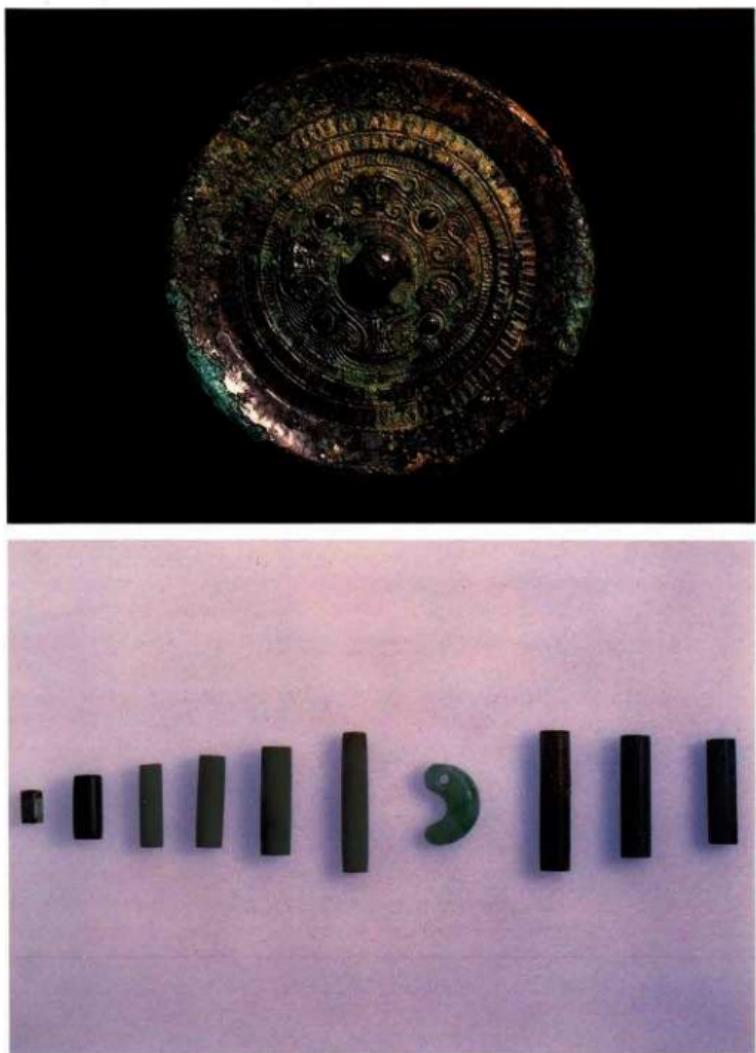
四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

4

蓮華谷古墳群（Ⅱ）
蓮華池遺跡（Ⅰ）

1994

徳島県教育委員会
財團法人徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団



蓮華谷古墳群(Ⅱ)2号墳出土遺物

序 文

本書は、四国縦貫自動車道（徳島～駿河）の建設に伴い、平成2年度に実施した板野郡板野町に所在する蓮華谷古墳群（Ⅱ）、蓮華池遺跡（Ⅰ）の2遺跡について発掘調査の成果をまとめたものであります。

これらの遺跡は阿波山麓南麓に位置しており、蓮華谷古墳群（Ⅱ）からは、仿製四神形鏡や各種の副葬遺物を出土した、徳島県最古式の粘土都をもつ古墳が発見されました。また蓮華池遺跡（Ⅰ）からは県内では数少ない形象埴輪が出土するなど、本県の古墳文化を検討する上で重要な成果が得られたものと考えております。

本書が調査研究の資料として活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施、報告書作成にあたり、日本道路公団をはじめ、関係機関並びに地元の皆様に多大の御協力、御指導を頂きました。ここに深く感謝いたしますとともに、今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成6年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 近藤通弘

例　　言

- 1 本書は平成2年（1990）度に調査を実施した四国縦貫自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書には蓮華谷古墳群（II）・蓮華池遺跡（I）（板野郡板野町所在）の調査報告を収録した。
- 3 発掘調査は徳島県と日本道路公団高松建設局の委託契約を受け、徳島県からの委託契約により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 II-第2図の地形図は建設省国土地理院発行1/25,000地形図「大寺」を転載したものである。
- 5 方位は国土座標第N座標系の北、高さは東京湾標準潮位（T.P.）を表す。
- 6 本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準七色帖』1993年版に、また玉類の色調は、日本色彩株式会社『'80改訂 新色名帖〈つやけしの色〉』によった。
- 7 調査にあたっては、下記の各機関の指導・援助を得た。

徳島県教育委員会　日本道路公団高松建設局　同徳島工事事務所　同協工事事務所
徳島県土木部縦貫道推進局　同中央事務所　板野町
- 8 自然科学的分析および遺物のX線撮影は次の方々に依頼した。
 - ・玉類の産地分析は、京都大学原子炉実験所の薦科哲夫氏による。
 - ・四神形鏡の材質分析及びX線撮影、赤色顔料の成分分析は、徳島県立博物館学芸員の魚島純一氏による。
 - ・四神形鏡の保存処理については、奈良国立文化財研究所保存科学研究室及び村上隆氏に御配慮いただいた。
- 9 本書の執筆は、I、II-3の2号墳、II-4(I)は菅原康夫が、その他は須崎一幸が担当した。

また遺物の写真撮影は島巡賢二、佐藤誠二が行い、全体の編集は菅原の指示のもと須崎が行った。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	7
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	7
III 蓮華谷古墳群（Ⅱ）	11
1 調査の経過	13
(1) 調査の経過	13
(2) 調査日誌抄	13
2 調査前の状況と遺構の配置	18
(1) 調査前の状況	18
(2) 遺構の配置	18
3 遺構と遺物	19
2号墳	19
3号墳	29
4号墳	51
5号墳	65
6号墳	85
7号墳	93
石室墓	95
上塙墓	97
遺構に伴わない遺物	100
4 まとめ	101
(1) 2号墳	101
(2) 後期古墳	107
蓮華谷古墳群（Ⅰ）出土の勾玉、管玉の産地分析	115
蓮華谷古墳群（Ⅱ）2号墳の赤色顔料の分析について	136
蓮華谷古墳群（Ⅱ）2号墳四神形鏡の蛍光X線分析について	138

N	蓮華池遺跡(1)	215
1	調査の経過.....	217
(1)	調査の経過と調査方法.....	217
(2)	調査日誌抄.....	217
2	調査成果.....	219
(1)	基本層序.....	219
(2)	遺構の配置.....	219
(3)	遺構と遺物.....	219
①	S X 0 1	219
②	S K 0 1	235
③	遺構に伴わない遺物.....	235
(4)	まとめ.....	239

挿図目次

I・II		
第1図	PW御藏貫自動車道(鹿島～猪) 断面図.....	3
第2図	蓮華谷古墳群(1)・蓮華池遺跡(1)周辺遺跡分布図.....	8
III		
第1図	蓮華谷古墳群(1)グリッド配置図.....	14
第2図	蓮華谷古墳群(1)・蓮華池遺跡(1)調査位置要図.....	15
第3図	2号墳浜土廻り調査.....	19
第4図	2号墳基底廻り突起部.....	20
第5図	2号墳主体部遺物出土状況(1).....	21
第6図	2号墳主体部遺物出土状況(2).....	22
第7図	2号墳主体部遺物出土状況(3).....	22
第8図	2号墳主体部出土遺物(1)四時分類.....	23
第9図	2号墳四神形埴輪面図.....	24
第10図	2号墳七体埴輪出土遺物(2)鉢器.....	25
第11図	2号墳六体埴輪出土遺物(3)勾三・管玉.....	26
第12図	2号墳主体部出土遺物(4)土器等.....	27
第13図	2号墳横升出し遺物.....	27
第14図	3号墳横石西翼圖.....	29
第15図	3号墳東石廻り調査.....	31
第16図	3号墳石室平面図.....	32
第17図	3号墳土室正面側面図(1).....	34
第18図	3号墳文様水波尖灭圖(2).....	35
第19図	3号墳石室墓底部敷石平面図.....	36
第20図	3号墳土室底面遺物出土状況(1).....	37
第21図	3号墳文様水波尖灭圖(3).....	38
第22図	3号墳出土遺物出土状況(3).....	39
第23図	3号墳川土遺物(1)鉢器.....	40
第24図	3号墳出土遺物(2)耳環・玉.....	42
第25図	3号墳出土遺物(3)ガラス玉.....	43
第26図	3号墳出土遺物(4)ガラス玉.....	44
第27図	3号墳出土遺物(5)ガラス玉.....	45
第28図	3号墳川土遺物(6)ガラス玉.....	46
第29図	3号墳出土遺物(7)灰陶器.....	47
第30図	3号墳出土遺物(8)磨擦器・土削器.....	48
第31図	3号墳川土遺物(9)磨擦器・土削器.....	49
第32図	4号墳横升面図.....	52
第33図	4号墳土室底面図.....	53
第34図	4号墳排水溝尖滅圖.....	54
第35図	4号墳文様水波尖滅圖.....	56
第36図	4号墳土室底面遺物出土状況.....	57
第37図	4号墳土室底面出土遺物(1)鉢器・玉.....	58
第38図	4号墳土室底面出土遺物(3)ガラス玉.....	59
第39図	4号墳土室底面出土遺物(4)ガラス玉.....	60

第40回	4号棟主体部出土遺物⑥鏡意器	61	第73回	包含層出土遺物①鉢	100
第41回	4号棟周辺出土遺物	62	第74回	包含層川土遺物②土器器	100
第42回	5号棟主体部裏面図	65	第75回	基底部断面模式図	101
第43回	5号棟遺物出土状況	67	第76回	阿須地城における前朝古墳の主体墓其等	103
第44回	5号棟出土遺物①(1)武器	69	第77回	蓮華谷古墳群(II)出土鏡意器の編年	107
第45回	5号棟出土遺物②(2)耳環・勾玉・管玉	71	第78回	造幣字統期別一覧	112
第46回	5号棟出土遺物③(3)如意玉・その他の玉	72			
第47回	5号棟出土遺物④(4)ガラス玉	73		▼	
第48回	5号棟出土遺物⑤(5)ガラス玉	74	第1回	蓮華谷遺跡(1)グッド配置図	217
第49回	5号棟出土遺物⑥(6)ガラス玉	75	第2回	蓮華谷遺跡(1)土壁地積状況	220
第50回	5号棟出土遺物⑦(7)ガラス玉	76	第3回	蓮華谷遺跡(1)道幅配置図	221
第51回	5号棟出土遺物⑧(8)鏡玉	78	第4回	S K 0 1 実測図	222
第52回	5号棟出土遺物⑨(9)鏡玉	79	第5回	S K 0 1 丹青尖端図	223
第53回	5号棟出土遺物⑩(10)鏡玉	80	第6回	S K 0 1 ト要道地出土地点図	224
第54回	5号棟出土遺物⑪(11)鏡玉	81	第7回	須恵器(1)	225
第55回	3号棟出土遺物⑫(12)鏡玉	82	第8回	須恵器(2)	226
第56回	5号棟出土遺物⑬(13)鏡意器	83	第9回	透形埴輪①	227
第57回	6号棟出土遺物⑭(14)鏡意器	85	第10回	透形埴輪②復元図	228
第58回	6号棟石室平面図	86	第11回	透形埴輪③	229
第59回	6号棟排水溝実測図	87	第12回	家形埴輪(1)	230
第60回	6号棟石室内部出土品状況	88	第13回	家形埴輪(2)	231
第61回	6号棟七体提出上遺物(1)耳環	89	第14回	円形埴輪復元図(1)	232
第62回	6号棟主体部川土遺物(2)ガラス玉	90	第15回	家形埴輪復元図(2)	233
第63回	6号棟主体部出土遺物(3)鏡意器	90	第16回	朝顔形埴輪	234
第64回	6号棟周辺出土遺物	91	第17回	円筒埴輪	235
第65回	7号棟出土遺物(1)ガラス玉	93	第18回	帆原形埴輪片・円筒埴輪片(1)	236
第66回	7号棟川土遺物(2)鏡意器	93	第19回	円筒埴輪片(2)	237
第67回	7号棟出土遺物(3)鏡意器	94	第20回	円筒埴輪片(3)	238
第68回	石室墓出土土器	95	第21回	S K 0 1 実測図	239
第69回	石室墓実測図	96	第22回	S K 0 1 ト要道	239
第70回	土墳墓実測図	97	第23回	包含層出土遺物(1)	240
第71回	土墳墓出土遺物(1)鉢	98	第24回	包含層川土遺物(2)	240
第72回	土墳墓出土遺物(2)鏡意器	98			

表目次

1		
第1表	四国歴史白黒木版地圖文化財調査地一覧表	5
II - 4		
第1表	阿須地域における前朝古墳主体墓底盤及び木棺計測表	104

III	遺物統計表	143
第1表	2号鏡意器計測表	145
第2表	2号鏡勾玉計測表	145
第3表	2号鏡玉計測表	145
第4表	2号鏡意器計測表	145

第5表	2号墳頂丘出土鉢器計測表	145	第36表	5号墳縦玉計測表②	160
第6表	3号墳鉢器計測表	145	第37表	5号墳灰陶器類觀察表	161
第7表	3号墳耳環計測表	146	第38表	6号墳耳環計測表	161
第8表	3号墳勾玉計測表	146	第39表	6号墳ガラス玉計測表	161
第9表	3号墳管玉計測表	146	第40表	6号墳須恵器類觀察表①	162
第10表	3号墳切子玉計測表	146	第41表	6号墳須恵器類觀察表②	163
第11表	3号墳ガラス玉計測表①	146	第42表	6号墳須恵器類觀察表③	164
第12表	3号墳ガラス玉計測表②	147	第43表	7号墳ガラス玉計測表	164
第13表	3号墳土器類觀察表①	148	第44表	7号墳須恵器類觀察表①	164
第14表	3号墳土器類觀察表②	149	第45表	7号墳須恵器類觀察表②	165
第15表	3号墳土器類觀察表③	150	第46表	石棺墓ガラス玉計測表	165
第16表	3号墳土器類觀察表④	151	第47表	上横塗灰陶器計測表	165
第17表	4号墳耳環計測表	151	第48表	土墳蓋灰陶器類觀察表①	165
第18表	4号墳勾玉計測表	151	第49表	七連蓋灰陶器類觀察表②	166
第19表	4号墳管玉計測表	151	第50表	包含層出土遺物計測表	166
第20表	4号墳切子玉計測表	152	第51表	包含層出土遺物觀察表	166
第21表	4号墳その他の玉計測表	152	V 遺物観察表		
第22表	4号墳ガラス玉計測表	152	第1表	須恵器類觀察表	244
第23表	4号墳須恵器類觀察表①	153	第2表	形象埴輪類觀察表①	244
第24表	4号墳須恵器類觀察表②	154	第3表	形象埴輪類觀察表②	245
第25表	4号墳須恵器類觀察表③	155	第4表	円筒系埴輪類觀察表①	245
第26表	5号墳鉢器計測表	155	第5表	円筒系埴輪類觀察表②	246
第27表	5号墳耳環計測表	155	第6表	円筒系埴輪片類觀察表①	246
第28表	5号墳勾玉計測表	156	第7表	円筒系埴輪片類觀察表②	247
第29表	5号墳管玉計測表	156	第8表	円筒系埴輪片類觀察表③	248
第30表	5号墳切子玉計測表	156	第9表	円筒系埴輪片類觀察表④	249
第31表	5号墳その他の玉計測表	157	第10表	包含層出土遺物觀察表①	249
第32表	5号墳ガラス玉計測表①	157	第11表	包含層出土遺物觀察表②	250
第33表	5号墳ガラス玉計測表②	158	第12表	包含層出土遺物計測表①	250
第34表	5号墳玉計測表①	158	第13表	包含層出土遺物計測表②	250
第35表	5号墳玉計測表②	159			

図版目次

図版 1	調査前風景 遠景	
	調査前風景 近景	
図版 2	2号墳土体部検出状況①	
	2号墳土体部検出状況②	
図版 3	2号墳土体部内土層堆積状況	
	2号墳土体部遺物出土状況	
図版 4	2号墳断面出土状況	
	2号墳主体部木質残存状況	
図版 5	2号墳外鉄刀出土状況	
	2号墳内鉄刀出土状況	
図版 6	2号墳四神形鏡・鉄斧出土状況①	
	2号墳四神形鏡・鉄斧出土状況②	
図版 7	2号墳管玉出土状況	

2号墳勾玉出土状況	4号墳排水溝検出状況
図版8 2号墳粘土格査検出状況①	図版32 4号墳主体部検出状況
2号墳粘土格査検出状況②	4号墳全景
図版9 2号墳主体部底面格査検出状況①	図版33 4号墳出土遺物①漆身貝
2号墳主体部底面格査検出状況②	図版34 4号墳出土遺物②須恵器
図版10 2号墳主体部断ち割り状況①	図版35 5号墳主体部検出状況
2号墳主体部断ち割り状況②	5号墳遺物出土状況①
図版11 2号墳主体部断ち割り状況③	図版36 3号墳遺物出土状況②
2号墳主体部断ち割り状況④	5号墳主体部検出状況
図版12 2号墳中体部断ち割り状況⑤	図版37 5号墳出土遺物③銅器
2号墳主体部断ち割り状況⑥	図版38 5号墳出土遺物④鏡三
図版13 2号墳川土遺物①四神形鏡	図版39 5号墳川土遺物⑤漆身貝・漆塗器
図版14 四神形鏡内区入人牙真 四神形鏡五線浮彫	図版40 5号墳出土遺物⑥鏡三
図版15 2号墳川土遺物②	図版41 6号墳主体部検出状況①
図版16 3号墳土体部検出状況①	6号墳主体部検出状況②
3号墳土体部検出状況②	図版42 6号墳排水溝検出状況①
図版17 3号窓上部上層埴輪状況	6号墳排水溝検出状況②
3号窓前埴輪層地盤状況	図版43 6号窓右室廻廊除去状況
図版18 3号墳遺物出土状況①	6号墳全景
3号墳遺物出土状況②	図版44 6号墳出土遺物
図版19 3号墳遺物出土状況③	図版45 石室系検出状況
3号墳第1次床面検出状況	石室墓元標状況
図版20 3号墳玄室	図版46 土塗高遺物出土状況①
3号墳右側壁	土塗高遺物出土状況②
図版21 3号墳左側壁	図版47 二箇窓完掘状況
3号墳奥壁	土塗高単土塗物
図版22 3号墳奥壁右隅	運搬路遺跡①
3号墳奥壁左隅	図版1 調査前風景
図版23 3号墳側床跡去状況①	式庭トレンチ土層断面
3号墳側床跡去状況②	図版2 SX0.1検出状況
図版24 3号墳側壁裏込め状況	SX0.1遺物出土状況①
3号墳石室底部敷石検出状況	図版3 SX0.1遺物出土状況②
図版25 3号墳全景	SX0.1遺物出土状況③
3号墳断ち割り状況	図版4 SX0.1遺物出土状況④
図版26 3号墳川土遺物①漆器	SX0.1遺物出土状況⑤
図版27 3号墳出土遺物②漆身貝	図版4 SX0.1全景
図版28 3号墳出土遺物③須恵器	SX0.1調査状況
図版29 3号墳川土遺物④漆器・土加器	図版5 I区窓路検出状況
図版30 4号墳土体部検出状況	II区窓路検出状況
4号墳排水溝遺物出土状況①	図版6 SX0.1検出状況
4号墳排水溝遺物出土状況②	SX0.1遺物出土状況

写真目次

■

写真 1 現地説明会風景	13
写真 2 空撮調査作業風景	17
写真 3 2号墳主体部施朱部分剥が取り作業	17
写真 4 作業風景	218

IV 図版 表

I

第1図 ヒスイとヒスイ類似岩の原産地	128
第2図 ヒスイ原石の元素比値 Zr/Sr 对 Sr/Fe の分布および分布範囲	128
第3図 ヒスイ原石の元素比値 Ca/Sr 对 Sr/Fe の分布および分布範囲	129
第4図 ヒスイ原石の元素比値 Na/Si 对 Mg/Si の分布および分布範囲	129
第5図 蓬莱谷古墳群(Ⅰ)出土のヒスイ製玉類の Zr/Sr 对 Sr/Fe の分布	130
第6図 蓬莱谷古墳群(Ⅰ)出土のヒスイ製玉類の Ca/Sr 对 Sr/Fe の分布	130
第7図 蓬莱谷古墳群(Ⅰ)出土のヒスイ製玉類の Na/Si 对 Mg/Si の分布	131
第8図 鹿八戸管下原石の蛍光X線スペクトル	131
第9図 猪玉の原産地及び器での様な缺色の石の原产地	132
第10図 猪玉原石のESRスペクトル	132
第11図 蓬萊谷古墳群(Ⅰ)出土管玉の信号(Ⅱ)のESRスペクトル	133
第12図 猪玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル	133
第13図 蓬萊谷古墳群(Ⅰ)出土管玉の信号(Ⅳ)のESRスペクトル	134
第1表 ヒスイ製造物の原石产地の判定基準(1)	124
第2表 ヒスイ製造物の原石产地の判定基準(2)	124
第3表 蓬萊谷古墳群(Ⅰ)出土の後工製勾玉、H玉、 および軟玉製勾玉の元素分析値の比重と比重	124
第4表 各管玉の原产地ににおける原石群の元素比の平均値と標準偏差値	125
第5表 蓬萊谷古墳群(Ⅰ)出土の後工製管玉の分析結果	126
第6表 蓬萊谷古墳群(Ⅰ)出土の管玉管管下の蛍光X線、ESR結果	127
第7表 蓬萊谷古墳群(Ⅰ)出土のヒスイ、猪玉製玉類の原产地推定結果	127
第8表 試料番号・遺物番号対応表	135
2	
蓬萊谷古墳群(Ⅰ) 2号墳出土四神形鏡	139

付図目次

- 付図 1 鹿草谷古墳群（Ⅰ）調査地形図兼実測図
- 付図 2 鹿草谷古墳群（Ⅱ）地形側量図及び遺構配置図
- 付図 3 2号墳主体部実測図
- 付図 4 3号墳石室実測図
- 付図 5 6号墳石室実測図

I 調査に至る経緯

四国縦貫自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」及び「高速自動車国道法」に基づき、四国4県を連結する幹線道路として計画された。徳島県内では徳島～脇間については昭和48年（1973）10月19日「道路整備特別措置法」に基づき建設大臣から第7次の施工命令が出され（昭和54年3月2日整備計画変更、施工命令）、昭和55年12月19日実施計画の認可、昭和56年1月19日に路線発表がされた。

これは徳島市川内町の徳島I.Cを起点とし、吉野川に平行して西進し、板野郡板野町の沖積平野を横断した後、同郡上板町から阿波郡阿波町にかけて阿讃山麓を通過して脇I.Cを結ぶ区間延長41.4km、用地取得面積259haに及ぶ事業である。

昭和61年4月24日道路局長通達により暫定施工に変更され、62年11月6日徳島～脇間の起工式が行われた。昭和63年5月31日には藍住I.C（追加I.C）の施工命令が出され、6月30日に実施計画が認可されている。

この間徳島県教育委員会（以下「県教委」という。）は昭和60～62年度にかけて脇～板野間、63年度には徳島～板野間の路線に係る分布調査を実施し、埋蔵文化財の実態把握に努めた。これと前後し、分布調査結果を基に県教委と協議を重ねた日本道路公団高松建設局（以下「公団」という。）は、昭和63年6月17日、文化庁に脇～板野間に係る58遺跡の取扱いについて協議を申し入れ、平成元年3月30日、工事の施工に先立って発掘調査を実施する旨の協議を終了した。

一方、県教委では供用が第10次5か年計画に取り入れられ、平成5年が目標となっていることを受けて、63年度に大規模開発に即応した調査体制の整備を図り、平成元年4月1日、財団法人徳島県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）を発足させ、調査に対応することとした。センター発足時には未確定であった徳島～板野間の調査については、平成2年1月22日に10遺跡の取扱いについての協議が終了し、路線内に68遺跡、約360,000m²（暫定分約340,000m²）、事業区域面積のはば13パーセントにあたる文化財対象地が確定した（第1図）。

県と公団との委託契約をふまえ、県とセンターとの委託契約は平成元年6月1日付で締結された。センターでは発掘調査にあたって、機械掘削等工事請負方式と空中写真撮影図化を導入することによって、調査の迅速化に努める方針で臨んだ。しかし、文化財対象地があくまで分布調査結果に基づくものであり、特に工事請負として設計・発注するためには掘削土量の把握が不可欠であるため、試掘調査を先行し、遺構の遺存状態及び層厚の把握に努めた。また、用地取得状況を勘案しつつ、散布地・集落跡・古墳など、遺跡の性格・遺構の累

積数に応じた調査方法、調査工期について検討を行い、調査を実施した。

前述したように、試掘調査を先行する事によって層厚・調査面積を絞り込んだことに加えて、徳島～板野間の沖積平野では現地表面下3m以深に遺跡が存在することから、遺物の採集が行われなくとも、慎重を期して微高地が調査対象地とされていたこともあり、最終の実掘面積は当初見込みに比べて減少した。

平成元年度には、14遺跡14,500m²、2年度は33遺跡76,390m²、3年度は30遺跡35,748m²、4年度は残件であった14遺跡6,826m²について、用地取得がなされた地区から調査を進め、当該区間の調査を完了した（第1表）。

それぞれの調査の進捗状況については、既刊の徳島県埋蔵文化財センター年報を参照されたい。

出土遺物の整理、調査報告書作成業務は平成3年度に一部着手し、4年度から本格的な作業に入った。

本書に収録する蓬華谷古墳群（Ⅰ）・蓬華池遺跡（Ⅰ）は古墳群・古墳関連遺跡であり、調査自体としては工事請負の対象として馴染まないことから平地部の黒谷川宮ノ前遺跡と一緒にして発注することとした。調査は宮ノ前遺跡の本格着手以前に終了させる計画であったが、予想以上の古墳と遺物が出土したため、調査中盤以降には調査担当者2名を残し、調査班の主力を宮ノ前遺跡に移動することとした。しかし、宮ノ前遺跡がこれも予想以上の遺構検出と切り合い関係の煩雑さに加え、諸般の事情から調査期間の調整が必要となったため、蓬華谷古墳群（Ⅱ）では1名で調査を継続・完了させるという、徳島～脇間での調査では最も状況変化に対応を迫られた調査となった。本書は実測図面と記録写真を照合しながらの執筆作業となつた部分が多く、調査時の所見を活かしきっていない恐れが残る。御批判を頂きたい。

調査組織及び整理体制は以下である。

事務局長　日下　昭（平成元・2年度）

佐藤信博（平成3・4年度）

総務課長　吉田　寛（平成元・2年度）

木内正幸（平成3年度）

岡本一仁（平成4年度）

主　　事　佐藤　馨（平成2～4年度）

研究補助員　扶川道代

臨時補助員　田村隆子　上田暁美

岸いくみ　大岸さとみ

福原幸恵

柴田みのり 藤川淑江

調査課長 桑原邦彦（平成元・2年度）

羽山久男（平成3・4年度）

調整係長 菅原康夫（平成元年度）

島巡賢二（平成2～4年度）

技師 森永 進（平成元・2年度技術主任）

堀江隆治（平成3・4年度）

調査係長 島巡賢二（平成元年度）

菅原康夫（平成2～4年度）

調査担当

蓮華谷古墳群（II）

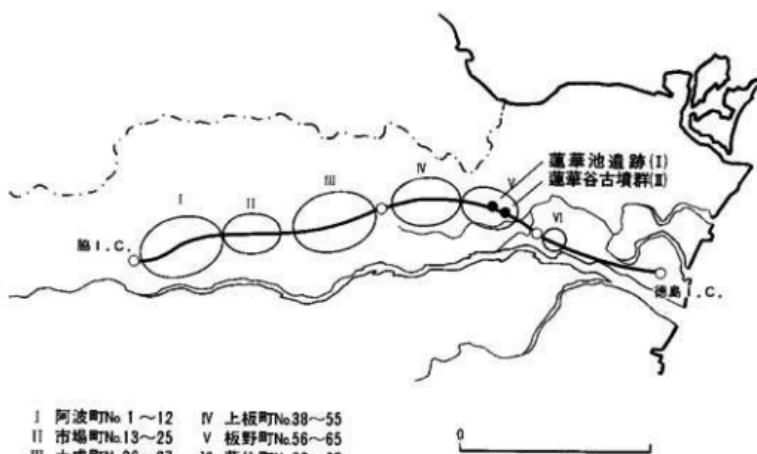
研究員 谷 匠人（当時） 武藏美和（当時）

小泉雅彦（当時） 須崎一幸

研究補助員 北原雅代（当時）

蓮華池遺跡（I）

試掘調査



第1図 四国縦貫自動車道（徳島～脇）路線図

研究員 谷 国人（当時） 武藏美和（当時）

小泉雅彦（当時） 須崎一幸

本調査

研究員 柴田昌児（当時） 山下知之（当時）

向原敬夫（当時） 西 博美（当時）

調査報告書作成業務

研究員 須崎一幸

第1表 四国総合自動車道埋蔵文化財調査地一覧表

遺跡番号	遺跡名	所在地	面積 (ha)				備考
			実測面積	元年度	2年度	3年度	
1	西長峰遺跡	阿波郡阿波町西長峰	170	170			
2	中長峰遺跡	阿波郡阿波町中長峰	100	100			
3	東長峰遺跡	阿波郡阿波町東長峰	30		30		
4	日吉谷遺跡	阿波郡阿波町日吉谷	4,080	1,840	2,240		
5	赤坂遺跡(Ⅰ)	阿波郡阿波町赤坂	800		800		調査報告書第1集所収
6	赤坂遺跡(Ⅱ)	阿波郡阿波町赤坂	50		50		調査報告書第1集所収
7	赤坂遺跡(Ⅲ)	阿波郡阿波町赤坂	1,800	800	1,300		調査報告書第1集所収
8	桜ノ岡遺跡(Ⅰ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	8,000	2,690	5,310		調査報告書第3集所収
9	桜ノ岡遺跡(Ⅱ)	阿波郡阿波町桜ノ岡	240	240			
10	桜ノ岡~東正広 遺跡	阿波郡阿波町小倉	1,300		1,000		
11	山ノ神遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	10		10		
12	山ノ神~八丁原 遺跡	阿波郡阿波町山ノ神	30		30		
13	上高米遺跡	阿波郡市郷町大高米	1,160		900	260	
14	大高川跡~大根 字佐遺跡	阿波郡市郷町大高米	230		230		
15	上喜次蛭子~中佐 古遺跡	阿波郡市郷町上喜来	12,560		11,720	840	
16	八坂遺跡(Ⅰ)	阿波郡市郷町尾間	11			11	
17	八坂遺跡(Ⅱ)	阿波郡市郷町尾間	360	360			
18	八坂遺跡(Ⅲ)	阿波郡市郷町尾間	114			85	29
19	八坂遺跡(Ⅳ)	阿波郡市郷町尾間	2,000	2,000			
20	口吉~金浦遺跡	阿波郡市郷町尾間	3,100	2,850	250		
21	古田遺跡(Ⅰ)	阿波郡市郷町切幡	60		60		
22	古田遺跡(Ⅱ)	阿波郡市郷町切幡	510	510			
23	坤ノ~鶴音遺跡	阿波郡市郷町切幡	60		60		
24	乾山~鶴音遺跡	阿波郡市郷町切幡	850			850	
25	乾山遺跡	阿波郡市郷町切幡	2			2	
26	今瀬~上井遺跡	板野郡上石城町浦池	2,730	2,730			調査報告書第1集所収
27	北原~人寺寺遺跡	板野郡土成町土成	4,890		4,890		
28	前川遺跡	板野郡土成町二成	10,810		7,710	3,100	調査報告書第2集所収
29	椎ノ丸~芝生遺跡	板野郡土成町吉田	3,550		3,550		
30	北原~浜盐遺跡	板野郡土成町吉田	200			200	
31	広原~宮ノ下遺跡	板野郡上牧町宮川内	60		60		
32	向山古墳群	板野郡上牧町宮川内	50			30	
33	幕ヶ丸遺跡	板野郡土成町高尾	1,400		1,400		
34	けやき原~林遺跡	板野郡土成町高尾	210		210		
35	彦谷遺跡	板野郡土成町高尾	7,300		5,650	1,650	
36	佐教田遺跡(Ⅰ)	板野郡土成町高尾	10		10		
37	十束寺遺跡	板野郡土成町高尾	430		430		
38	安楽寺谷墳墓群	板野郡上板町引野	2,140			2,140	
39	開祖無記	板野郡上板町引野	20			20	
40	天神山遺跡	板野郡上板町引野	1,330		1,330		調査報告書第1集所収
41	青谷遺跡	板野郡上板町引野	3,980		3,110	870	調査報告書第1集所収
42	明神池遺跡	板野郡七板町引野	194		80	114	

遺跡番号	遺跡名	所在地	面積 (ha)				備考
			実測面積	元年度	2年度	3年度	
43	柿谷遺跡	板野郡上板町東谷	8,930		3,280	5,650	
44	新造遺跡	板野郡上板町東谷	31			31	
45	神宮寺遺跡	板野郡上板町神宮寺	15,659			11,507	4,142
46	葛浦谷瀬山△遺跡	板野郡上板町神宅	480		130	330	
47	葛浦谷瀬山日遺跡	板野郡上板町神宅	1,980			1,730	250
48	葛浦谷東山古墳群	板野郡上板町神宅	115			115	
49	山田古墳群A	板野郡上板町神宅	2,200			2,230	
50	山田古墓	板野郡上板町神宅	8			8	
51	山田古墳B	板野郡上板町神宅	775			525	250
52	大谷古墳群	板野郡上板町神宅	30				30
53	大谷渠跡	板野郡上板町神宅	180		180		
54	板谷古墳	板野郡上板町神宅	90				90
55	聖天寺遺跡	板野郡上板町神宅	115				115
56	黒谷廻跡	板野郡板野町黒谷	91				91
57	松谷遺跡	板野郡板野町松谷	900		40	860	
58	蓮華谷古墳群(Ⅰ)	板野郡板野町大伏	353			65	288
59	蓮華池遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町大伏	340		340		本報告書引取
60	蓮華谷古墳群(Ⅱ)	板野郡板野町大伏	1,220		1,220		本報告書引取
61	蓮華池遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町大伏	40	40			
62	黒谷川苔ノ前遺跡	板野郡板野町大伏	10,580	130	10,450		
63	古城遺跡	板野郡板野町古城	10,000	240	8,920		840
64	西中富遺跡(Ⅰ)	板野郡板野町西中富	975			975	
65	西中富遺跡(Ⅱ)	板野郡板野町西中富	125			125	
66	東中富遺跡	板野郡板野町東中富	760			550	210
67	前原遺跡	板野郡板野町前原	876			625	251
68	新居領遺跡	板野郡板野町新居	190				190
計			133,484				

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

高知県北部の山岳地帯に源を発し、徳島県の北部を東西に貫流する四国最大の河川吉野川は、古くから暴れ川として有名であり、下流には沖積平野が発達している。その吉野川下流域に位置する板野郡板野町は、吉野川氾濫原の沖積平野と阿讃山脈の400m級の山々が東西に並ぶ山地部で形成されている（第2図）。南側1/3を占める平野部では、吉野川が上板町付近で分流・北上した旧吉野川や、土成町の香川県境に源を発する宮川内谷川などが流れ、自然堤防が形成されているほかは、湿地帯が広がっている。また北側2/3を占める山地部では、阿讃山脈の山々から南へ櫛状に尾根が延びる。尾根の間には黒谷川、犬伏谷川、松谷川などの小さな川が多くみられ、いずれも扇状地が発達している。しかしどんどの川は降雨期にしか流れがみられず、山間部に点在する灌漑用の人工池とともにこの地域の降雨量の少なさを象徴している。

阿讃山脈南縦の山地部と平野部の境付近は、中央構造線が東西に走っている。この断層を境に北は和泉砂岩層、南は三波川帯の結晶片岩層に分かれる。この地質の相違は、吉野川の南北で用いられる石材の違いとなって表れるなど、徳島県の歴史・文化に大きな影響を与えている。

2 歴史的環境

阿讃山脈は板野町の大坂峠付近で最も低くなる。このため北は大坂峠を越えて瀬戸内海に抜け、南は阿波國府へ通じるという街道の分岐点に立地する板野町周辺は、律令時代の南海道郡頭駅が想定されるなど⁽¹⁾、古くからの交通の要衝として知られる。さらに吉野川によって形成された肥沃な沖積平野上に立地することもあって、数多くの遺跡の展開が認められる。

まず平野部において、水田跡や集落跡がいくつか確認されている。黒谷川郡頭遺跡は、数次にわたる調査⁽²⁾によって、弥生時代後期後半から庄内式併行期にかけての大規模な集落跡であることが判明しつつあり、弧帶文を描いた土器による集落内での祭祀と、朱を精製した工房跡によって特徴づけられている。黒谷川宮ノ前遺跡でも池状遺構を伴う弥生時代後半の水田跡が検出されており⁽³⁾、弥生時代にはすでに開発されていた様子が明らかになっている。また黒谷川宮ノ前遺跡、古城遺跡⁽⁴⁾では中世の屋敷地跡も確認されている。特に古墳時代後期頃から遺構が形成され始める黒谷川宮ノ前遺跡は、盛行期は室町時代と考えられているが、掘立柱建物や屋敷地を区画する溝が数多く検出されており、各屋敷地は灌漑水路を共有する形で形成されている。このような平野部の再開発に伴う灌漑用水路の開削と水利の掌握は、中世有力農民層の集村化現象の一端を示す重要な遺構と考えられる。



第2図 蓮華谷古墳群（II）・蓮華池遺跡（I）周辺遺跡分布図

一方山地部、特に阿瀬山脈南麓の尾根上には、古墳が多く築かれている。前期古墳の実態はまだよく分かっていないが、中期古墳については確認されているものも多い。昭和33年に県史跡に指定された、5世紀初頭築造の前方後円墳と考えられる愛宕山古墳は、後円部中央に結晶片岩を小口積みにした竪穴式石室を主体部に持ち、短甲片のはか銅鏡、鐵鏡、鐵刀などが出土している。この愛宕山古墳での銅鏡の大量副葬は、このような鏡の副葬形態の末期のものであり、ほぼ同時期と考えられている吉野川南岸の徳島市の恵解山古墳群において、新形式の鐵鏡の大量副葬が行われていることと対比して、その属する政治的・軍事的機構の

違いを指摘する意見もある⁽⁵⁾。このほか、直径20mほどの円形の積石塚で、箱式石棺を内部主体とし、朱、銅鏡、刀剣の出土を伝える阿王塚古墳や、6基の中古墳が確認され、その中の1号墳は箱式石棺を内部主体とし、仰臥伸展の人骨、朱、直弧文を持つ鹿角装鉄剣を出土した韓崇山古墳群などが知られる。韓崇山古墳群では、畿内から瀬戸内海沿岸に多くみられる、最下段の凸帯に断続ナデ技法を施した円筒埴輪片なども発見されている⁽⁶⁾。

後期古墳は、両袖式の横穴式石室で、徳島県では2例しか確認されていない皮袋形提瓶が出土している大塚古墳や、結晶片岩の天井石が用水路にかかる橋として利用されている平山古墳が知られる。中でも平山古墳は、石室内に徳島県では「段ノ塚穴型」石室にしかみられない石棚を持っていたと考えられており、もしそうであるならば吉野川中流域に限定される「段ノ塚穴型石室」の分布圏の再検討をはじめ、古墳時代後期の集団関係の理解に重要な視点を与えるものと考えられる。また近年、板野町から上板町にかけての阿波山脈南麓地域では、古墳群単位での調査が相次いでおり、未だ把握されていない古墳時代後期のこの地域の具体相を明らかにする資料として期待されている。

板野町は重要な遺跡の宝庫であるにもかかわらず調査例が少ない上、さらに交通の便が良いこと、中央構造線による破碎帶の土砂が多いことなどが災いして、山々で開発や土取りが盛んに行われた結果、破壊された古墳も多い。そのような状況の中で、蓮華谷古墳群(II)、蓮華池遺跡(I)は、板野町を含めた阿波山脈地域の古墳時代の様相を明らかにする上での、重要な資料の一つとなり得るものと考える。

- (1) 「南海道・・・阿波國驛馬石段(限、京本貞本作撰)。郡頭各五疋。」(延喜式 卷第二十八兵部省)
- (2) 「黒谷川郡頭遺跡」I～V 徳島県教育委員会
- (3) 財団法人徳島県埋蔵文化財センター編『徳島県埋蔵文化財センター年報』Vol.2 1991
- (4) 注(3)文献
- (5) 松木武彦「古墳時代前半期における武器・武具の革新とその評価」『考古学研究』39-1 1992
- (6) 藤川智之「徳島県の埴輪に関する一、二の問題」注(3)文献

参考文献

- 『板野町史』 1971
皆原康夫『日本の古代遺跡 37 徳島』保育社 1988
天羽利夫・岡山真知子『徳島の遺跡散歩』徳島市立図書館 1985



III 蓮華谷古墳群（Ⅱ）

- 1 本章は、四国縦貫自動車道建設に伴う、蓮華谷古墳群（Ⅱ）の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査及び報告書作成の実施期間は次の通りである。
- ・発掘調査期間 平成2年6月11日～平成2年10月4日
 - ・報告書作成期間 平成4年4月1日～平成5年3月31日
- 3 本章の挿図番号・遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
- 4 ①石室側壁や袖部の左右は、奥壁から開口部を見た場合の部位を指す。
②床面礎床は構築順に第1次、第2次とする。

遺跡抄録

遺跡名	蓮華谷古墳群（Ⅱ）
読み	れんげだにこふんぐん
所在地	板野郡板野町大伏字蓮華谷108-3 X=126.585～126.665 Y=87.238～87.285
種別	古墳
時代	古墳
主な遺構	古墳・石室墓・土壇墓
主な遺物	銅鏡・鉄器・装身具・須恵器

1 調査の経過

(1) 調査の経過

蓮華谷古墳群（II）は、阿瀬山脈南麓の南東方向に延びる標高約14～27mの尾根上に立地する。從来より徳島県遺跡分布図に記載されていた周知の古墳群である。分布調査によって1,000m²が調査対象面積としてあげられていたが、調査の過程において、遺構の広がりを考慮した結果、調査面積を拡大して1,220m²を対象とすることになった（第2図）。調査期間は平成2年6月11日から同年10月4日までである。

調査を始めるにあたっては、尾根上にある日本道路公団の基準点を通り尾根筋に沿う線をもって任意の基準線とし、その基準線に沿って5×5mのメッシュを設定した。調査区西隅より南東側へアラビア数字を、北東側へアルファベットを配し、その組み合わせでグリッドを表現することとした。このグリッド設定用の基準線は、國土座標第5座標系のY軸に対して約34°西に振っている（第1図）。

なお遺構番号については、まず調査対象地域外に確認されている古墳1基を1号墳とし、調査区北側より順に2号墳、3号墳・・とした。

(2) 調査日誌抄

1990年

6月5日 伐採作業開始。

6月6日 調査区中央付近の樹の除去に伴う
慰霊祭に参加。

6月11日 伐採作業終了。測量業者による20
mメッシュ杭打設。

6月12日 調査前地形測量開始。

6月15日 尾根筋沿いに杭を打設、これをも
とに調査区にグリッドを設定する。

6月18日 調査前地形測量終了。表土除去、
2号墳墳丘検出作業開始。

6月21日 2号墳主体部検出作業開始。鉄剣
出土。

6月22日 3号墳墳丘・周溝検出作業開始。

6月25日 4号墳周溝検出作業開始。2号墳
墳頂部にて壺形土器出土。

6月26日 2号墳主体部実測開始。

7月4日 3号墳主体部掘り下げ開始。土塙
墓検出・実測。土塙墓より曲刃鎌出
土。

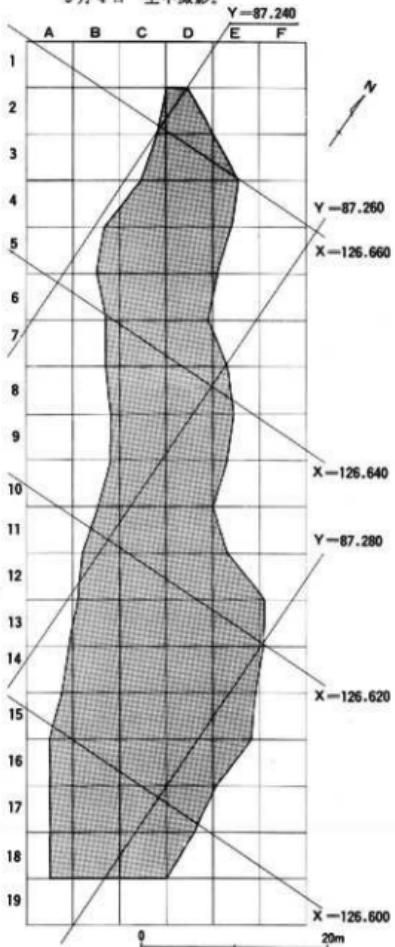
7月5日 4号墳主体部検出作業開始。土塙
墓実測終了。



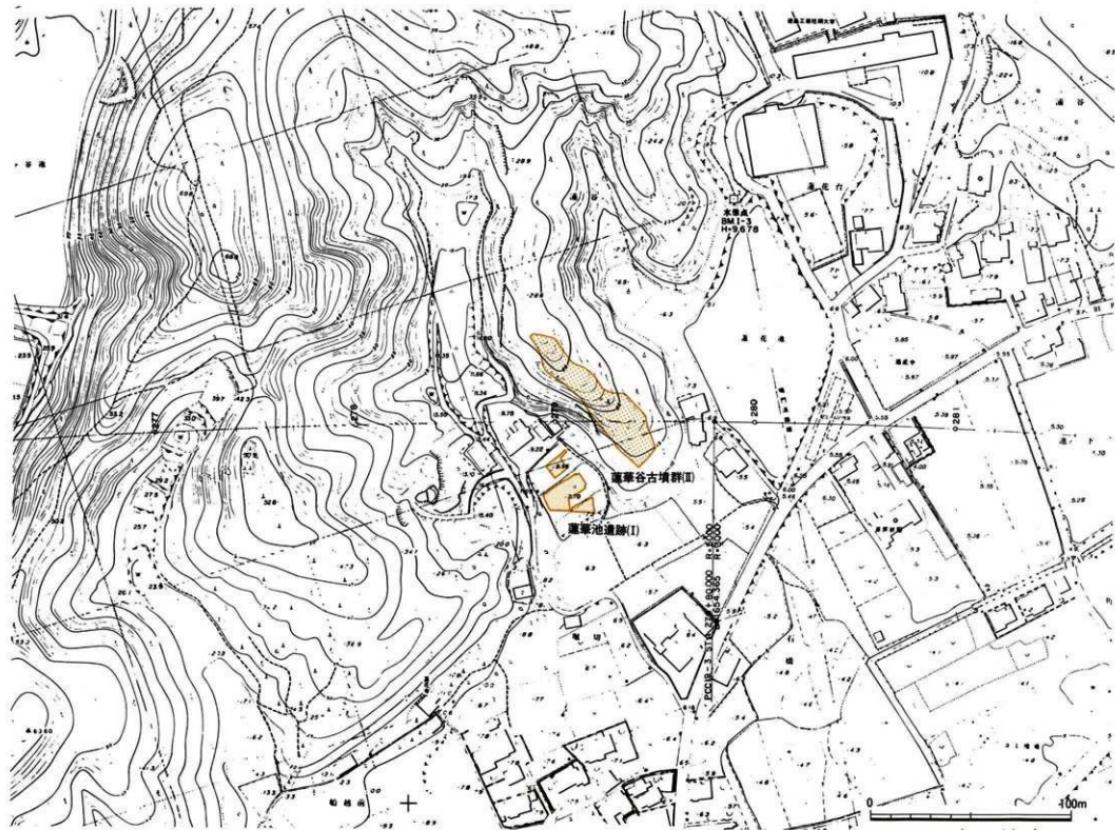
写真1 現地説明会風景

7月6日 2号墳棺床上部堆積層掘り下げ開始。
 7月9日 石室墓主体部検出作業開始。3号
墳より土師器壺出土。
 7月10日 2号墳主体部に朱の広がり確認。
2号墳より銅鏡・鉄斧出土。
 7月11日 6号墳主体部・周溝検出作業開始。
 7月13日 2号墳床板検出終了。3号墳・6
号墳、第2次床面検出作業開始。7
号グリッドにて5号墳確認、掘り下
げ開始。
 7月16日 石室墓主体部実測開始。
 7月17日 石室墓主体部実測終了。6号墳排
水溝検出。
 7月18日 4号墳床面実測開始。6号墳排水
溝掘り下げ開始。5号墳より鉄製軒
鉢車・水晶製切子玉出土。
 7月23日 5号墳主体部・6号墳第2次床
面実測開始。
 7月26日 3号墳第2次床面実測開始。3・
4・6号墳周溝土層図作成・光沢。
 7月31日 5号墳主体部実測終了。
 8月2日 4号墳排水溝掘り下げ開始。6号
墳排水溝実測開始。
 8月3日 6号墳排水溝実測終了。
 8月7日 3号墳追跡床面実測終了、同床面
下掘り下げ。
 8月17日 6号墳第2次床面実測終了。
 8月20日 4号墳排水溝土層図作成。
 8月21日 台風接近の為防災作業を行う。
 8月22日 暴風雨の為作業中止。県庁にて、
調査内容についてのプレス発表。

8月25日 現地説明会。
 8月27日 3号墳・6号墳、第1次床面・側
壁実測開始。
 8月28日 4号墳床面実測終了。
 8月31日 6号墳第1次床面・側壁実測終了。
 9月4日 空中撮影。



第1図 蓮華谷古墳群(II) グリッド配置図



第2図 蓮華谷古墳群(II)・蓮華池遺跡(I)調査位置図

9月6日 3号墳第1次床面・側壁実測終了。土壇基断ち割り、調査終了。

9月7日 2号墳礫床除去・礫床検出作業開始。5号墳・6号墳・石室基断ち割り。石室基調査終了。

9月10日 3号墳側壁石除去・側壁基底部敷石検出作業開始。5号墳・6号墳調査終了。

9月11日 2号墳礫床実測開始。3号墳墳丘断ち割り。

9月13日 4号墳排水溝実測、墳丘断ち割り。4号墳調査終了。

9月18・19日 台風接近の為作業中止。

9月21日 2号墳礫床除去作業開始。

9月26日 3号墳側壁基底部敷石実測開始。

9月27日 2号墳主体部断ち割り開始。3号墳側壁基底部敷石実測終了、主体部断ち割り。3号墳調査終了。

10月4日 2号墳主体部実測、同墳丘断ち割りともに終了。2号墳調査終了。



写真2 空操固化作業風景



写真3 2号墳主体部施朱部分剥ぎ取り作業

2 調査前の状況と遺構の配置

(1) 調査前の状況

本遺跡の調査区は、南東に延びる尾根の標高約17~27mの地点にあり、調査前は松が植林された山林であった。尾根筋に沿って下る道と、その道から分岐し山の西側へ下る道の2本の小道がみられた。尾根鞍部の幅10m程度はやや平坦な部分であったが、そこから裾に向かっては、ほとんどの斜面が削平を受けて崖状になっていた。尾根鞍部の道の周囲にも、植林に伴うものとみられる小さな段カットが数多くみられ、特に調査区南東端には大小様々なくぼみがみられ、水溜まりとなっているものもあった。

伐採作業後に地形測量を行った結果、5つの墳丘らしき高まりを確認し、遺構の存在を想定した。第1の高まりは調査区北西隅の標高約27mの地点に、第2の高まりはそのすぐ南の26m地点に、第3は調査区中央部の24m地点に、第4はそこから15mほど南の21m地点にそして第5は南東隅の19m地点にあり、いずれも周辺に段カットがみられるなどの地形の改変が行われていた。また第4の高まりの上には、小さな石積みと祠があった(付図1)。

全調査区を通じて、遺構の上面には、10cmほどの表土の下に、尾根鞍部で5~10cm、調査区端では所によっては50cm以上、粒子が細かくしまりのないにぶい黄褐色の砂質土が堆積していた。

(2) 遺構の配置

まず調査区北側(奥)の最も高い地点に主体部の一部が調査区外になる前期古墳1基(2号墳)があり、尾根先端部へ向かって後期古墳が並んでいる。後期古墳は、2号墳のすぐ南に北側に周溝を持つ3号墳が、統いて北西部に周溝を持つ4号墳があり、さらにその南に5号墳と土壙墓が尾根をはさんで向かい合っている。そして北側に周溝を持つ6号墳があるが、遺構の存在が想定された第4の高まりには、遺構は確認できず、また周溝のみ確認された7号墳の主体部は確認することができなかった(付図2)。

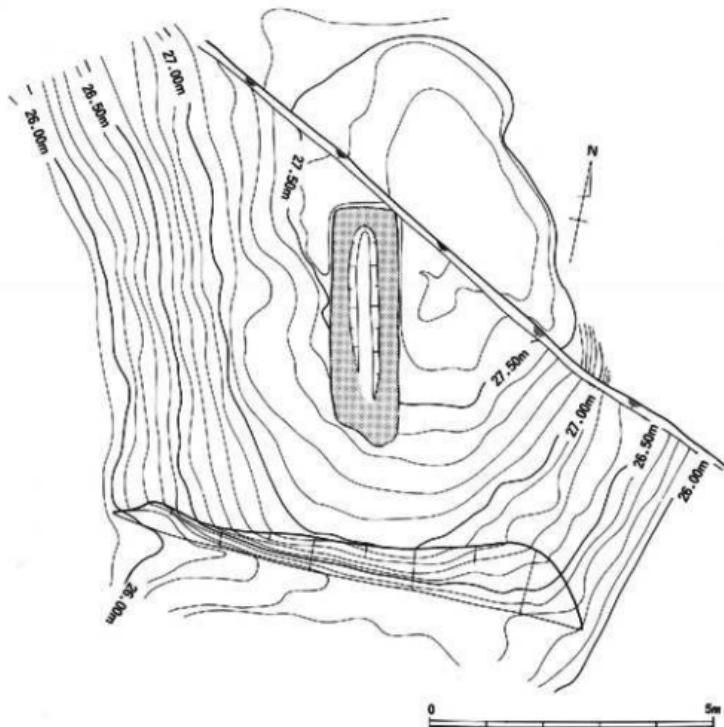
3 遺構と遺物

2号墳

墳形・規模

調査区北端、標高27.7mの位置に形成されており、墳丘の約1/3と主体部の北東隅は調査区外にある。2号墳から北約50mの間は、ほぼ平坦な尾根鞍部となっており、本調査に先立った現地調査では調査区外北に堅穴式石室と推定される、石材が露出した円墳が確認されたため、これを1号墳とし、以下尾根先端にむけて順次番号を付した⁽¹⁾。

2号墳は墳丘測量では椭円形を呈し、南北両裾に周溝等の存在が予想されたが、調査の結



第3図 2号墳墳丘測量図

果、地山を削り出し、若干の山土を盛って墳丘を構築していることが判明した。外表施設等は検出されなかった。墳丘東西幅は27mコンター以下では急峻な斜面となっており、南裾は3号墳構築に伴う周溝掘削により削られており、明瞭な基底部は認められない。北東部分は後世の開墾により大きく削平を受けており、墳丘の遺存状況は良好とはいえない。後述するように3号墳以下がいざれも墳丘の北裾のみを周溝によって区画していることや墳丘測量図からは本墳においても、北裾に周溝が存在する可能性は高いが、調査地外にあるため確認には至らなかった。

従って墳丘を明確に区画する施設はないといえるが、27mコンターラインを墳裾とすれば、東西径6.5～7m、南北径約9～10m、残存する墳高70cmの精円形の円墳となり（第3図）、徳島県の前期以降の円墳規模と傾向の一一致を見る⁽²⁾。

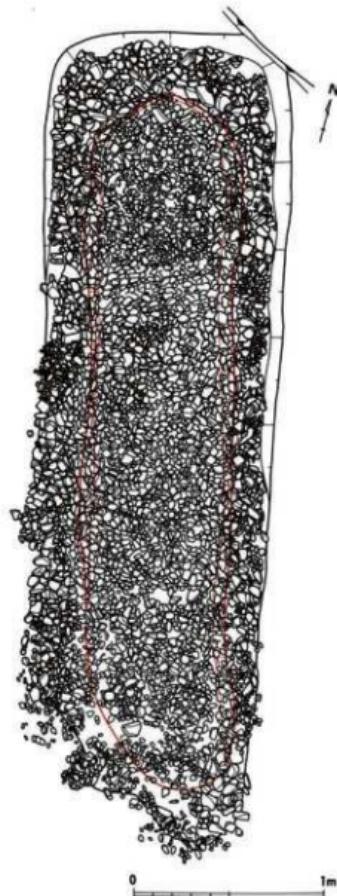
主 体

腐植土及び残存封土約12cmを除去した段階で検出された、地山を掘り込んで構築された墓壙底に礫石を伴う粘土構成である。棺上面の被覆状況については明らかにしえないが、残存封土の観察では側面を山土混じりの粘土で被覆する。

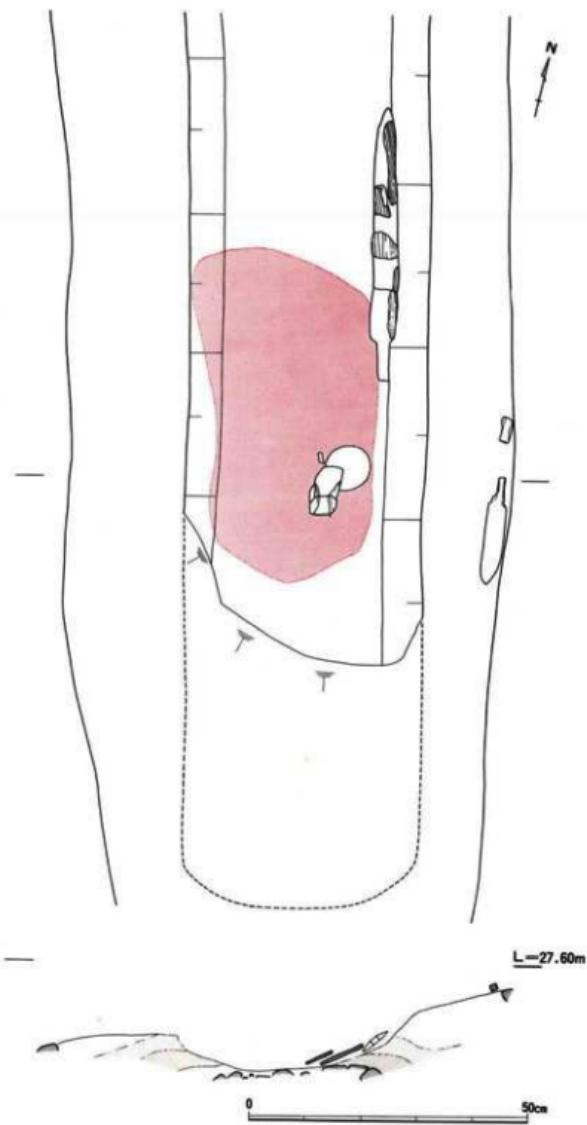
掘り下げ段階の土層断面観察で棺の立ち上がり痕跡が確認された。N15°Wの主軸をもち、墳丘中軸からやや西にずれた位置にある。

墓壙自体は長さ4.4m、幅1.2mの隅丸長方形で、検出面からの深度は30cmを測る。壙底にレベル差はなく、墳丘流出あるいは削平を受けていたため、墓壙南端部の形状は明瞭ではない。

主体構造は墓壙底に礫石を充填し、その上部に粘土棺床を設置している。礫石は壙底全面に敷かれるが、壙底に指頭大のバラス状の砂岩を約3cmの厚さに充填したのち、第15層の明



第4図 2号墳基底部礫床実測図



第5図 2号墳主体部遺物出土状況(1)

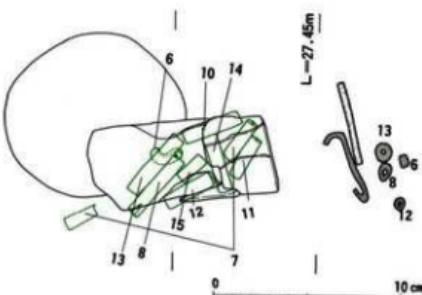
黄褐色粘質土と灰白色粘質土の整層及び第14層の明黄褐色粘質土を突き固め、上面がU字状を呈する棺床を形成する。その範囲は長さ3.8m・幅約50cm、3.3m・70cmである。棺はこの段階で設置されたものと考えられ、ついで墓壇四周、内法を隅丸状に5cm大の砂岩円礫・亜円礫を約18cm積み上げた後、第11・10層の明黄褐色粘質土を充填し、棺の固定を図っている（付図3）。第10層の充填段階では礫石は被覆されている。短軸断面では棺床の上面は粘性のない黄褐色砂質土の被覆が認められる。粘土の最大厚は約20cm、棺床部で4cmを測る。棺位置はやや南に寄っている。

棺材は検出されていないが、粘土棺床の平・断面形状から棺は長さ約2.8m、幅45cm、深さ22cmを測る。木材の1/3程度の棺底部を固定しており、刳抜式木棺と考えられる⁽³⁾。第3・4・5層は墓壇の掘り下げ段階で立ち上がりが確認された棺材の痕跡であるが、これによれば棺の厚さは側方で約5cmとなる。棺床に高低差はない。

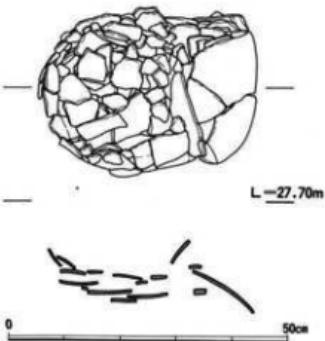
小口の状況は南小口部分では第6層・浅黄橙色シルトが小口板の痕跡と思われ、小口板の固定と考えられる第12・13層については明らかに色調の違う粘質土を使用している。小口板が底板より外に出る形状と判断された。従来徳島県で調査されてきた、粘土棺床の小口部分が緩やかなカーブを描くことから舟形木棺と理解されている例については、小口部の土層状況の再検討を行う必要があろう。棺内の土層堆積には棺上面を被覆したと思われる灰白色粘質土の落ち込みが一部にみられた。

遺物の出土状況

棺内遺物は南小口部寄りで検出されたが、棺中軸より東に置かれている。棺底から緩やか



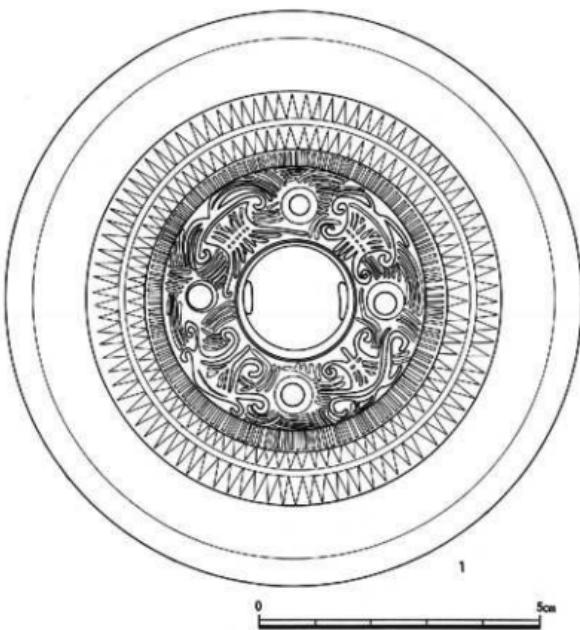
第6図 2号墳主体部遺物出土状況(2)



第7図 2号墳主体部遺物出土状況(3)



第8図 2号墳主体部出土遺物(1) 四神形鏡

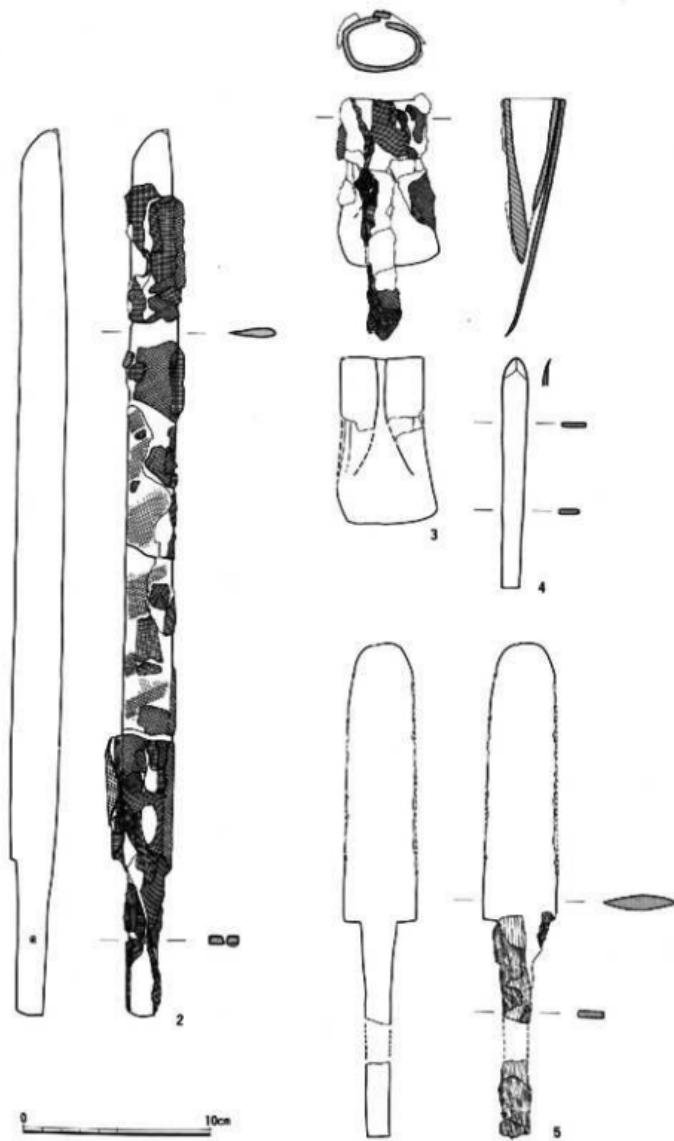


第9図 2号墳四神形鏡実測図

に立ち上がる位置に刃先を北に向けた鉄刀があり、頭部右上位と推定される位置からは鉄斧・鏡・玉が重なって検出された。鉄斧は刃先を南に向いているが、袋部の合わせ部分に沿って刃先に向けて背面を上にした鉄鎗が付着しており、袋部全面に二・三重に重ねた布目が遺存する。さらに内側には管玉3点が巻き込まれていたことから、これらは束ねて布で包まれたことがうかがえる。

鉄斧下には斜めに立てかけられたような状態で鏡面を上にした銅鏡がある。銅鏡下には北より横方向に4縱方向1、南に横方向3の管玉が検出され、さらにその下からは勾玉が出土した。管玉にも布目をとどめるものがあり、遺物の集中と共に下部において木質がわずかに遺存していたことから鉄斧・鏡・玉は匣に納められて副葬されたものと推定される。

棺内にはほぼ全面にわたって朱の塗布が認められたが、特に頭部周辺は南北60cm、東西30cmの範囲に顕著であり、最大厚2cm、最も薄い部分で5mmの堆積がみられた。



第10図 2号墳主体部出土遺物(2) 鉄器

棺外遺物では鉄斧・鏡の東側で刃先を南に向けた鉄劍1が被覆粘土上面に置かれていた。南小口外側には土師器広口壺が口縁部を東に向け、横倒しの状態で検出されたが、円碟に接して据え置かれたものと考えられる。

遺物

銅鏡（1）

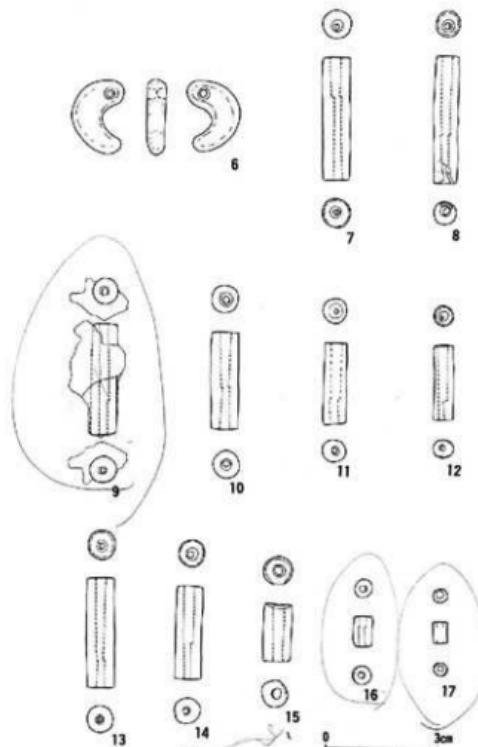
『徳島県埋蔵文化財センター年報Vol.2』では四獸形鏡と報告されたが、検討の結果、仿製の四神形鏡と改めた。面径10.2cm、重量148.8gを計る。部分的に表面が剥離し、鋳膨れが僅かにみられるが、文様は鮮明で、遺存状態は良好である。紐径1.8cm、紐高0.7cm、幅1.6cm、高さ0.4cmの蒲鉾形の紐孔をもち、無座に二重の巻線を配する。

内区は厚さ2~3mmで、4個の乳を配しその間に求心的に四神を配置する。神像頭部は描かれず細線表現であるが、それぞれ左右対称の領布、台座と考えられる線影状の表現を呈する。個々の図象には末端の外巻き、内巻き表現に差異がある。

外区は櫛齒文帯1及び二重の巻線によって区画された鋸齒文帯2があぐり、縁部は5mmの厚さをもつ僅かな斜縁となる（第8・9図）。

鉄刀（2）

全長47.5cm、刃部長39.5cm、茎部長8.5cm、刃部幅2.5cm、厚さ0.5cm、茎部中央に目釘孔が一孔ある。刀全体に目の細かな平織りの布が三重に巻かれた痕跡があり、さらにその外側には目の粗い布目が取り巻いていることから、鞘に納められた状態であったと考えられる（第10図）。



第11図 2号墳主体部出土遺物(3) 勾玉・管玉

有袋鉄斧（3）

全長8.9cm、刃部幅5.2cm、袋部幅4.1cm。木柄着装部を約1.4cm折り返してつくり出している（第10図）。

鉄鎧（4）

全長12.9cm、幅1.0cm、厚さ0.3cmの基のがい、刃部と基部幅が同幅で連続するタイプのもので、古瀬清秀氏分類Ⅱa類⁽⁴⁾に属す（第10図）。

鉄劍（5）

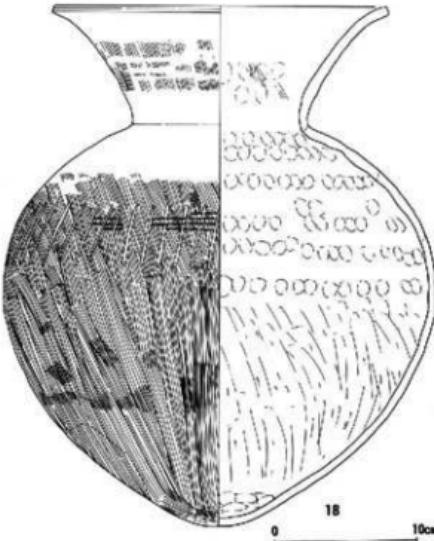
基の一部を欠損する。復元全長26.4cm、刃部長15cm、基部長11.4cm、刃部幅3.9cmで、断面凸レンズ状を呈する。切先部は丸くなっている。研ぎ減りの可能性が考えられる。関は直角にひらく。基部には木質の残存が認められるが、鞘の痕跡は確認されない（第10図）。

勾玉（6）

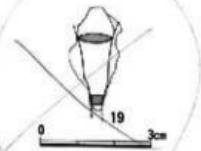
全長1.87cm、厚さ0.55cm。緑色と綠白色が斑状の翡翠製C字形勾玉で、両面穿孔である（第11図）。

管玉（7～17）

銅鏡下の一群（7・8・10～15）と鉄斧と共に布で巻き込まれていたもの（9・16・17）がある。いずれも両面穿孔であり、（8）は両端面に打削痕をとどめる。また（7）は検出地点が異なるが、接合関係にあり、一端に剥離痕をとどめる。玉の配列からは打削副葬された可能性を残す。（14・15）は碧玉、その他はグリーンタフ製である（第11図）。



第12図 2号墳主体部出土遺物(4) 土師器



第13図
2号墳墳丘出土遺物

土師器広口壺（18）

器高36.8cm、口径23.3cm、体部最大径30.4cm。口頸部は緩やかに外反し、口縁端部に非常に弱い1条の擬凹線を施す。体部中位に最大径をもつ倒卵形を呈し、尖底丸底である。頸部外面タテハケのちヨコナデ、体部外面タテハケのち上半に放射線状のヘラミガキを施す。内面は上半ユビオサエ、下半ヘラケズリで、内底面にもユビオサエをとどめる。胎土中に結晶片岩粗粒を含み、淡赤褐色を呈する。体部外面には朱の付着が認められるが、内面には確認されない。形態・調整技法とも東阿波型土器の最新様相を呈しており、東阿波型広口壺が確認される大阪府壹振遺跡S E 0 3出土資料⁽⁵⁾と同時期である（第12図）。

その他の遺物

鉄鎌（19）

封土からの出土であり、厳密には本墳に帰属する根拠を欠くが、参考資料として図示しておく。柳葉形鉄鎌で、残存長5.5cmの向丸造。茎断面は方形である（第13図）。

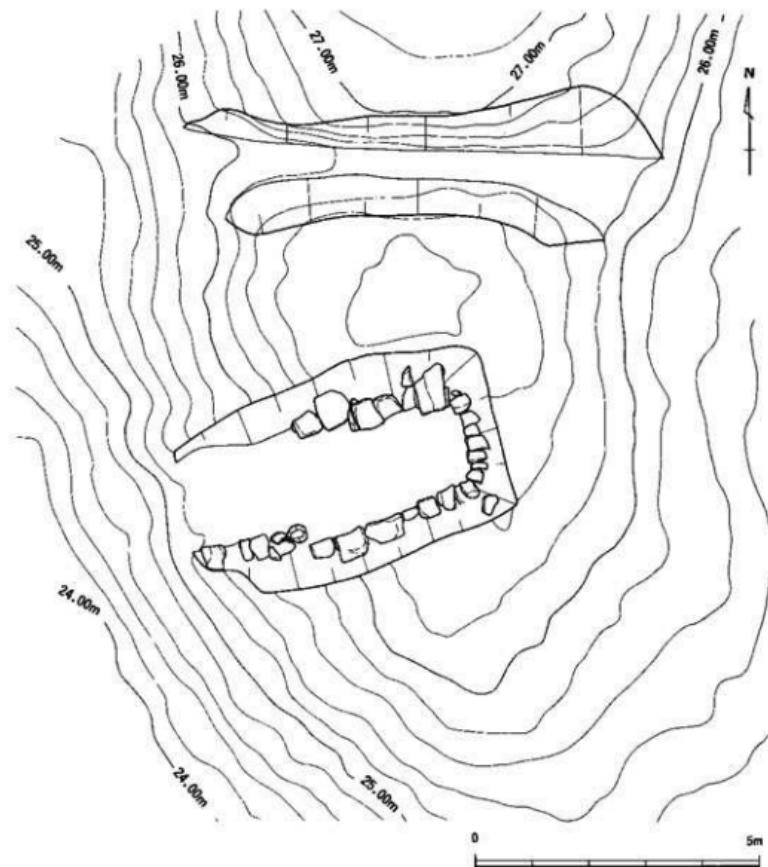
- (1) 本古墳群の西には蓮華谷古墳群（I）があり、関連事業で2基の円墳を調査している。従って本報告で扱う古墳の正式名称は蓮華谷古墳群（II）2号墳、3号墳、4号墳であるが、煩雑さを避け、本文中では単に2号墳、3号墳、4号墳と呼称する。ただし、蓮華谷を冠する場合に限り、蓮華谷（I）1号墳、2号墳、蓮華谷（II）2号墳、3号墳、4号墳と呼び分けるものとする。
- (2) 菅原康夫・國木健司「四国東部の円墳」『古代学研究』123 1990
- (3) 都出比呂志氏の指摘する大阪府加美遺跡C類木棺のような棺構造の可能性も否定できないため（都出比呂志『堅穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部国史研究室 1986）、ここでは削竹形木棺の可能性を含め、刳抜式木棺として包括しておく。
- (4) 古瀬清秀「農工具」『古墳時代の研究』8 1991
- (5) 大野 薫『壹振遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 1984

3号墳

(1) 墳丘・周溝

本墳は、2号墳のほぼ南、4号墳の北西の標高25~26mの地点に位置し、今回調査の後期古墳の中で最も高い地点にある。北側に2号墳の墳丘を切り込んで掘削された周溝を持ち、主体部には横穴式石室が構築されている。

周溝は、中央部の幅約1.8m、深さ約60cmで、断面はU字形を呈する。周溝内には数次にわ



第14図 3号墳墳丘測量図

たる砂質土の堆積がみられたが、遺物はほとんど検出されなかった。また墳丘の周囲をめぐらせず、尾根を区切るような形で構築してあることから、墓域の区画という性格が強いものと考えられる（第14図）。

墳丘は、後世の開墾や土取りによって西側半分が大きく削り取られている。調査時点では北側にのみ盛土が認められた。墳丘盛土の残存高は約43cmで、盛土中からは遺物は検出されていない。盛土は、基底部を形成する部分（38～40層）、墳丘の大まかな形を形成する部分（31～37層）、墳丘の最も外側で外形を整える部分（30層）という大きく3つのグループに分けることができる（第15図）。

墳丘の構築は、①地山面を整形してほぼ水平な面をつくり、凹部にはレベル調整のために明黄褐色のシルト（39・40層）を敷く。②その上面に炭化物混じりのにぶい黄褐色シルト（38層）を突き固めて基底部を形成する。③黄褐色と明黄褐色のシルト（31～37層）を互層に叩き締めて墳丘の大まかな形を形成する。④さらにもう1層の黄褐色シルト（30層）を盛り上げて墳丘の形を整える、という工程で行われたものと考えられる。なお墓壇は墳丘構築後もしくはある一定レベルまで墳丘を構築した後、頂部より掘削されている。墳丘規模は、基底部の地形面より推測すると、直径8m程度の円墳と考えられる。

（2）主体部

石室の掘り方は、長さ5.7m、幅3.6m、残存する深さ約1.3mの隅丸長方形を呈するが、南側の羨道部に対応する部分は屈曲してやや幅が狭くなっている。

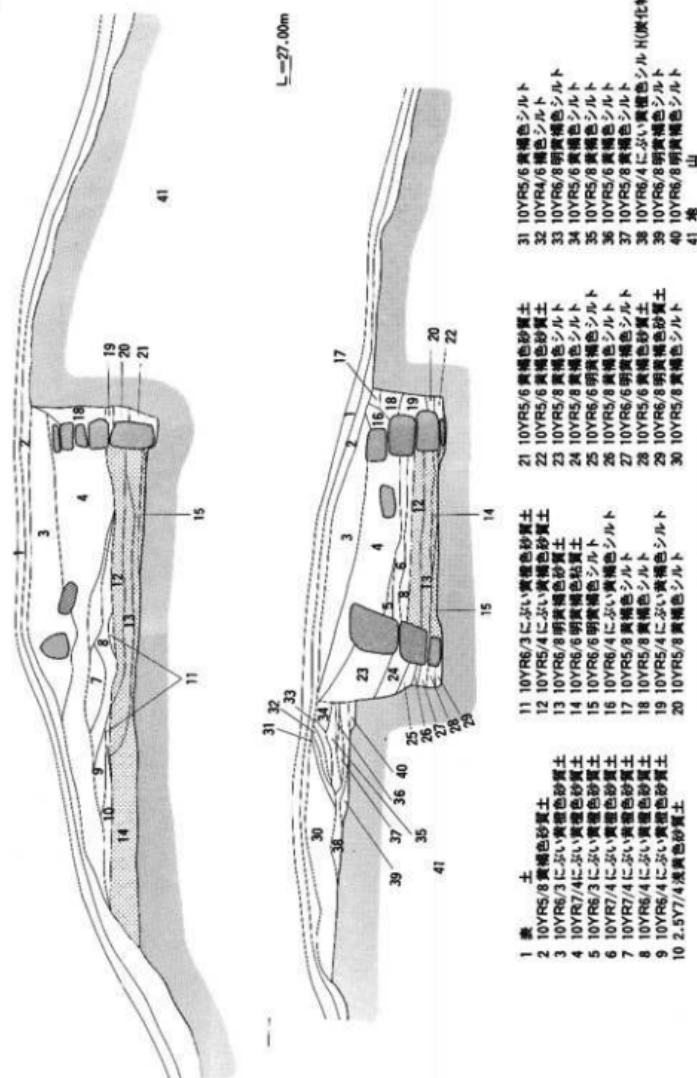
本墳の主体部には、主軸方向をN72.5°Eにとり、西南西方向に開口する横穴式石室が構築されている。玄室の長さは3.1m、幅は奥壁付近で1.7m、中央部1.9m、玄門付近で1.8mとやや胴張り気味の平面プランを持つ。なお石室の構築にあたってはすべて砂岩が用いられている（第16図）。

羨道・玄門

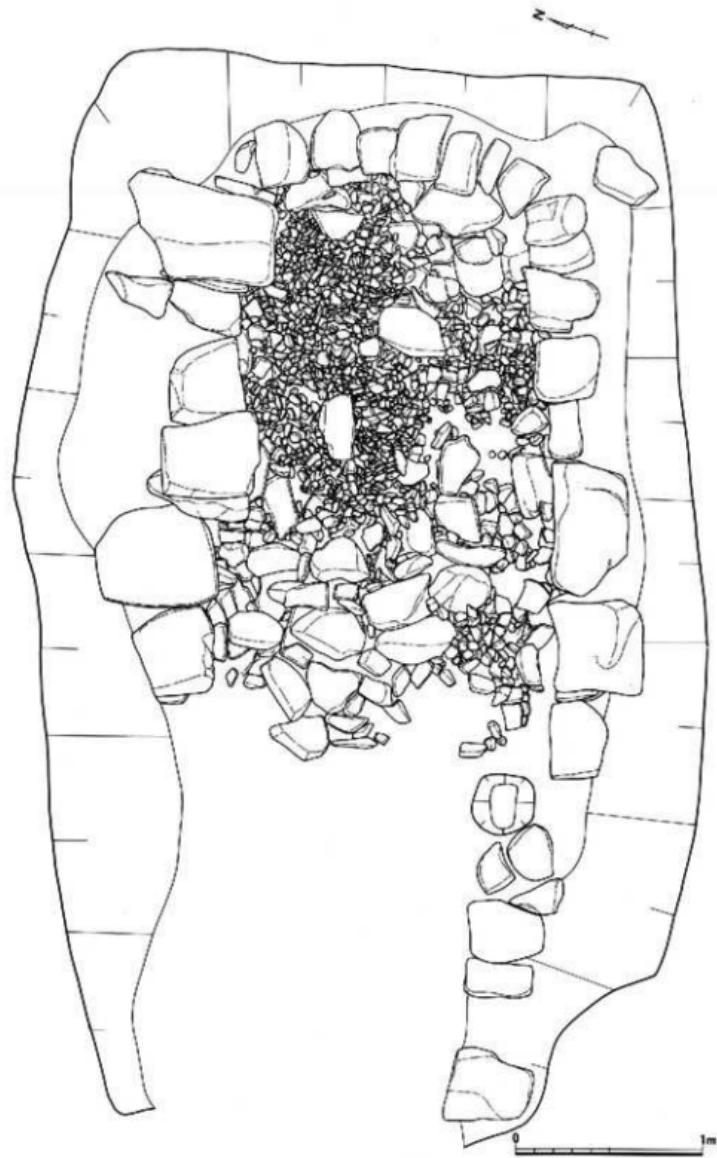
羨道は長さ約2m、幅約1.3mと推定されるが、玄門側より開口部側に向かって若干幅が狭くなっている。壁は部分的に1段残存する程度で、そのほとんどを欠く。床面には礫が敷かれていた形跡はみられず、明黄褐色粘質土（14層）を貼り付けることによって床面としたものと考えられる。羨道部からは遺物はほとんど検出されていない。

玄門部については、右側壁は石材が全く残存していないため詳細は不明である。左側壁については石材の抜き取り痕や羨道部の壁の様子から、袖を形成していたことが認められるものの、立柱石の有無や袖部が突出していたかどうかは明らかではない。また上層堆積から考えて仕切石は当初より設置されていなかったものと考えられる。残存する羨道部の石材の配

L=27.00m



第15図 3号填塗丘断面図 (1/60)



第16図 3号填石室平面図

置や掘り方の形状から、左片袖式の石室であった可能性が高いが、両袖式の可能性も否定できない（第15・16図）。

玄室内の土層堆積

玄室は、検出段階において既に天井石ではなく、石室内には砂質土が堆積していた。3・4層は、にぶい黄橙色砂質土をベースに、褐灰色砂質土がブロック状にはいっており、よくしまった部分としまりのない部分が混じり合っている。これらは天井石の抜き取り等の攪乱後に堆積したものとみられ、天井石や側壁上段部分にあたるとみられる崩落石を多く含んでいる。5～11層はよくしまった砂質土としまりのない砂質土が薄い層をなし、交互に堆積している。石室の再利用が行われた後、攪乱が行われるまでの間の堆積土である。12層は第2次床面直上の堆積土で、やや粘性があり小礫を含んでいる。再利用時の遺物はこの層の上面より、第2次床面に伴う遺物はこの層中より検出された。13層は第2次床面が構築されている面に、14・15層は第1次床面が構築されている面にそれぞれ対応する。特に14層は粘性が強く、羨道部側が厚くなっている。砾床による床面構築に先立って明眞褐色粘質土を貼り付け、敷石を行う玄室内に行わない羨道部とのレベル調整を行うと同時に、羨道部の床面としたものと考えられる。16～29層は建石材の固定のための裏込めの土とみられる。大型の石材を用いた部分には1段積むごとに1層、奥壁上段のように小型の石材を用いている部分には数段ごとに1層詰めている（第15図）。

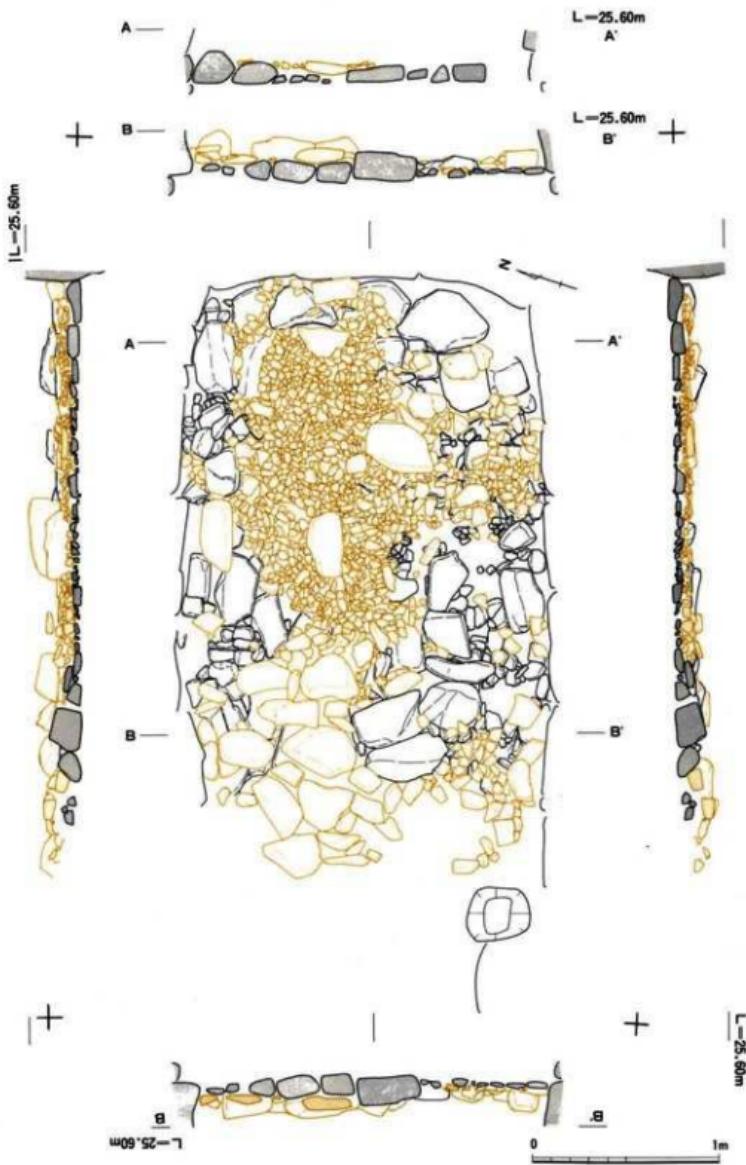
玄室の構造

右側壁は7段約1.4mが残存する。奥壁側と玄門側では石材の積み上げ方に差異がみられる。奥壁側は、下2～3段に一辺40～50cm程度のやや大型の石材を配して平積みし、それより上段には1辺30cm程度の小型の石材を積み上げている。また中位より上の石材は天井石架構のため小口積みして持ち送っている。玄門側には1辺50～80cmの大型の石材を配し、隙間を埋めるように1辺20～30cm程度の小型の石材を用いている。左側壁は4段約1mが残存する。右側壁同様奥壁側は下段に40～50cm大の石材を、上段に30cm大の石材を、また玄門側には50～70cm大の石材が用いられている。

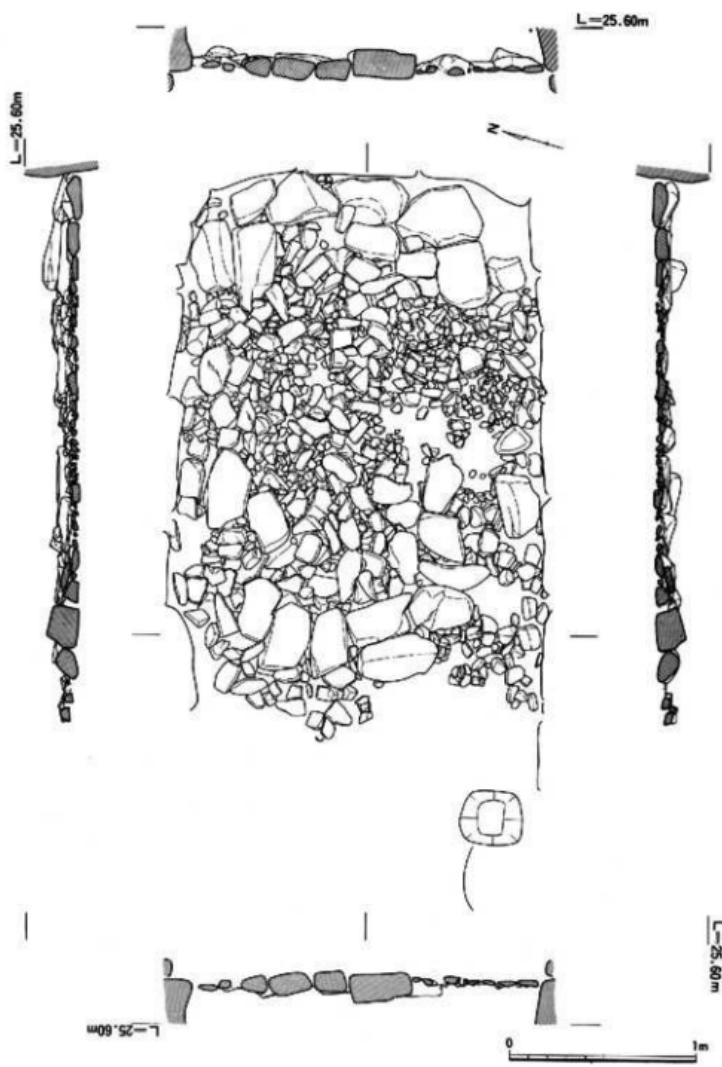
奥壁は7段約1mが残存する。下2～3段に一辺50～70cm程度の大型の石材を平積みし、上段には一辺20～30cm大の小型の石材を配する。側壁が下から2段目より持ち送り始めるに対し、奥壁は下から4段目より持ち送っている。天井石については、そのほとんどを欠くが、玄室内に崩落したものが1～2個みられた（付図4）。

玄室床面

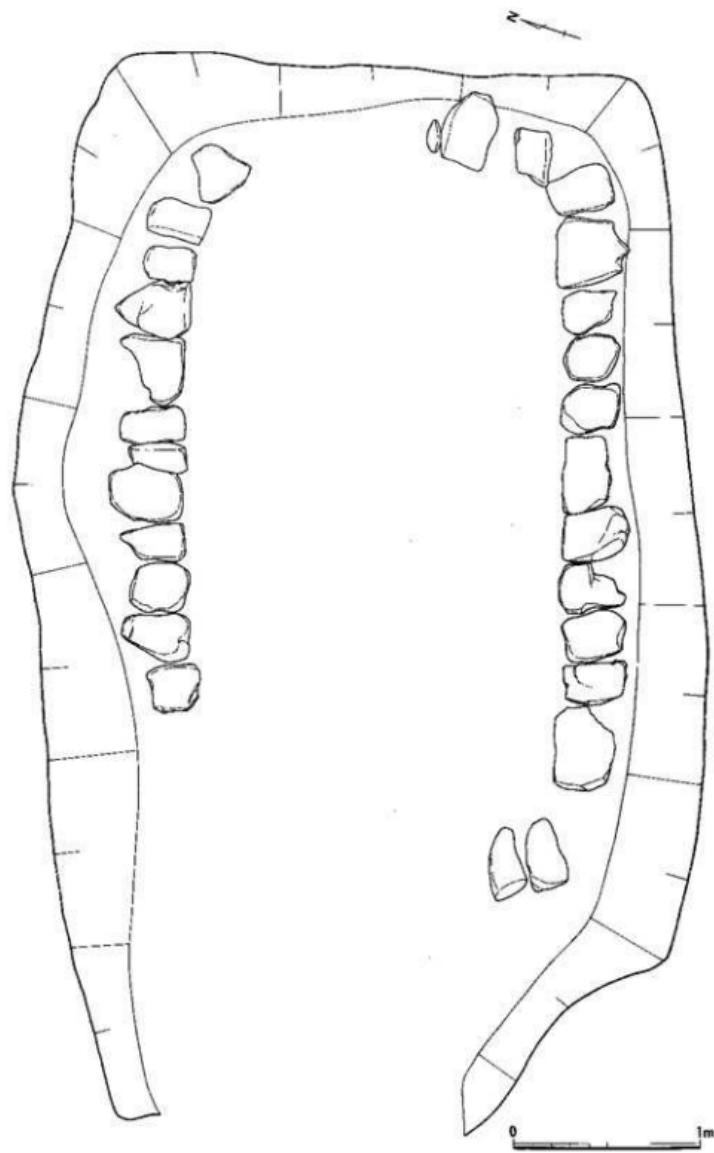
床面は、大きく2つの段階を経て構築されたものと考えられる。まず第1段階では、玄室



第17図 3号墳玄室床面実測図(1)



第18図 3号填玄室床面実測図(2)



第19図 3号墳石室基底部敷石平面図

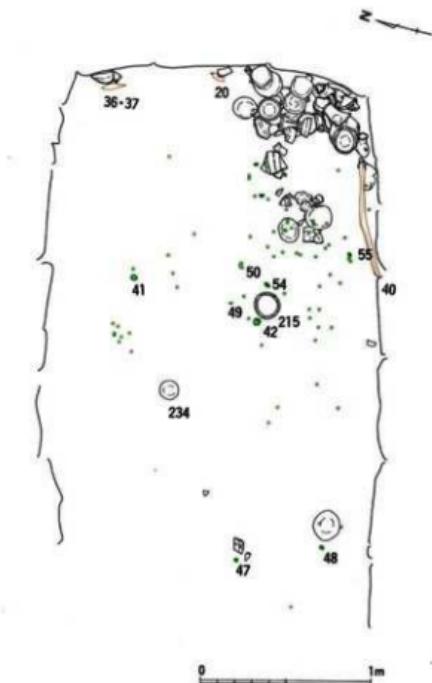
中央部において40~50cm大のやや大型の礫を配し、これにより形成される内法2m×1mの長方形の空間に、10~20cmの小礫を敷いて構築している。区画の内側は、外周の大型礫に比べてややレベルが低く、玄室内に棺を設置する空間を設けようとする意図を持つものとみられる(第18図)。第2段階には、前述の区画の内部のレベルの低い部分に5~10cm程度の小礫を充填し、外周の区画石と同レベルに調整している。その上で小礫上に約50cm離れて並ぶ20×30cm程度の板状の石材を設置しており、これを棺台として使用したのではないかと思われる(第17図)。

基底部

壁の基底部は、墓壙の壁に

沿って巡らせた深さ10cm程度の溝に、奥壁部分を除いて一辺30cm程度、厚さ10cm程度の板状の石材を配している。これはレベル調整のためと考えられ、この時右側壁はやや胴張り気味に、南側の側壁は直線状に、また奥壁と側壁との接点は隅丸に設定されている(第19図)。

玄室壁の構築にあたっては、①まず墓壙の壁に沿って溝を巡らせ、そこにレベル調整のための板石を配し、同時に玄室平面プランを決定する。②掘り方奥壁部分と右側壁部分の奥壁側1mほど、左側壁部分の奥壁側約50cmほどを合わせたコの字状を呈するブロックに、やや大型の石材を2~3段積み上げる。③両側壁部分の玄門側に大型の石材を積み上げ、玄室壁の下部を構築する。④壁全体の上段に小型の石材を積み上げる。⑤天井石を架構する。という手順で行われたものと考えられる。



第20図 3号墳玄室床面遺物出土状況(1)

遺物出土状況

本墳の遺物は、玄室内がほとんどであり、羨道、周溝、墳丘上から出土した遺物は少ない（第20図）。

まず第2次床面直上の堆積層（12層）上では、玄室中央部とやや玄門寄りから土師器が2つ検出された。特に234は赤色塗彩が施された皿で、本来古墳に伴うものではないことから、何らかの再利用が行われ、その際持ち込まれたものとみられる。

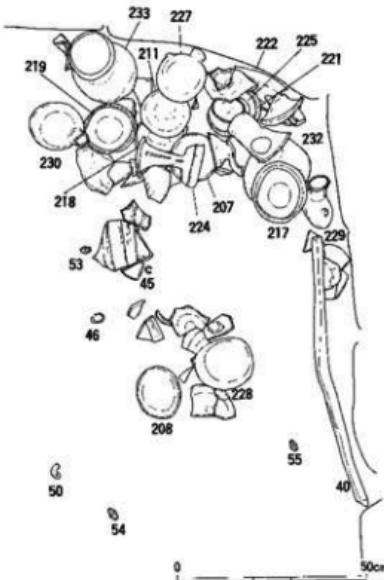
第2次床面上からは、須恵器、土師器と装身具、若干の鉄器が検出された。まず土器は、左側壁と奥壁の接点から左側壁に沿った一角でそのほとんどが検出された。その集中区では、土師器壺233は奥横際に、提瓶や平瓶は外側に位置していたものの、他の器種については、模式的に古いものと新しいものが混じり合っており、特に意図的に配置された形跡はみられなかった。概ね下部及び奥壁側に破片が多く、上部や玄門側に完形のものが多い（第21図）。

装身具は、耳環、勾玉、管玉、切子玉が出土した。耳環は6個出土しているが、ほぼ同じ形状・法量を持つものが2個1組の3組に分かれている。概ね対をなすものは出土地点も近く、41・42のみ約80cm離れているものの、45・46は約20cm、47・48は約50cmしか離れていない。勾玉、切子玉については、玄室南側やや中央寄り、須恵器集中区から玄門寄りの地点で検出され、蓋杯208、提瓶228といった須恵器を囲むように散らばっている。ガラス玉は、勾玉や切子玉とよく似た分布を示すが、玄室北側にも若干みられる。

鉄器は、鉄鎌2と鉄刀1、刀装具1が出土した。鉄鎌は奥壁に沿って、鉄刀は左側壁付近より、刀装具は鉄刀の近くから出土している。

第2次床面上の遺物について、天井石等の抜き取りによる擾乱が床面まで及んでいないことや、再利用時の遺物が床面直上の堆積層（12層）の上面より検出されていることから、追葬時にカタツケが行われた状態を保っているものと考えられる。

第1次床面からは須恵器と鉄鎌が検出された。須恵器はそのほとんどが奥壁両隅から出土した（第22図）。214を除くすべての須恵器片は、第2次床面より検出された須恵器片と接合

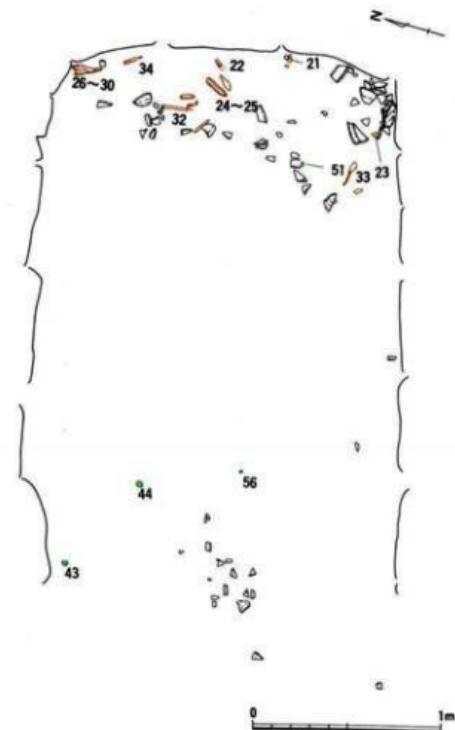


第21図 3号墳玄室床面遺物出土状況(2)

関係にある。鉄鎌は、奥壁に沿った地点で検出された。長頭鎌が組成の中心を占めており、奥壁北隅では26～30が、奥壁沿い中央付近では24・25が鋒を同じ方向に向けた状態で検出された。このように2～4本が束になった状態で出土していることから、数本を束ねて副葬していたとみられる。装身具は、耳環2、勾玉1、切子玉1である。勾玉は南側奥隅、切子玉は玄門付近より出土した。耳環は北側玄門付近より、ほぼ同じ形状・法量を持つものが約60cm離れて検出された。

(3) 出土遺物

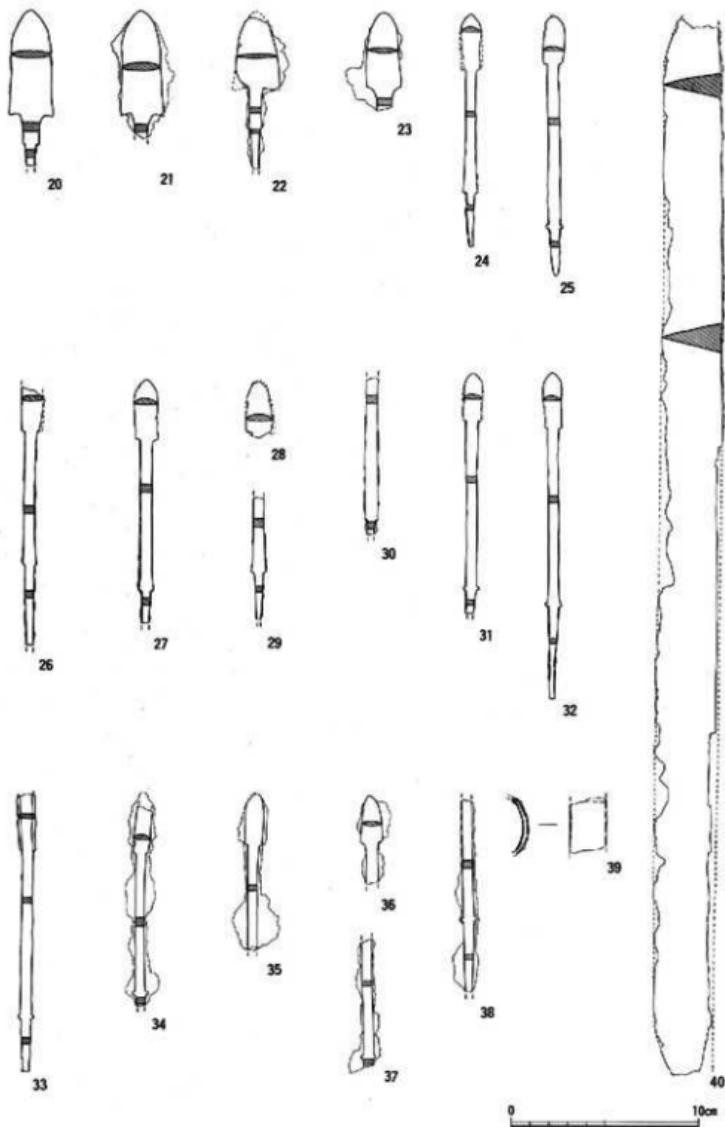
本墳の出土遺物には、鉄器、装身具、須恵器、土師器がある。以下各種の遺物について記述する。



第22図 3号墳玄室床面遺物出土状況(3)

鉄器 (20～40)

鉄器は、鉄鎌、鍔、鉄刀がある。いずれも木質等の残存は認められない（第23図）。鉄鎌（20～38）には三角形鎌（20～23）と長頭鎌（24～38）がある。三角形鎌は鎌身部長が4～6cm程度で、いずれも鎌身部が鋒よりふくらを有し、ほぼ直線的に鎌身関部にいたる長三角形の平面形を持ち、断面は平造である。鎌身関部の形状は、20から22がやや浅い逆刺を有し、24は斜関を呈する。21、23は笠被が残存せず、20、22はやや台形気味の角関を呈する。長頭鎌はA～Cの3群に分けることができる。A群（24・26・27）は、平面形が長三角形で片丸造の鎌身部を持ち、やや短め（6～8cm程度）の笠被部に台形関を持ちものである。B群（25・31・32・34）は、A群と同じ鎌身部を持つが、やや長め（8～9cm程度）の笠被部を持ち、笠被が棘関を呈するものである。C群（33）は、B群のうち鎌身部に鍔を有し、片切刃



第23図 3号墳出土遺物(1) 鉄器

造となっているものである。

鉢（39）は残存長2.7cm、幅1.9cm、厚さ3mmで半分も残存していない。

鉄刀（40）は、刀身の残存長56.5cm、幅3.2cm、厚さ約1.3cmの直刀で刃部先端、茎を欠く上、刀身が開いて土が詰まり、本来の厚さを正確に計測できないほど残存状態は悪い。

装身具（41～202）

装身具には、耳環、勾玉、管玉、切子玉、ガラス玉がある（第24～28図）。

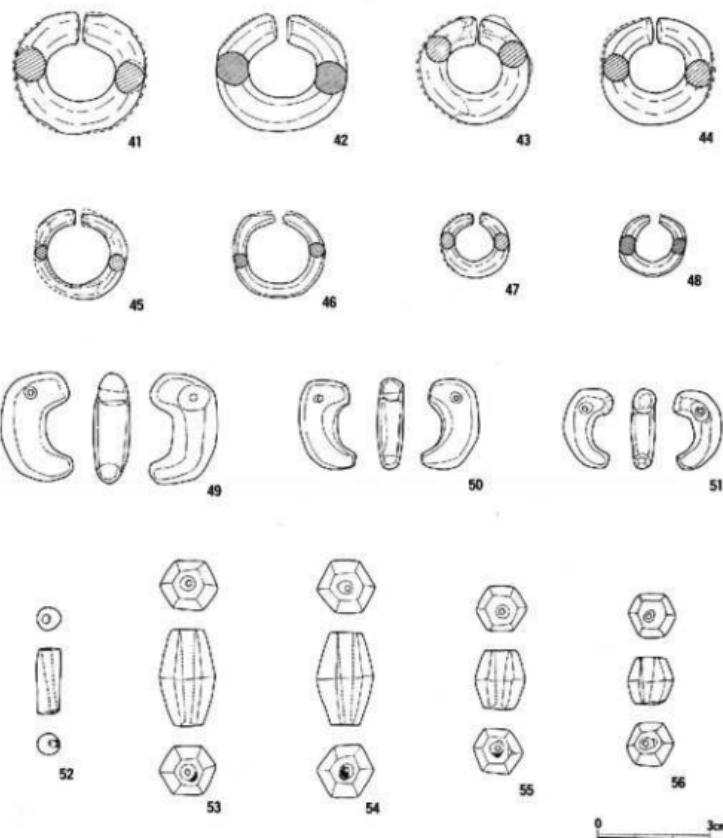
耳環（41～48）は、法量や形状より41と42、43と44、45と46、47と48、という4組に分けられる。いずれも表面の剥離が激しく、41～44、47、48は内側のみ良好に、45は約3割程度、46は約半分程度しか残存していないが、すべて中実の銅芯を持ち、銀箔が施されている。

勾玉（49～51）は3個あり、材質はすべてメノウである。49は本墳出土の勾玉の中でも全長29.25mmと最も大きな茶色、コの字形の勾玉で、左側面から穿孔されている。両側面はやや平坦に研磨してある。また右側面の孔には穿孔に伴う欠損痕が大きく広がるが、研磨してある。50は全長24.70mm、らくだ色、長C字形の勾玉で、端部、側面ともに研磨して平坦な面をもたせてあり、明瞭な稜線を造り出している。右側面から穿孔されている。51は全長21.10mmと最も小さいレンガ色、コの字形の勾玉である。左側面は平坦に磨いてあるが、右側面は丸い。右側面より穿孔されている。

52は全長17.50mmと小さな老緑色の碧玉製の管玉で、両面から穿孔されている。

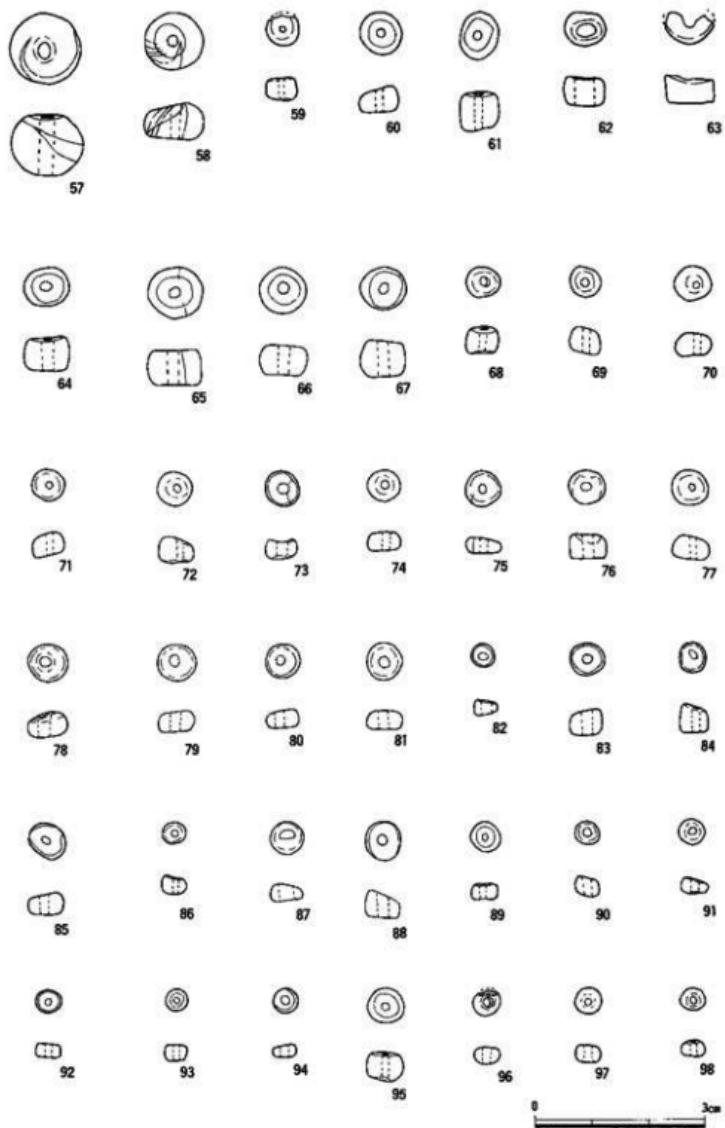
切子玉（53～55）は4個である。すべて水晶製で片側より穿孔されており、それにともなう欠損痕が底部にみられる。欠損痕は研磨してあるが、部分的にリングが残存するものもある。53、54は、大きさ、重量ともによく似ており、製作段階での規格性を感じられる。

ガラス玉（57～202）は、その形状・法量よりAからGの大きく7グループに分けることができる。A群（57・58）は紺色、大型のもので、57は丸玉、58は両面を研磨して白玉形になっている。気泡の向きより巻き付け法でつくられたと考えられる。B群（59～67）は径6～8mm程度の紺色のいわゆる「白玉」で、上下両面を研磨して平坦面を作り出している。C群（68～86）に更に3つに分けることができる。C1群（68～81）は径6mm程度のやや透明感のあるこいあいいろで、一方の面だけを研磨して平坦面を作り、もう一方の面は表面張力による自然な丸みを残している。C2群（82～85）は不透明なダービーブルーで、管状のガラスを切断したような形状をしている。C3群（86）は、径3.90mm、不透明な黒色で、両面を研磨してある。D群（87～94）は、径4～6mmのミッドナイトブルーで、両面を研磨して平坦面を作り出している。E群（95～168）は、さらに2つに分けられる。E1群（95～167）は、径4～5mmの透明感のあるあさぎいろで、孔の周囲に少しだけ研磨がみられる。3号墳出土ガラス玉の中で最も数が多い群である。E2群（168）は、径5mmのティールグリーンの

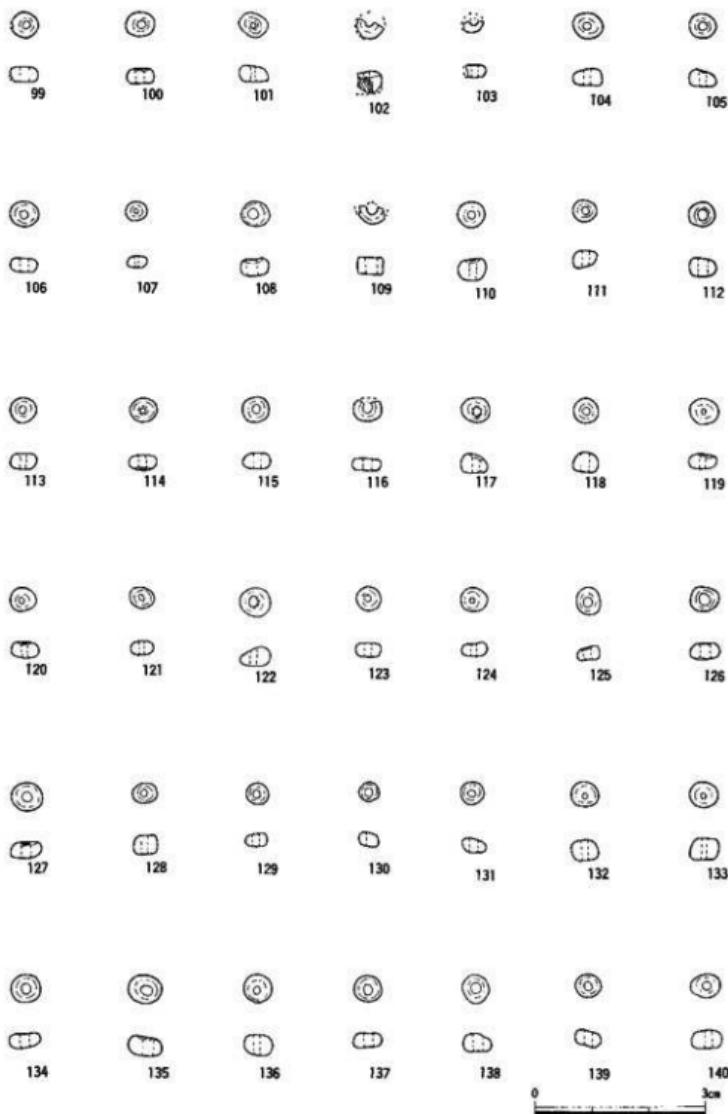


第24図 3号墳出土遺物(2) 耳環・玉

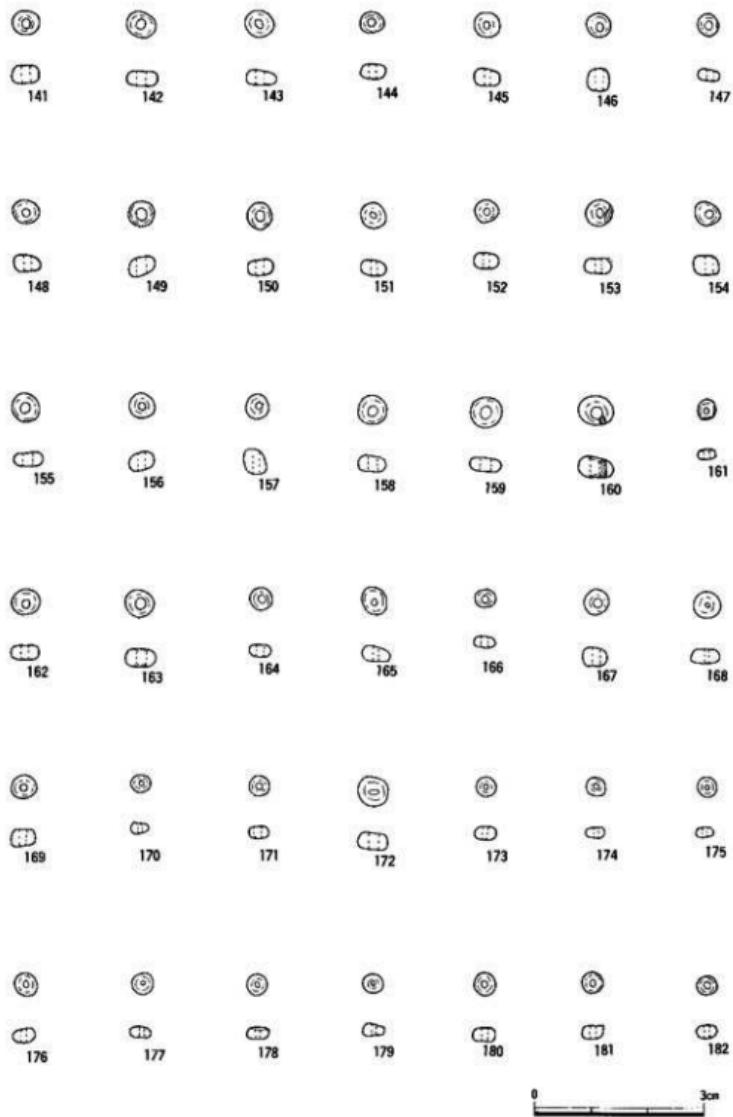
玉である。F群(169~201)はさらに5つに分かれる。F1群(169~187)は、径3~4mmの紺色で、研磨などはほとんど行われておらず、切り離しの際の名残とみられる突起を持つものもある。F2群(188~192)は径4mm程度のうすみどりいろの不透明なもの、F3群(193~197)はニメラルドグリーンの不透明なもの、F4群(198・199)は径3~4mmのこみどりのもので、いずれも小型で研磨などは施されていない。F5群(200・201)は径4mm程度のうすきの玉である。G群(202)は紺色で、径は3mm以下と3号墳出土の中では最も小さい。



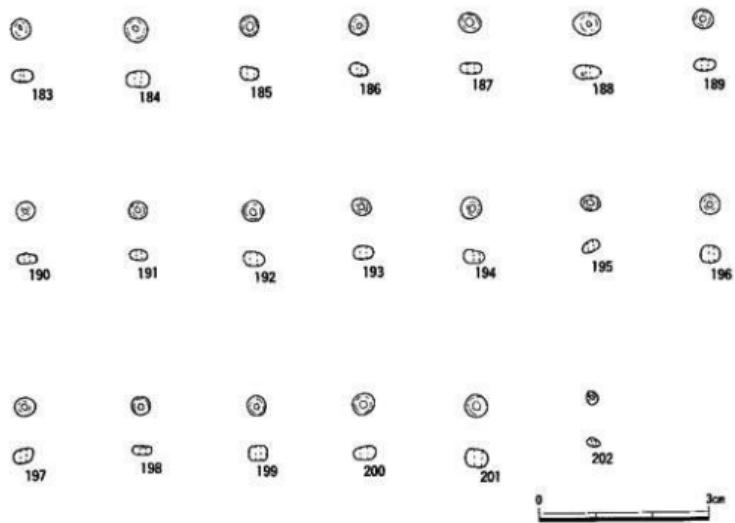
第25図 3号墳出土遺物(3) ガラス玉



第26図 3号墳出土遺物(4) ガラス玉



第27図 3号墳出土遺物(5) ガラス玉



第28図 3号墳出土遺物(6) ガラス玉

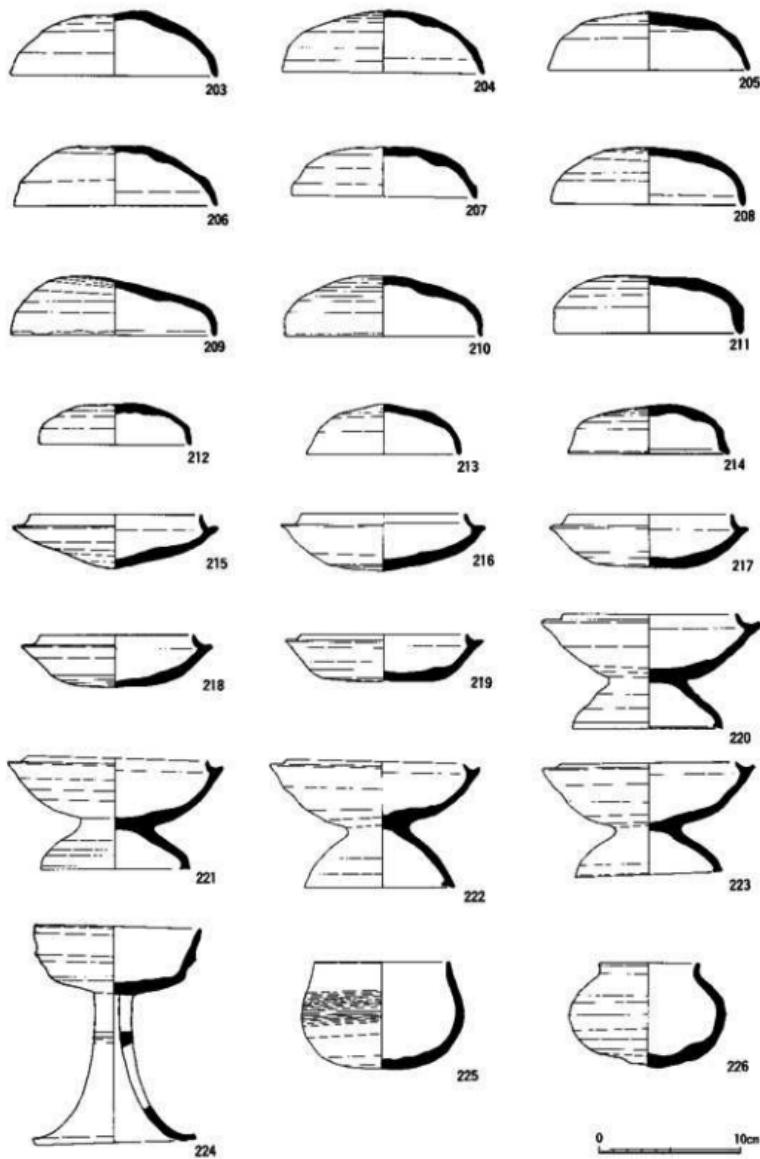
須恵器 (203~233)

須恵器は、蓋杯、高杯、碗、短頸壺、提瓶、平瓶、長頸壺がある。追葬時のカタヅケによるとみられる移動によって蓋杯等のセット関係は明確ではない。(第29~30図)。

203~212は蓋杯の蓋で、4群に分けられる。A 1群 (203~206) は天井部はやや高く、口縁部が外下方へ開き、端部は丸いもので、A 2群 (207) は同様の形態を持つが、口径がやや小さく、天井部外面に回転ヘラ削りが施されていない。B 1群 (208~211) は天井部から口縁部にかけて大きく屈曲し、ほぼ垂直に下るもので、一部に天井部内面に回転ナデの後、一定方向ナデが施されているものがある。B 2群 (212) はB 1群と同様の形態を持つが、口径が小さく、天井部外面が回転ヘラ切り無調整となっている。

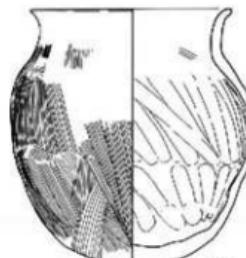
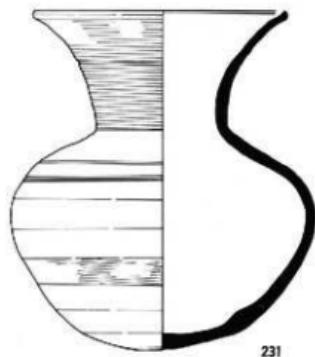
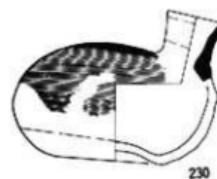
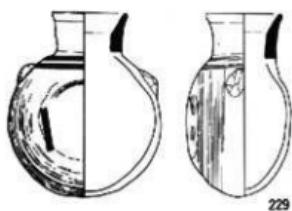
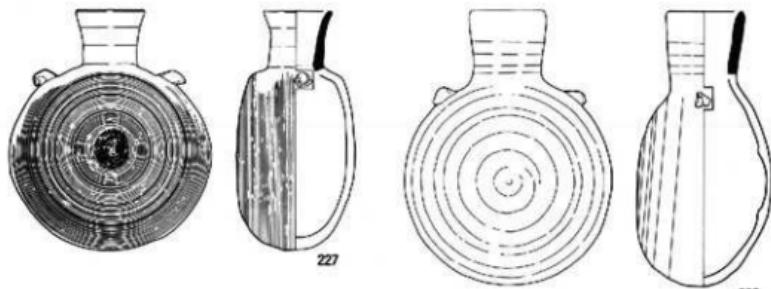
215から219は蓋杯の身で、2群に分けられる。A群 (215~217) は口径やや大きくて、口縁部の立ち上がりが薄く、やや高いもので、底部外面は中心部まで回転ヘラ削りが施されている。B群 (218~219) は口径やや小さく、口縁部の立ち上がりが厚く、短いもので、底部外面の中央部付近はヘラ起こし痕が残存する。

220~224は高杯で、短脚のもの (220~223) と長脚のもの (224) がある。短脚高杯は、いずれも底部は深く、やや丸く、倒杯形に脚部がのびるが、口縁部の立ち上がりが薄くやや長いもの (220) と、厚くやや短いもの (221~223) とに分けることができる。



第29図 3号墳出土遺物(7) 須恵器

0 10cm



0 10cm

第30図 3号墳出土遺物(8) 須恵器・土師器

227～229は提瓶で、それぞれ大きさが異なるうえに、体部外面の調整の施し方に違いが見られる。227は体部外面の肩にカギ形の把手を貼り付け、一面には強く他面には弱い回転カキ目を施している。228はボタン状の把手を貼り付け、一面は回転ヘラ削り、他面は回転ナデが施され、回転カキ目は施されていない。229は他に比べてやや小さく、把手は

第31図 3号墳出土遺物(9)須恵器・土師器ボタン状の突起となっている。体部両面と口頸部基部に回転カキ目が施されているが、一面はナデ消し、他面は中央部に不整方向のハケ目が施されている。

231・232は長頸壺で、大きく反外する長い口頸部と、緩やかに傾斜して下る体部、やや丸みを帯びるが浅く平たい底部を持つ。外面の調整は、231が口頸部と体部中央に回転カキ目が、232が口頸部に3段のヘラ書き波状文と底部に回転カキ目がそれぞれ施されている。

土師器 (233)

完形の広口壺で、外面は口縁部付近が横ナデのほかはハケ、内面は上半がヘラ削り、下半が指ナデが施されている。全体に薄いつくりになっており、焼成はあまり良好ではない(第30図)。

再利用時の遺物 (234)

再利用時に持ち込まれたと思われる土師器の皿である。焼成は比較的良好で、内面には赤色塗彩が施されている(第31図)。

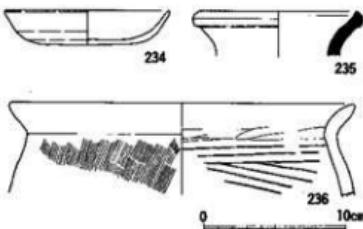
石室以外の出土遺物 (235・236)

235は周溝から出土した壺である。回転ナデが施された口頸部のみ残存しており、体部から下を欠失する。236は墳丘裾から出土した土師器の壺である。体部外面に縦ハケ、内面には粗い横ハケが施されている(第31図)。

(4) 小 結

以上のように本墳は、墳丘の盛土も部分的ではあるが残存し、多数の遺物とともに比較的残存状態の良い横穴式石室が検出された。ここでその特徴についてまとめておきたい。

まず主体部の横穴式石室については、基底部の石列設置に際し、奥壁と側壁のコーナーを丸く、側壁を胴張り気味に配し、玄室の平面プランを決定している。隅丸胴張りの平面プラン



ンは、「忌部山型」石室の特徴であり、麻植郡に多いとされている型式ではあるが、麻植郡においてみられる「忌部山型」石室はすべて両袖式であり、袖部は内側に迫り出した立柱石が用いられている⁽¹⁾。この点において本墳主体部は片袖式である可能性も含めて、「忌部山型」石室とは異なる袖部を持つ可能性があり、「忌部山型」石室の一形態として位置づけられるものか、また他の型式との中間型として位置づけられるのかはなお検討を要するものと思われる。

須恵器は、第1次床面からのみ出土したもの、第1次床面から破片が出土し接合関係にあるもの、第2次床面のみから出土したものに分けることができる。追葬に伴う床石の敷きなおしやカタヅケによる副葬品の移動を考えれば、どの遺物がいずれの床面に帰属するものかにわかつには断じがたい。ただ口径や器高、形態は大きく2つに分けることができる。まず杯身A群、短脚高杯220のように口縁部の立ち上がりがやや長くのびるものを中心とするグループである。他の器種では長脚高杯224、杯蓋A1群やB1群、提瓶227などが対応する。これに対して杯身B群、短脚高杯221～223は口縁部の立ち上がりが短く、前者に比べてやや新しい様相を呈しており、他の器種では提瓶229が対応する。このように須恵器の形態からみた場合、追葬には大きく2つの時期が考えられ、この間に数回の追葬が行われものとみられる。

鐵鎌については、平根鎌がTK4.3併行期以降に特に多く用いられる、鎌身関部が直角関を呈するものがほとんどであるが、長頸鎌は笠被が台形関を呈するものとTK4.3併行期に採用される棘笠被を呈するものの2種類がある。中でも注目されるのは、束状で出土している26～30と、24・25で、前者はすべて笠被が台形関を呈するのに対して、後者は台形関と棘関の両者がみられる。これらは本墳の存続期間中に笠被形態の転換期を迎えていたことと同時に、転換期において両形態が同時に用いられていたことをも表すものと考えられる。

赤色塗彩が施された土師器については、このような形状を持つ皿は10世紀頃に多くみられ、本来古墳に伴うものではない。そのため10世紀頃に何らかの形で再利用した際に持ち込まれたものと考えられる。石室の再利用は、徳島県ではひびき岩16号墳例⁽²⁾などにもみられるが、多くは火葬墓として用いられており、本墳の例とは様相が異なる。本墳例は土師器皿が2点残存していたのみであり、その目的は不明であるが、天井石の崩落または抜き取りの擾乱は、これらの土師器が置かれていた面まで及んでおらず、追葬終了後一定期間放置された後、何らかの再利用が行われ、さらにその後もしばらく石室が開口し、天井石が残存していたものと考えられる。

(1)『忌部山古墳群』徳島県博物館 1983

(2)『ひびき岩16号墳発掘調査報告書』石井町教育委員会 1986

4号墳

(1) 墳丘・周溝

本墳は、3号墳の南東側、標高23~24mの地点に位置する。北側に周溝を持ち、主体部には横穴式石室が構築されている。

周溝は、中央部の幅約1.8m、深さ約30cmで断面はU字形を呈する。周溝内には、数次にわたる砂質土の堆積がみられ、蓋杯や壺などの須恵器が多く検出された。ただ本墳周溝も3号墳同様墳丘の周囲を巡らせてはおらず、墓域の区画という性格が強いとみられる(第32図)。

調査時点においては、すでに墳丘盛土はほとんど残存していなかったが、北東側斜面で墳丘構築に伴う地山整形面が観察できた。その様子から、本来の墳形や墳丘規模は直径10~12m程度の円墳と推定される。

(2) 主体部

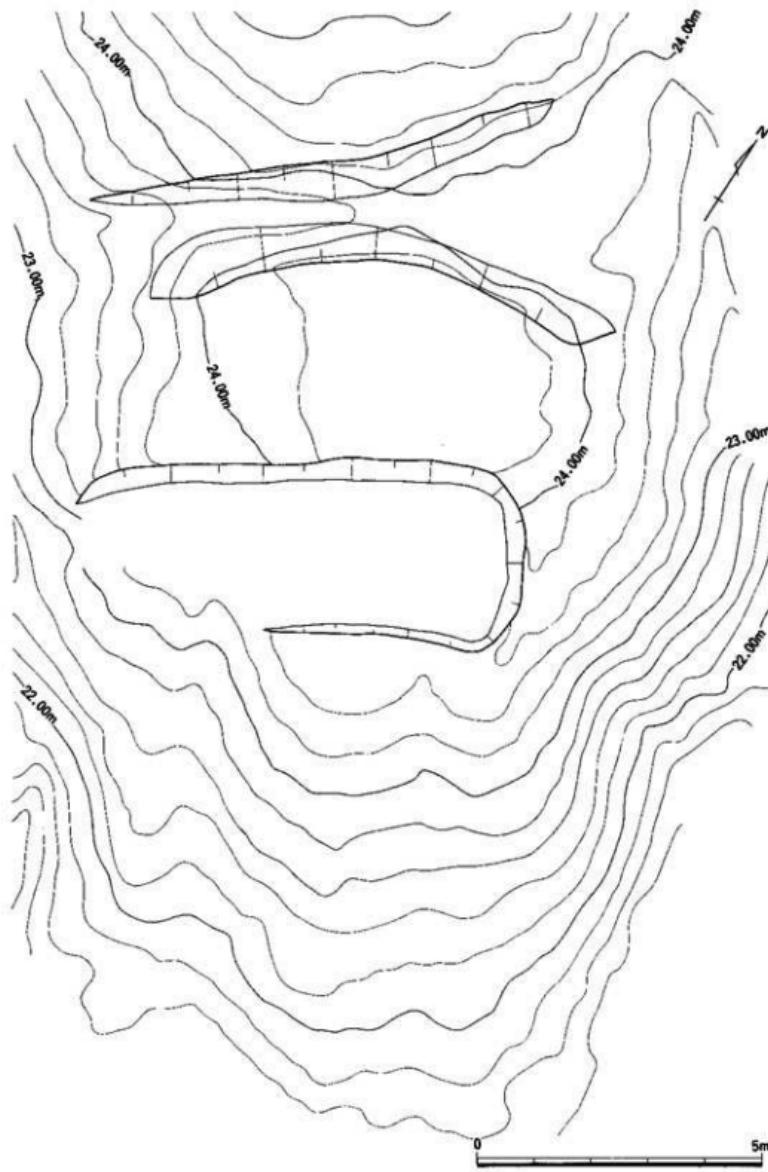
石室の掘り方は、長さ8m、幅3.1m、深さ50cmほどの隅丸長方形であるが、南側の羨道部に相当する部分は残存していない(第33図)。ここに主軸方向をN55°Eにとり、南西方向に開口する横穴式石室が構築されていたと考えられる。

羨道

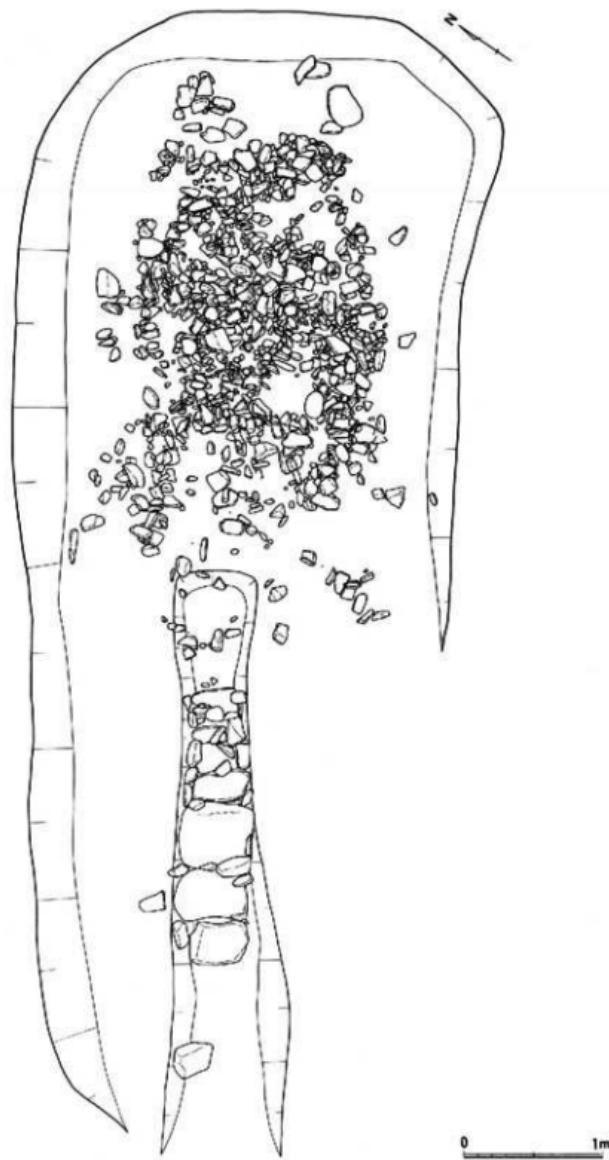
羨道部には排水溝が構築されており、玄室と比べて良好な状態で残存していた。排水溝は掘り方中央部より開口部側に向かって幅を広げつつ直線状に延びており、長さ約4.2m、幅約50~70cm、深さ約30cmで、断面はU字形を呈する。大小十数個の偏平な砂岩を蓋として架構している。周溝内には2度にわたる砂質土の堆積がみられたが、そのうち下位の2層からは須恵器片が検出された(第34図)。

玄室

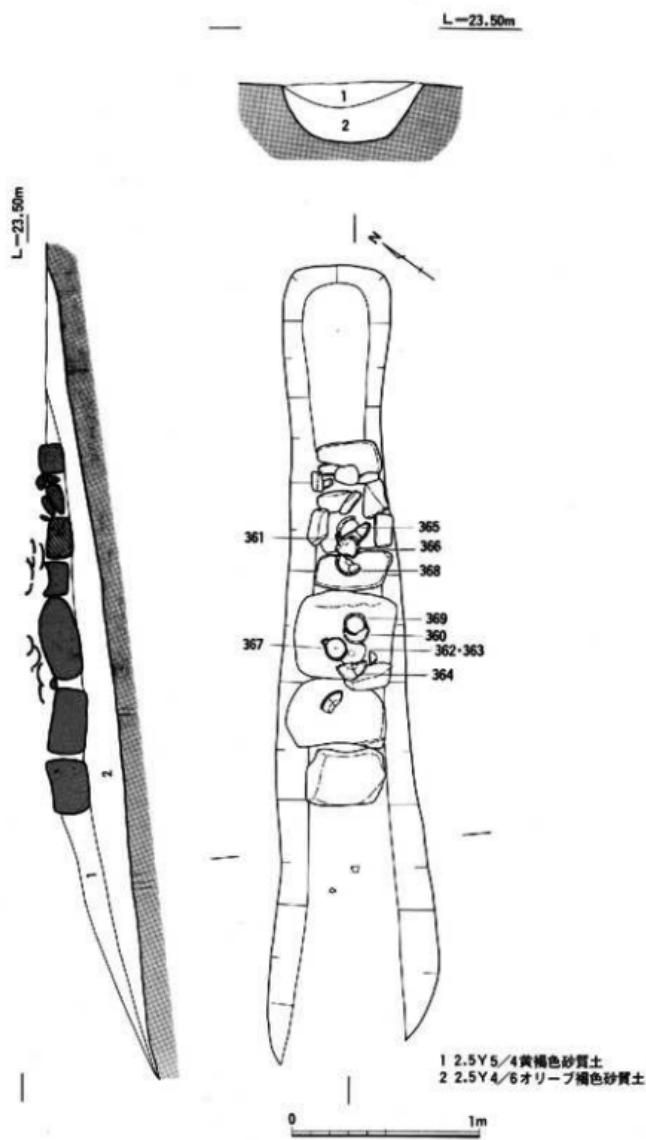
玄室には、5~15cm大の砂岩礫が一面に散らばっていた。床面として構築されたという様子ではなく、盜掘などの大きな搅乱を受けたことによって礫床がかき混ぜられたものと考えられる。側壁、奥壁、天井石などの大型の石材は全く残存しておらず、また石材の抜き取り痕も明確ではない。このため玄室平面プランや規模など詳細は不明である。



第32図 4号墳墳丘測量図



第33図 4号墳主体部平面図



第34図 4号填排水溝実測図

遺物出土状況

排水溝の蓋石上からは須恵器蓋杯が検出された。蓋は伏せ、身は受部を上に向け、蓋石上に1列に並べ置かれたような状態であった。ここでは上部にやや型式の新しいものがみられ、下部には型式の古いものがみられる。しかし他の器種はみられず、埋葬を行う度に、何らかの祭祀的意味を持って蓋石上に蓋杯を配置したものとみられる（第34図）。

一方玄室からは、耳環、玉類、鉄器片、須恵器片が出土している。耳環は北隅、中央部、中央やや南寄りの3カ所から出土した。ガラス玉はほぼ全面に散乱していたが、それ以外の玉類は中央やや北寄りに集中していた。鉄器はいずれも小片で、特定の地点に集中することなく、ほぼ全面に散らばっていた。須恵器は、開口部に近い地点で破片が若干みられたのみであった（第35図）。

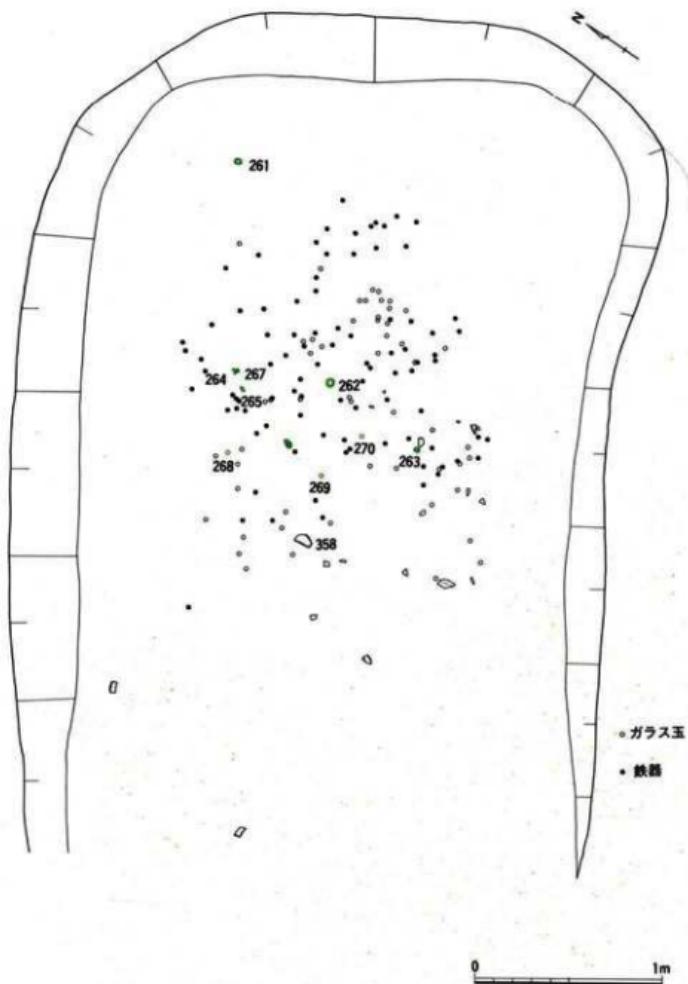
主体部に対する攪乱は、ほぼ玄室直上から行われたとみられ、渡道部排水溝付近は最終の追葬が終了した時点での状態を保っていると考えられる。また玄室の状況からは、原位置と考えられる遺物はほとんどないものの、種類・数ともに豊富な馬具や刀装具をはじめとして、勾玉や管玉といった装身具や須恵器など数多く出土しており、本来は多くの副葬品を有していたことが窺える。

（3）出土遺物

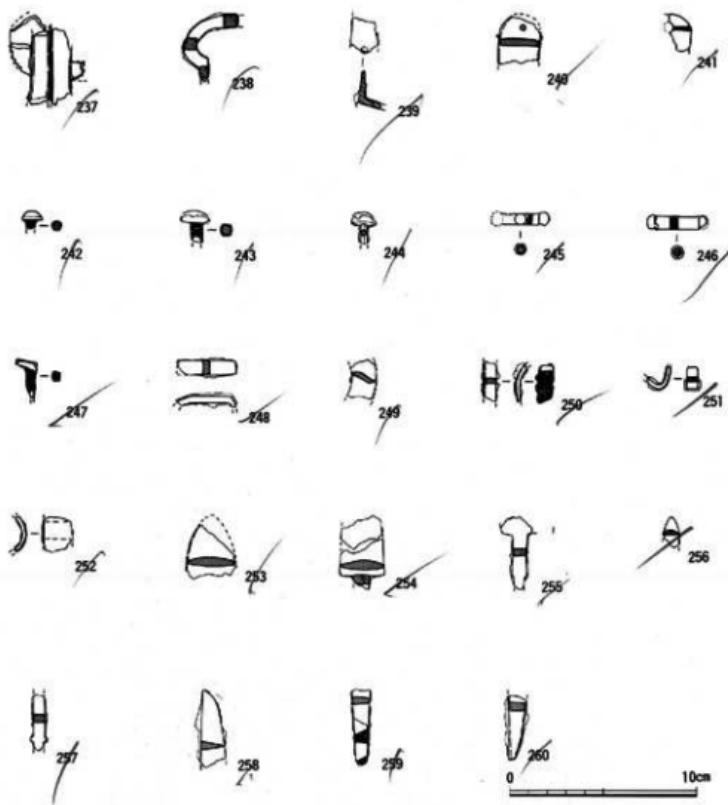
4号墳出土遺物には、鉄器、装身具、須恵器がある。以下各種遺物について記述する。

鉄器（237～260）

鉄器には馬具、刀装具、鎌、刀子等があるが、すべて破片で出土し、完形のものはない（第36図）。237～241は馬具である。237は兵庫鎖で、隅丸方形の断面を持つが、鋸化がひどく、長さや幅は不明である。238は鞍具で、馬蹄形を呈し、頭部は隅丸方形、基部付近は隅丸長方形の断面を持つ。頭部幅6mm、基部幅4.5mmを測る。239は鎧の吊金具である。240・241は辻金具の脚と思われる。240は端部は円弧上を呈し、径3mmの孔が穿たれている。残存長2.7cm、幅2.3cm、厚さ4mmを測る。242～244は鉢である。242は径10.5mmの半球形の頭部より、径4mm、残存長4.5mmの断面円形の鉢足がのびる。鉢足には縦方向の木質が残存している。243は径15mm程度と考えられる半球形の頭部より、幅4mm、残存長10mm程度の断面方形の鉢足がのびる。鉢足には縦方向の木質が残存している。244は径13mm程度の半球形の頭部より、幅3mm、残存長10.5mm程度の鉢足がのびる。245・246は弓の飾金具である。245は残存長25mm、径4mm、246は残存長32mm、径5mmである。いずれも円柱部に厚さ1mm程度の鉄板を巻き付けており、円柱部には木質が残存している。247は釘である。頭部は欠損しており形状は不明であるが、胴部は断面方形で残存長15mmを測る。248は鰐である。両端部を欠き、断面は隅丸方



第35図 4号墳玄室内遺物出土状況



第36図 4号墳主体部出土遺物(1) 鉄器

形を呈する。残存長32mm、幅8mm、厚さ4mmを測り、木質の残存は認められない。249～252は刀装具で、249は銅で、緩やかな弧を描き、残存長21mm、幅13.5cmを測る。250・251は責金具または足金具と考えられる。250は両端部を欠き、断面は隅丸方形を呈する。残存長21mm、幅7mm、厚さ2.5mmで縦軸に対して直交する方向に木目が残存する。215は幅6mm、厚さ2mmで若干木質が残存している。252は鉤である。幅16mm、厚さ2mmで内面に木質が残存している。253～257は鐵鎌である。252～255は鎌身部平造の長三角形鎌で、254、255は鎌身開部が直角開を呈し、255は鎌被が台形開を呈する。256は片丸造の長頭鎌の鎌身部である。257は長頭鎌の鎌被で、鎌被を呈する。258～260は刀子で、259は隅丸長方形の断面を持つ茎部

に木質が残存している。

装身具 (261~356)

装身具には、耳環、勾玉、管玉、切子玉、丸玉、白玉、トンボ玉、ガラス玉がある（第37~39図）。

耳環（261~263）は3個あり、いずれも中実である。263については表面がほとんど残存していないが、261と262はともに表面が良好に残存している。銅芯に銀箔を施したものとみられ、端部の処理の様子が開き部で観察できる。表面の様子や法量から考えて対になるものと思われる。

勾玉（264）は、ストームグレイの碧玉製で、全長17.4mmと小型である。全体に丸みを持たせており、稜などはみられない。また孔周辺は非常に薄くなっている。穿孔方向は明確ではない。

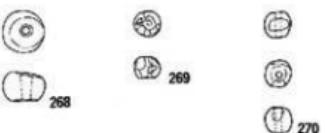
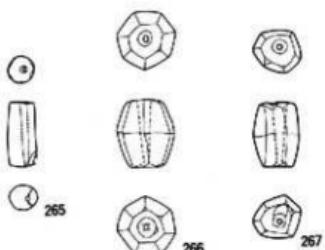
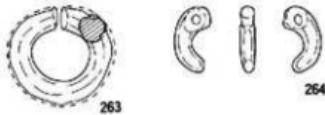
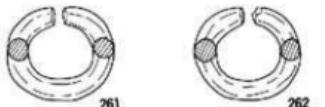
管玉（265）は、ボトルグリーンの碧玉製で、全長17.4mmと小型である。下部側面の孔付近を欠く。側面はほぼ曲面に研磨されているが、部分的に平坦なところもある。また片面穿孔であるが、底部に穿孔に伴う欠損痕は認められない。

切子玉（266~267）は、266が七角形、267がいびつな六角形の断面をもつ。全長17~18mmとやや小型である。いずれも水晶製で片面穿孔であるが、267は不純物が多く含まれるためか白く濁っている。

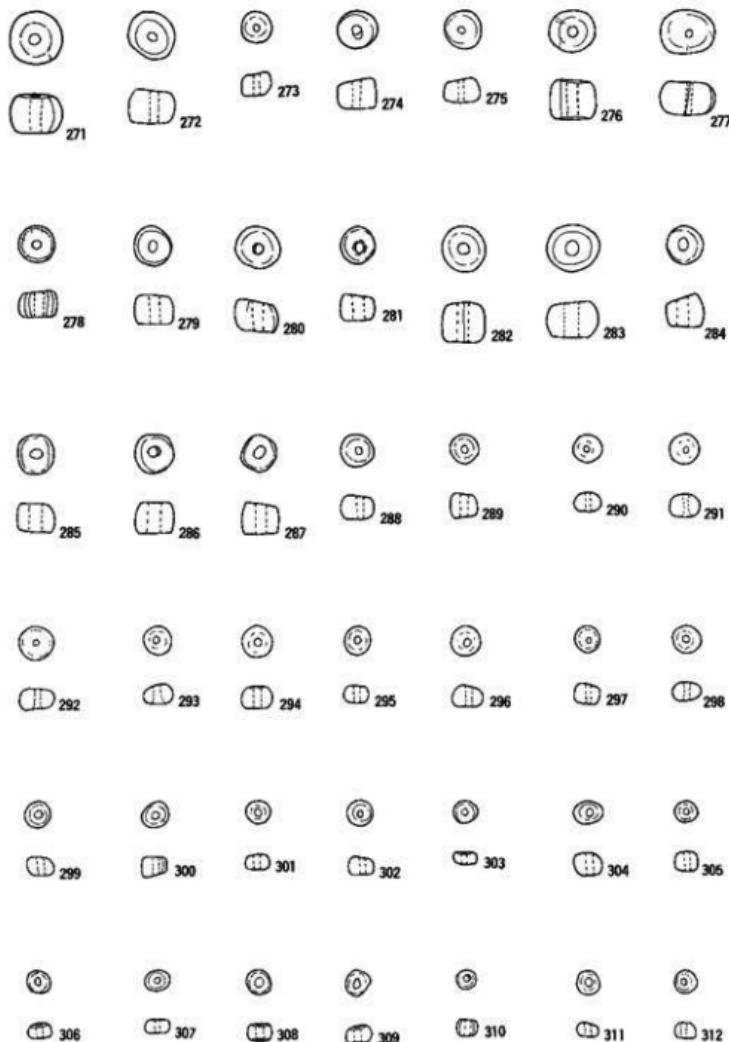
白玉（268）は硬玉製である。色調は大部分が白色で部分的にオパールグリーンの部分がみられる。上下両面は研磨が丁寧に行われておらず、表面には凹凸が多い。

丸玉（269）は緑色のメノウ製である。径は7.2mmでガラス玉の大きさに近い。研磨が粗く、表面には凹凸が多い。

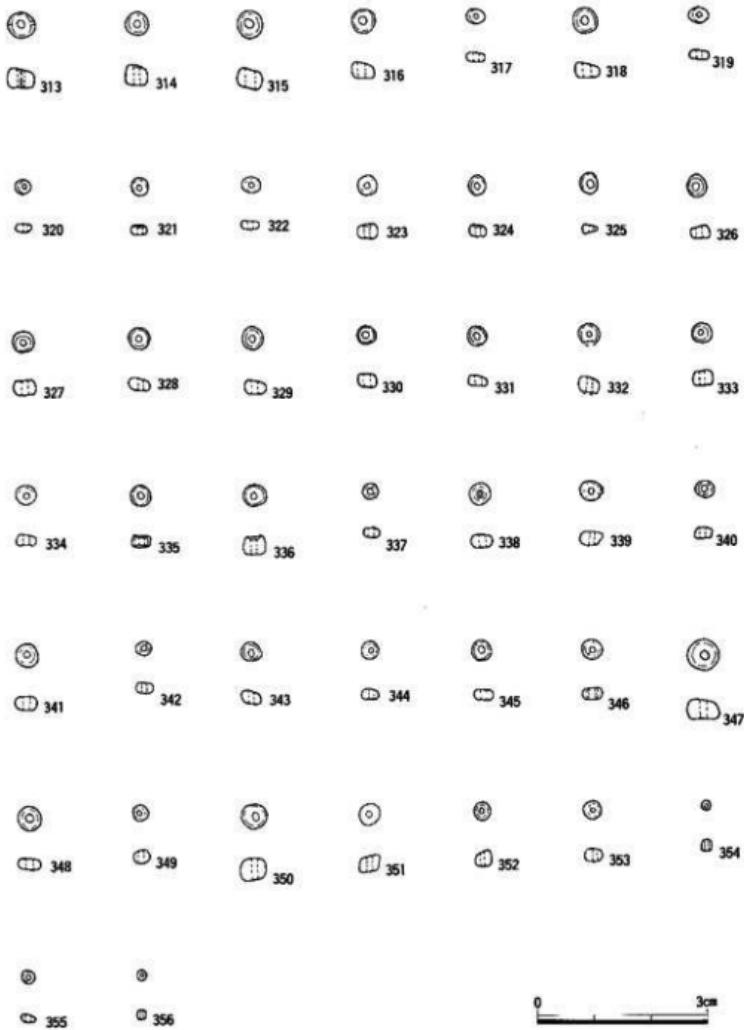
トンボ玉（270）は、うすき色の親玉に紺色の子玉を持つ。径は7.5mmで丸玉同様ガラス玉



0 3cm

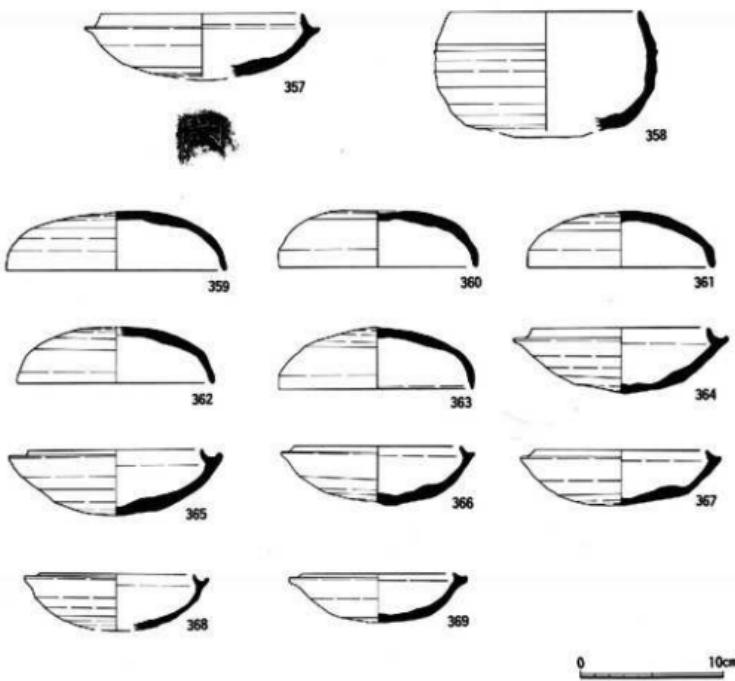


第38図 4号墳主体部出土遺物(3) ガラス玉



0 3cm

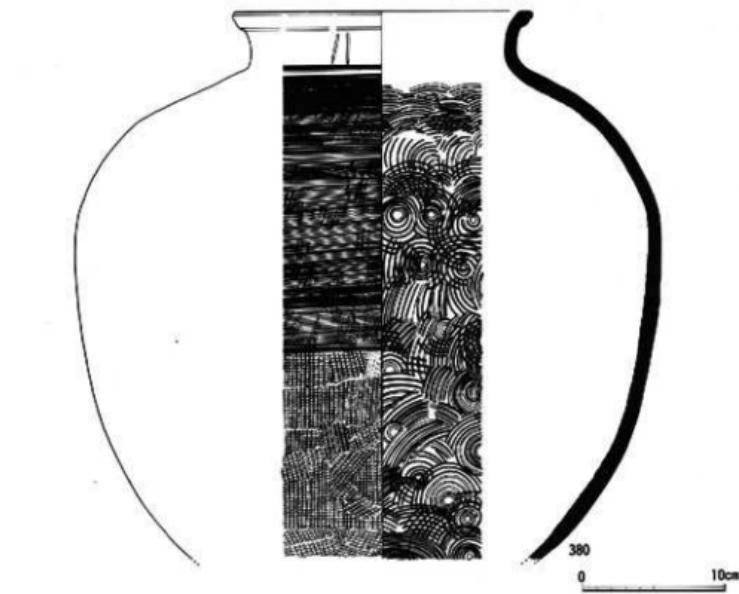
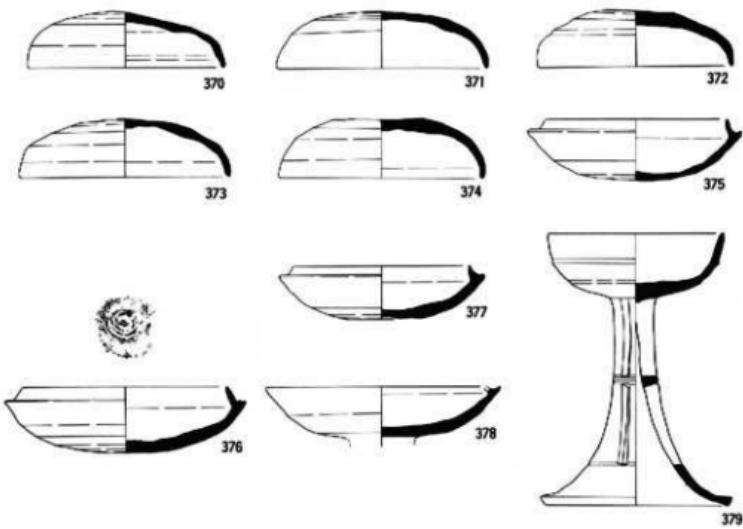
第39図 4号墳主体部出土遺物(4) ガラス玉



第40図 4号墳主体部出土遺物(5) 須恵器

の大きさに近い。

ガラス玉は、法量・形状・色調から、A～Kの11種に分けられる。A群（271～289）は、ほとんどが径7mm以上と大きく、上下両面が研磨によって平坦面となっている紺色の玉で、孔に平行に気泡が走る。B群（290～342）は、3～5mmとやや小さめの紺色の玉で、表面張力により丸くなったものや、管状のガラスを切断しているものがある。また337のように切り離し時の痕跡が残存するものもある。そのほかは法量、形状が似ており、主として色調で分類したが、各群1～3個程度しかない。C（343）は不透明なあいいいろ、D（344）は透明感のあるマーリングリーン、E（345～347）は透明感のあるあいいいろ、F（348）はにぶあおみどり、G（349）はさびあさぎ、H（350・351）はあさぎいろ、I（352・353）はこみどり、J（354）はペネチアンレッド、K（355・356）はダービーブルーである。このうち354～356は径2mm程度で、他に比べて特に小さい。



第41図 4号墳周溝出土遺物

主体部出土須恵器（357～369）

357・358は玄室内出土の杯身、碗である。357は口径が14cm程度と口径が大きく、立ち上がりもやや高く、底部外面に3条のヘラ記号がみられる。

359から369は排水溝出土の須恵器である。杯蓋は口径が15cm程度の大きなもの（359）と、14cm程度の小さいもの（360～363）の2種がある。杯身は口縁部の立ち上がりの形状によって364と365～369という2群に分けられる。中でも369は、口径10.7cmと最も小さい上、焼成も悪く、仕上げも粗雑である（第40図）。

周溝出土須恵器（370～380）

杯蓋、杯身、高杯、甕がある（第41図）。杯蓋は口径13cmと小さいもの（370）と、口径14～15cmと比較的大きいものがある。（371～374）。小型のものは天井部が丸いが、大型のものは概ね平坦である。また縦じて強いナデが施されている。杯身は大型で口縁部の立ち上がりの高さのびるもの（375・376）と、小型で立ち上がりの低いもの（377）がある。376は立ち上がりの基部に2条の沈線が巡り、底部内面には同心円タタキが施されている。379は長脚の無蓋高杯で、杯部中位に短く張り出す稜を持ち、脚部3方2段に長方形の透かし孔がある。甕（380）は、外側は擬格子タタキ、内側は同心円タタキが施され、更に体部外上半には回転カキメが施されている。また口頭部外側には2条のヘラ記号がみられる。

以上の他、4号墳付近からは、平瓶、短脚高杯等の破片が出土している。

（4）小結

本墳は、玄室に大きな擾乱を受け、壁の石材が全く残存していない上に、床面礫床も擾乱されているために、本来の姿をとどめているのは渡道部排水溝付近のみと考えられる。このため石室の構造や追葬回数、時期を精密に検討するのは難しいが、周溝からの遺物は多く、状態の良い排水溝上や玄室内から出土した須恵器より、大まかな存続期間等の検討は可能である。以下で本墳の遺物の特徴についてまとめておきたい。

須恵器は、蓋杯蓋は口径が大きく平たいもの（359・371～374）とやや小さいもの（360～363・370）の2つがみられる。杯身は、①口径が大きく口縁部の立ち上がりの高いもの（357・375・376）、②口径がやや小さく口縁部の立ち上がりの低いもの（365～369・377）、③その中間にあたるもの（364）に分けられ、高杯379は①に対応する。これは追葬時期に対応しており、大まかには3つの時期に埋葬が行われたことを表している。

鉄鎌はいずれも小片であるが、笠被や鎌身関部の判明しているものが含まれる。長頭鎌片の笠被がいずれも257にみられるような駿闘を呈することは、概ねTK43併行期以降の時期に鉄鎌が副葬されたことを表している。また他の鉄器についても、複数の馬具や弓の飾り金

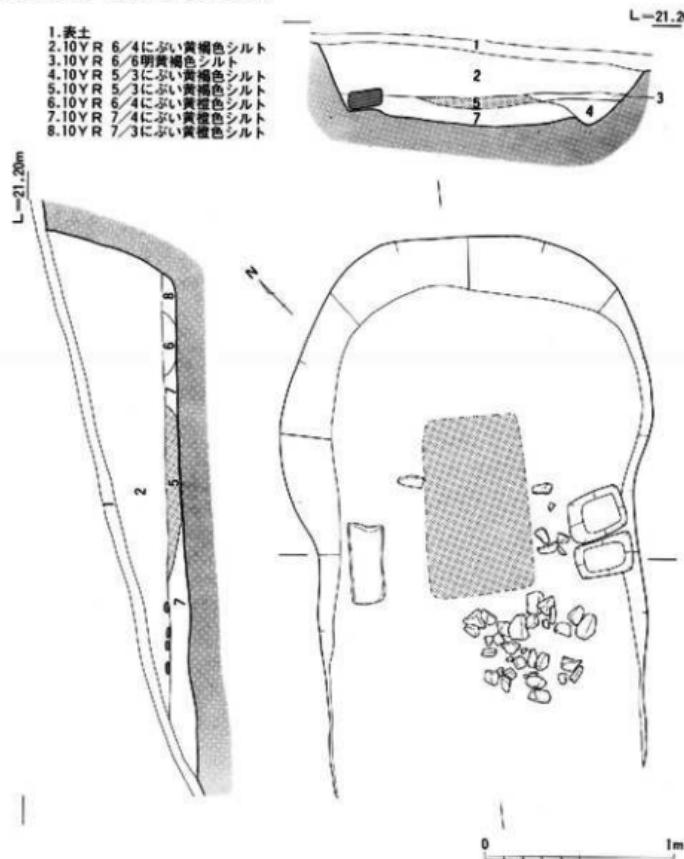
具など豊富に持っていたことが窺える。

装身具については、擾乱を受けているにも関わらず良好な状態で残存している。しかし持ち去られたものもあるためか種類、數ともに少ない。また鉄器や須恵器と比較した場合、硬玉製の臼玉やメノウ製の丸玉、トンボ玉など他の主体部にないものを持っているものの、勾玉・管玉は小型で貧弱であり、切子玉は質も悪く、仕上げが粗雑である。擾乱時に持ち出されたことを考慮しても、他の主体部よりやや弱い感がするのは否めないところである。

5号墳

(1) 墳丘・周溝

5号墳は、調査区のほぼ中央、屋根をはずれた標高約21mの西斜面に位置する。北には4号墳、東南には6号墳が位置し、東斜面にある土塗墓とは尾根を挟んで向かい合っている。周辺の地形は削平によって傾斜の急な崖状になっており、墳丘盛土も検出されなかつたため、墳丘規模・墳形は不明である。



第42図 5号墳主体部実測図

(2) 主体部

掘り方は短辺1.7m、長辺2.8m、最も深いところで深さ72cmを測る隅丸長方形である。掘り方から推測される主軸方向はN43°Wで、南西側に開にする。しかし削平が大きいため、南西側の本来の形状は不明である(第42図)。

土層堆積

掘り方内には、床面直上までしまりのないにぶい黄褐色シルト(2層)が堆積していた。3、4、6層は壁石材の抜き取り痕が埋まったものとみられる。掘り方中央には長辺約90cm、短辺約55cm、深さ7~8cm程度のしまりのないにぶい黄褐色シルトの堆積がみられ(5層)、この層には装身具等良好な遺物が多く含まれていた。7層は比較的よくしまったにぶい黄褐色シルトである。この層自体は遺物を含まないが直上面には良好な遺物が多くみられた。また砂岩小円礫はこの層の上面にある。8層は石材の抜き取り痕とみられる6層の外側に位置するややしまりのあるにぶい黄褐色シルトで、その位置より壁石材に対する裏込め土と考えられる。7層は壁や壁の抜き取り痕の内側のほぼ全体にみられ、よくしまっているのに加えて、それ自身遺物を含まないこと、その上面には遺物がみられる事から床面構築のために貼り付けられたものと考えられる。これに対して5層は、その広がりや遺物出土状況から棺の据え方である可能性が高い(第42図)。

石室

主体部には、内法の幅約1m、長さ1.8m以上の横穴式石室が構築されていたと考えられる(第42図)。側壁は、その石材のほとんどを欠くために、平面形や袖部の形態は不明である。掘り方内の北西辺中央部に、42×17×9cmのほぼ方形の石材が、長側辺を主軸方向に向かた状態で検出された。また検出段階では、その石材に対して南東辺の対称な位置でも同様な石材が検出されたが、下層から練玉が川土したことや、土層堆積が床面構築後に石の周囲だけ掘り込まれたような状況を示していたことから、側壁石材の抜き取り時に陥入したものとみられる。また掘り方内には、石材の抜き取りに伴う搅乱時に陥入したとみられる15~20cm大の砂岩礫が奥壁側を中心にみられた。

床面はよくしまったにぶい黄褐色シルトと砂岩小礫によって構築されている。壁の内側ほぼ全面ににぶい黄褐色シルトがみられるが、その中央部はくぼめてあり、棺の据え方となっている。また床上面には部分的に10~15cm程度の砂岩小礫が用いられているが、遺物が礫上にはみられず、礫のない部分から出土している状況から考えて、当初より床面全体に敷かれたものではないと考えられる。



第43図 5号墳遺物出土状況

遺物出土状況

遺物は、須恵器、鉄器、装身具などで、掘り方中央部付近に集中している。鉄器は、その出土位置によって大きく3つに分けて考えたい。第1は石室北西側に位置するものである。北西辺中央部で鋒を奥壁右隅へ向ける長頭鎌388・389、北西辺の側壁内側の長頭鎌387と鉄製心棒付劔鎌車398、さらにやや開口部よりの平根鎌381といった軸を奥壁左隅へ向けたものがこれにあたる。これらはすべて7層上にあり、全体的にシペルが高いと、ほぼ完形のものが多い。第2は掘り方中央のくぼみの中、すなわち5層中において若干高い位置にあるもので、やや奥壁寄りで鋒を奥壁方向に向ける平根鎌382～384や、開口部側に位置する刀子395、長頭鎌390がこれにあたる。これらのグループも残存状態が良好なものが多い。第3は同じく5層中にあって、最も低いレベルに位置するものである。他のグループの残存状態が非常に良いのに対し、このグループはすべて小片である。

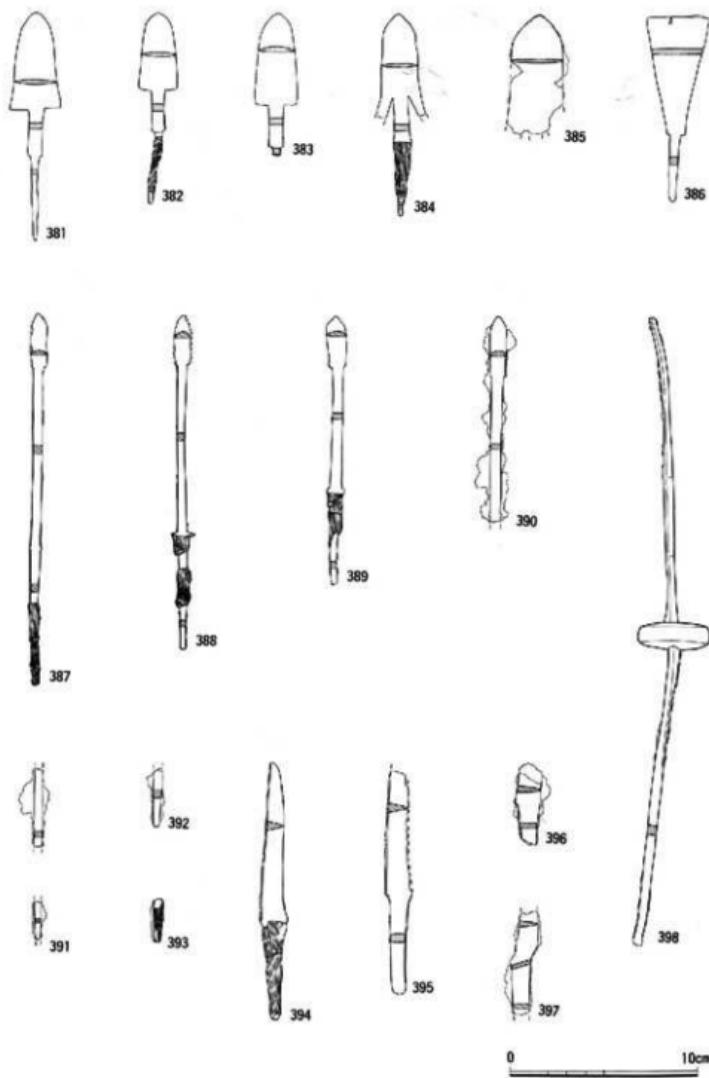
装身具は、すべて石室中央のくぼみに集中している。勾玉、管玉、切子玉などの大形の玉は5層内の北側と南側に中心を持つ2つの群に分かれている。それぞれの中心には勾玉がみられる。Ⅰ群は開口部側に位置する大小1つずつの勾玉(404、405)を中心に、6つの碧玉製管玉(407、410～414)と12個の切子玉(423～432、434、435)で構成されている。この群に属する碧玉製管玉は、全長21.60～29.75mmと大きいもので、また切子玉は10.80～21.05mmと小さいもので占められている。Ⅱ群は奥壁側に位置する大小1つずつの勾玉(403、406)を中心に、3つの碧玉製管玉(409、415、416)、3つの水晶製管玉(417～419)、3つの切子玉(420～422)、平玉(436)、4つの算盤玉や平玉、水晶製管玉など種類が多いのも特徴となっている。耳環は4個あり、形状、法量ともによく似ている399と400が、Ⅰ群の分布域において30cm程度の距離で出土している。ガラス玉は5層堆積部分全面にみられるが、Ⅱ群分布域にはやや密度の高い部分もみられる。練玉はⅠ群分布域に散布の中心がみられ、奥壁側はやや少ない。

須恵器は、ほぼ完形の杯身(811・812)が2つ、開口部において伏せられた状態で、やや奥側で蓋片(808・809)が検出され、埋土からは杯身(813)や短頭壺(810)の蓋が出土している。

以上の床面より出土された遺物は、棺外遺物と棺内遺物に分けられる。棺外遺物は、鉄器の第1グループと須恵器811・812といった7層上より検出されたものがこれにあたる。棺内遺物は鉄器第2、第3グループと装身具Ⅰ・Ⅱ群といった5層中より検出されたものがこれにあたる。

(3) 出土遺物

出土遺物には、鉄器、装身具、須恵器がある。以下各種遺物について記述する。



第44図 5号墳出土遺物(1) 鉄器

鉄器（381～398）

鉄器には、鉄鎌（381～393）、刀子（394）、鉄製心棒付石製紡錘車（398）がある（第44図）。鉄鎌には、平根鎌、長頭鎌、その他鎌片がある。381～383は三角形鎌である。鎌身部の平面形が長三角形を呈し、鎌身関部は直角関を呈する。鎌身部長は4.10～5.20cmで、断面は平造である。鎌被部は長さ2.10～2.20cmで、直線的にのび、直角状の鎌被を持つ。384・385は鎌身の平面形が長三角形を呈するもののうち、鎌身関部にやや深い逆刺を有する扇状三角形鎌である。384は逆刺部先端が欠損しているが、鎌身部の残存長5.60cm、断面は平造である。鎌被部は長さ2.60cmでやや台形に近い形状の鎌被を持つ。386は方頭鎌で、鎌身部先端が方頭をなし、その先端に刃部を有する。鎌身部長10.0cm、断面形は平造で両角関を呈する。387～390は長頭鎌である。鎌身部は平面形がいずれも長三角形を呈し、片丸造で両角関を呈する。鎌被部は直線的にのび、すべて棘鎌被を持つ。また鎌被部・茎部の断面はすべて方形である。鎌身部長は2.70～3.25cmといずれも大差ないが、鎌被部は389の6.80cmに対して、387、388は9cm以上と大差がみられる。382、384、387～389には茎部に木質が残存している。

刀子は、394は全長13.8cm、刃部長8.60cm、茎部長5.20cmで、刃部に研ぎ減りがみられる。また茎部は刃部に対して若干下ねじれており、木質が残存している。395は残存長12.9cm、刃部残存長6.60cm、茎部長5.30cmで、鋒を欠き、刃部の残存もよくない。茎断面はいずれも隅丸方形である。

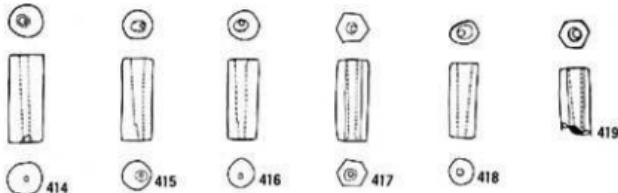
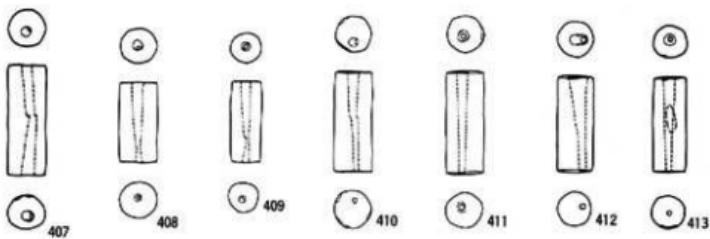
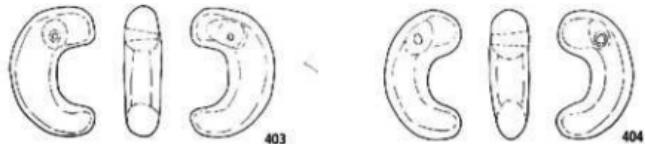
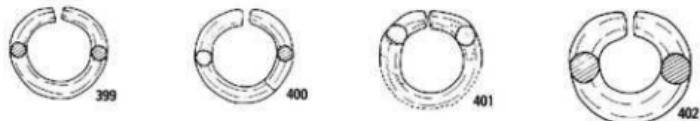
398は鉄製心棒付紡錘車で、軸は全長33.8cmの鉄製で、断面方形の棒状であるが、紡錘車の接する部分はやや太くなっている。紡錘車は滑石製で、直径3.82cm、厚さ1.20cmで無紋である。

装身具（399～807）

装身具には、耳環（399～402）、勾玉（403～406）、管玉（407～419）、切子玉（420～435）、平玉（436）、算盤玉（438～441）、棗玉（437）、ガラス玉（442～600）、練玉（601～807）がある（第45～55図）。

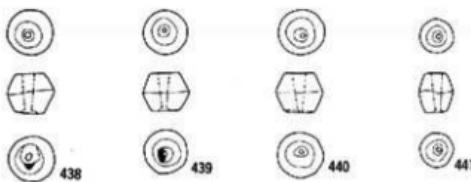
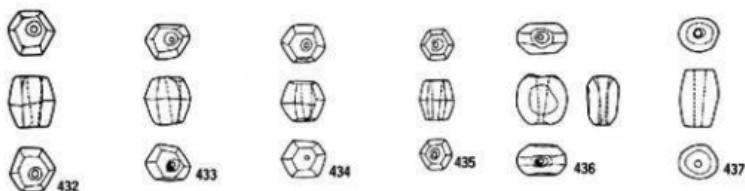
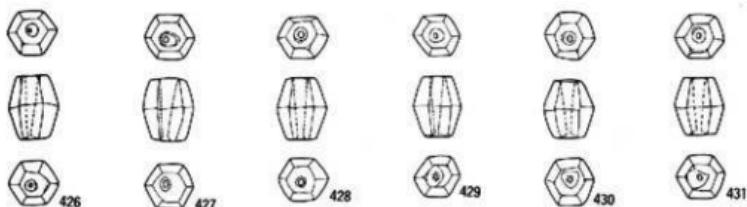
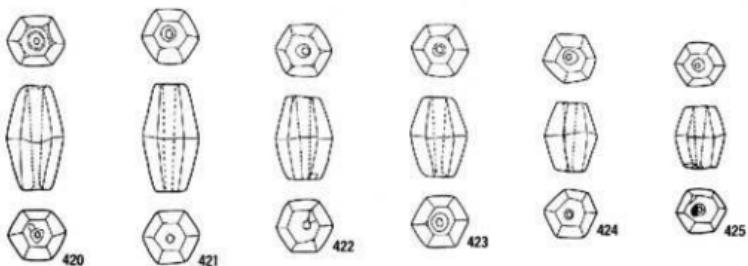
耳環は4個ある。いずれも中空で、断面円形の銅芯を持つ。402は銅芯に銀箔が施されており、比較的良好に残存している。他は芯しか残しておらず、残存状態は悪い。その出土地点と形状・法量より、対になるもの1組（399・400）と他2組（401・402）に分けられる。

勾玉は4個ある。403はきいろぢや色のメノウ製で、左側面より片面穿孔し、欠損痕は研磨してある。404は碧玉製で、右側面からの片面穿孔である。色調はボトルグリーンを基調とするが、黄色いしみ状の斑点が見られる。また403・404ともに全体に曲面に仕上げてあり、いずれの面にも明瞭な稜線は持たない。405は水晶製で、左側面からの片面穿孔である。全体に



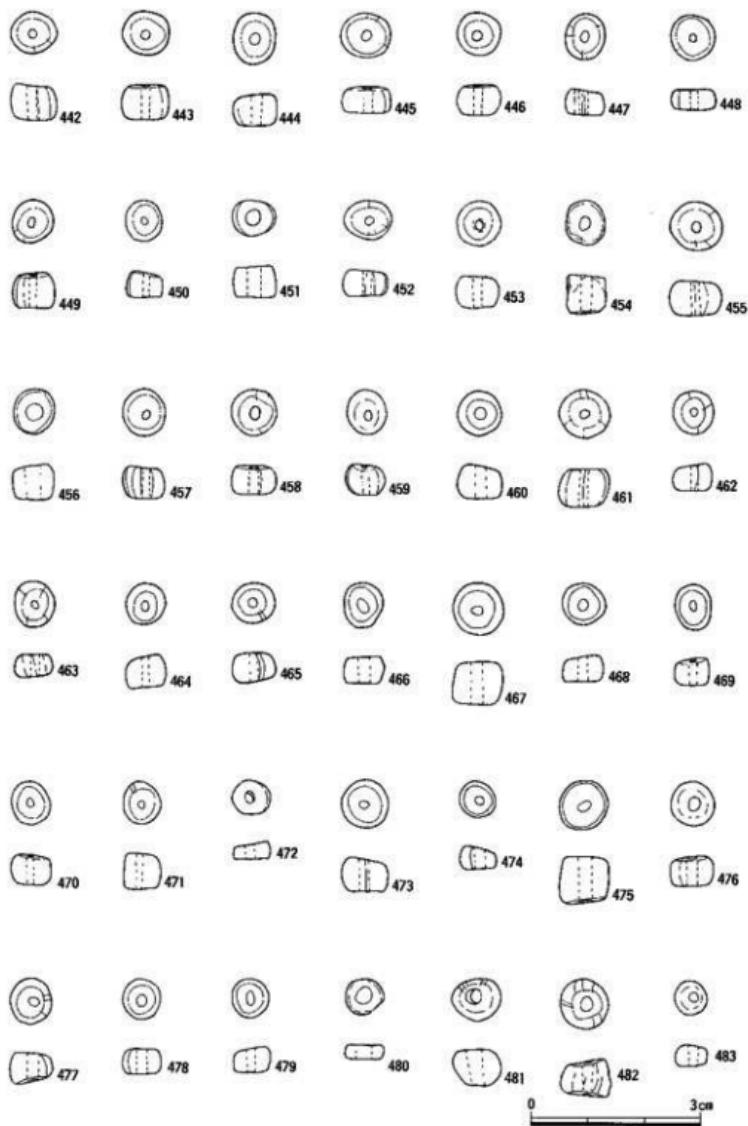
0 3cm

第45図 5号墳出土遺物(2) 耳環・勾玉・管玉

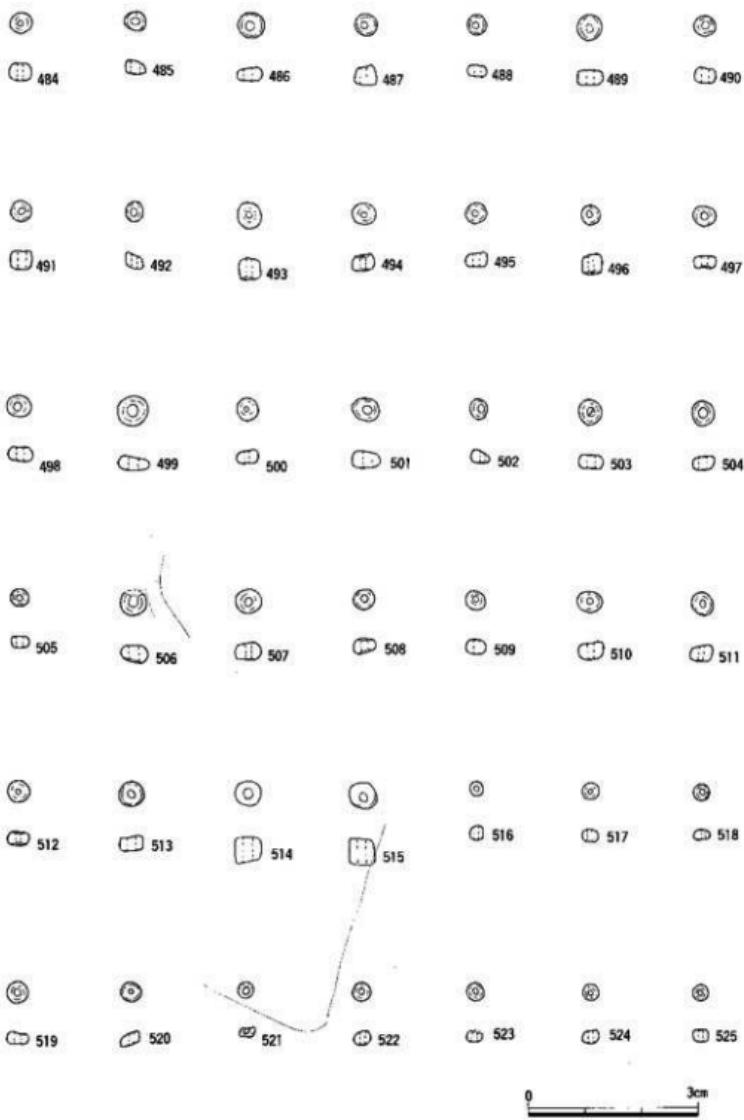


0 3cm

第46図 5号墳出土遺物(3) 切子玉・その他の玉



第47図 5号墳出土遺物(4) ガラス玉

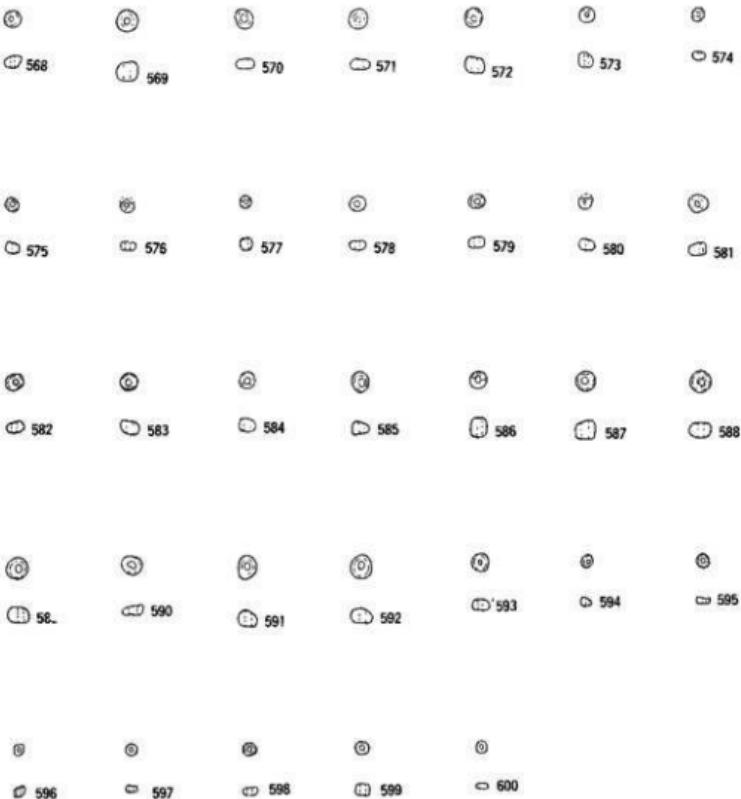


第48図 5号墳出土遺物(5) ガラス玉

526	527	528	529	530	531	532
533	534	535	536	537	538	539
540	541	542	543	544	545	546
547	548	549	550	551	552	553
554	555	556	557	558	559	560
561	562	563	564	565	566	567

0 3cm

第49図 5号墳出土遺物(6) ガラス玉



0 3cm

第50図 5号墳出土遺物(7) ガラス玉

仕上げであるが、頭部先端は稜を持ち平坦面になっている。また右側面には小さな欠損痕がある。406は白色の軟下製で、C字形に近い形状を持ち、両面から穿孔した可能性がある。403と404、405と406はそれぞれ形状や法量が似ており、製作段階での規格性を感じられる。

管玉は13個あり、407～416はボトルグリーンの碧玉製、417～419は水晶製である。軟下製のものには、両面穿孔のもの（407～409）と片面穿孔のもの（410～416）がある。また片面穿孔のもののうち、412、415、416は同一面より2度穿孔しており、上面の孔が橢円形を呈す

る。415を除いては穿孔に伴う欠損痕はみられない。水晶製のものには円筒状のもの（418）のほか、明瞭な稜を持ち、六角柱状のものがある（417・419）。

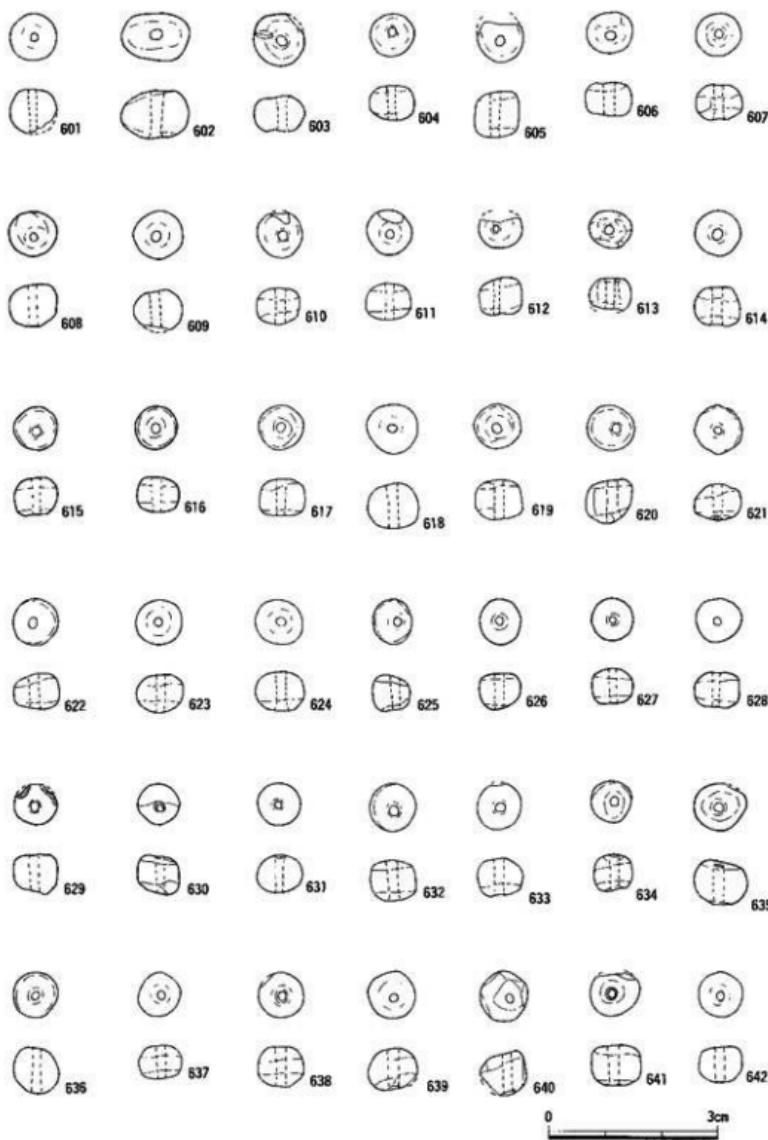
切子玉は16個あり、水晶製で片面穿孔されている。421、422、434を除いて底部には欠損痕がみられる。またいずれにもよく似た法量や形状のものがあり、2～3個がグループで制作された可能性も考えられる。

半玉は全長13.20mmの水晶製で、片面穿孔されている。底部には穿孔に伴う欠損痕がみられ、側面は研磨により平坦面をつくりだしている。

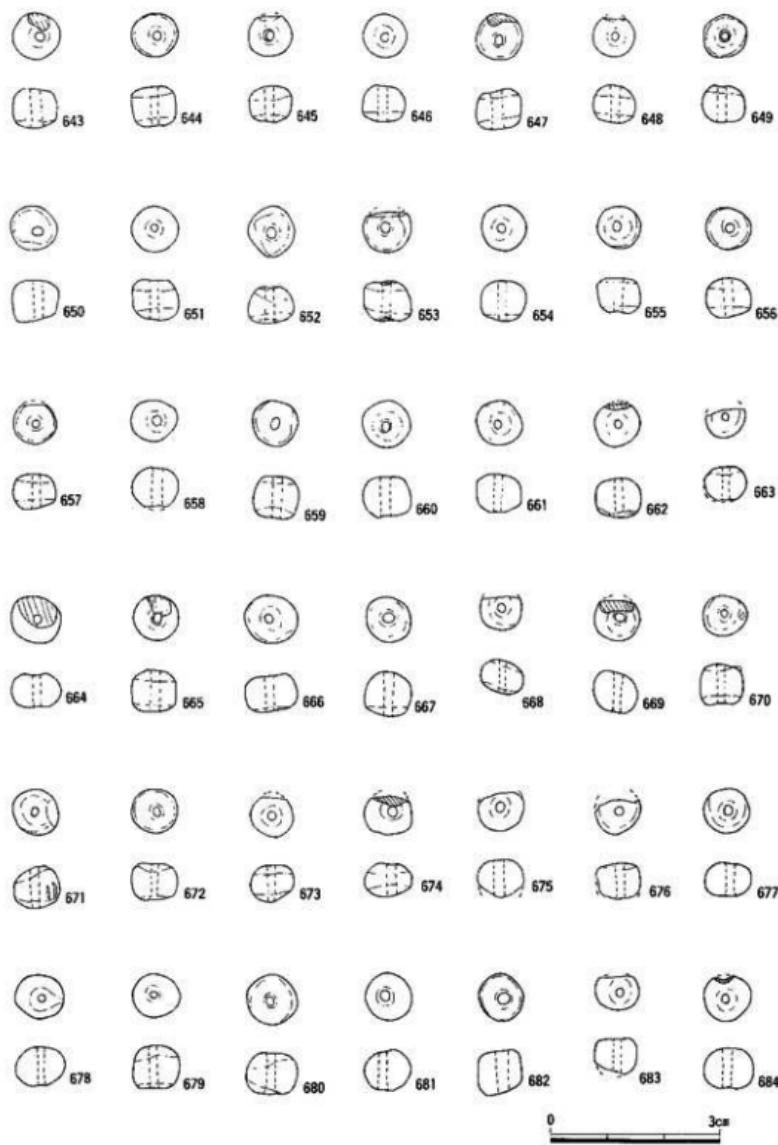
棗玉は全長15.55mmの埋木製で上下両面は平坦面となっている。

算盤玉はいずれも水晶製であるが、438～440のように胴部径12mm程度、重量2g程度のものと、441のように胴部径が9mm程度しかないものの2種に分けられる。いずれも片面穿孔されており、底部には穿孔に伴う欠損痕がみられる。

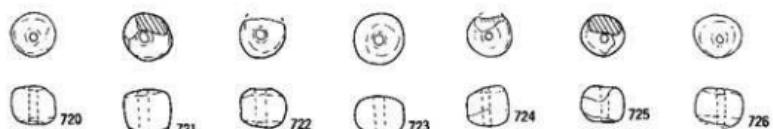
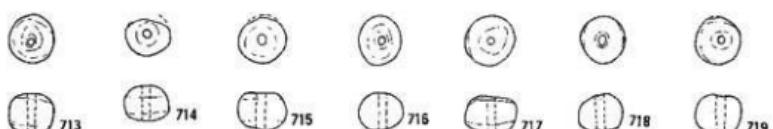
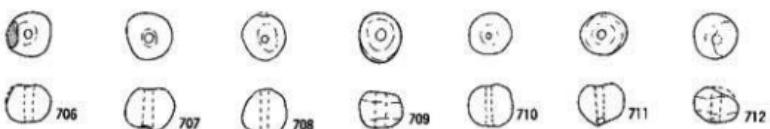
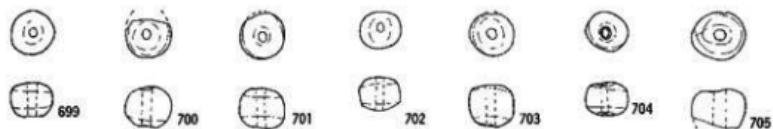
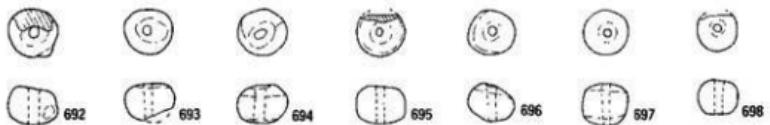
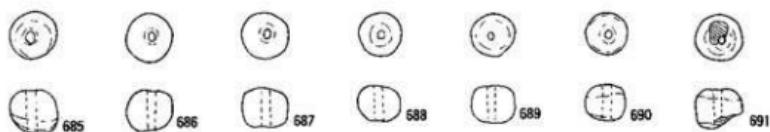
ガラス玉は、径によりA～Eの5つのグループに分けられる。A群（442～483）は径が小さいもので6mm程度、大きいものでは9mmを越える大型の玉で、更に色調、形状よりA1からA5の5つに分けることができる。A1群（442～477）は、紺色で孔に平行な方向に気泡が伸び、上下両面は研磨により平坦面となっている。A2群（477・478）はあいいろの玉で、A1群同様孔に平行に気泡が走っている。A3群（479・480）はダーピーブルーカラの玉で、形状は前述の2つの群と同じであるが、前述2群の孔がほぼ円形なのに対し、孔が梢円形になっている。A4群（481・482）は紺色の玉で、上下両面は研磨により平坦面となっているが、気泡が孔に対して斜め方向に走っており、巻き付け技法によってつくられたものではないかと考えられる。A5群（483）はこいあいいろの玉で、他の4群とは異なり、片面のみ研磨により平坦面をつくっている。B群は径4～5cm程度の中位の玉で、色調によりB1～B4の4群に分けられる。B1群（484～490）は紺色で上下平坦となっているものと、研磨せずに切り離し時の名残とみられる突起が残存するものがある。B2群（491～506）は透明感のあるあさぎいろの玉で、基本的には表面張力によって自然に丸みを帯びて固まつたものと考えられるが、494～499のように孔の周囲に若干研磨のみられるものもある。B3群（507）はブルシアングリーン、B4群（508～513）は黄色の玉で、孔の周囲に若干研磨がみられる。C群（514・515）は、径4.8mm程度のぶあおみどりの玉で、管状のガラスを切断したような形状をしている。D群はほとんどが径4mm以下の小さい玉で、色調によりD1～D5の5群に分けられる。D1群（516～545）は紺色で、521・523には切り離し時の突起が残存している。D2群（546～553）は不透明なあさぎいろ、D3群（554～572）は不透明なうすみどり、D4群（573～586）は透明感のあるうすみどり、D5群（587～593）はわきびいろである。E群（594～600）は径3mm以下と最も小さいミネラルバイオレットの玉で、ほとんどが管切り法によってつくられているようである。



第51図 5号墳出土遺物(8) 練玉

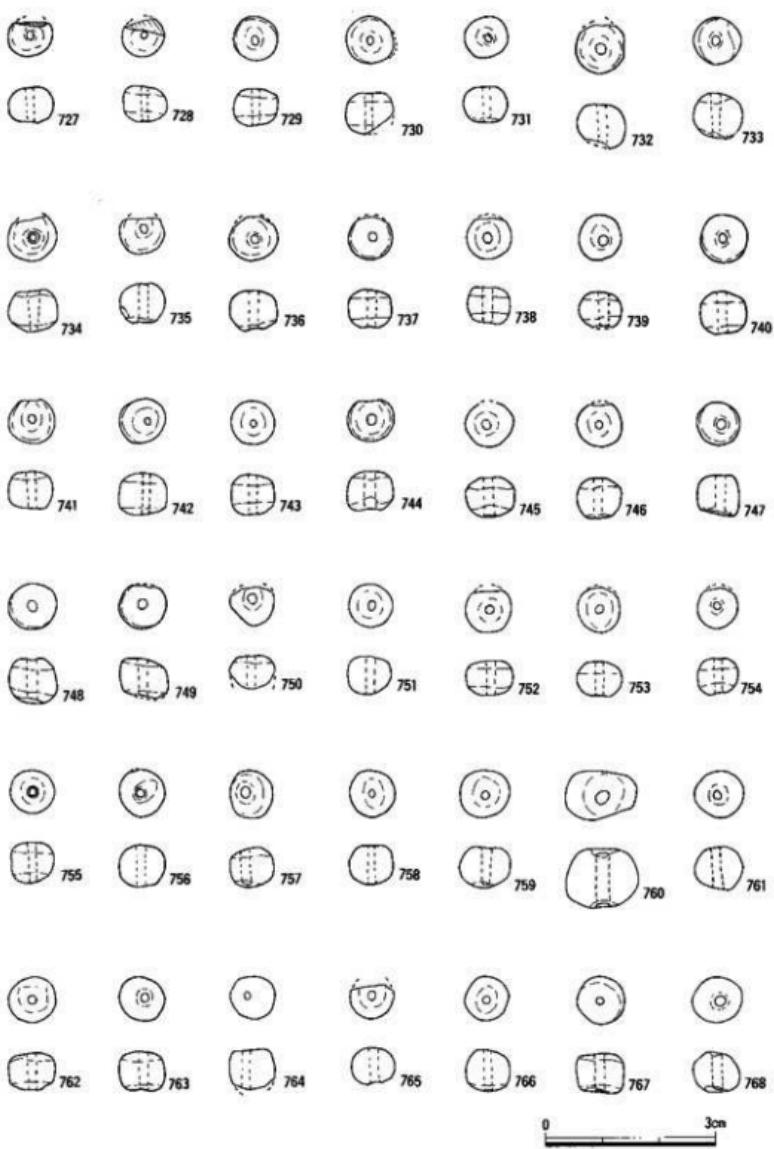


第52図 5号墳出土遺物(9) 紡玉

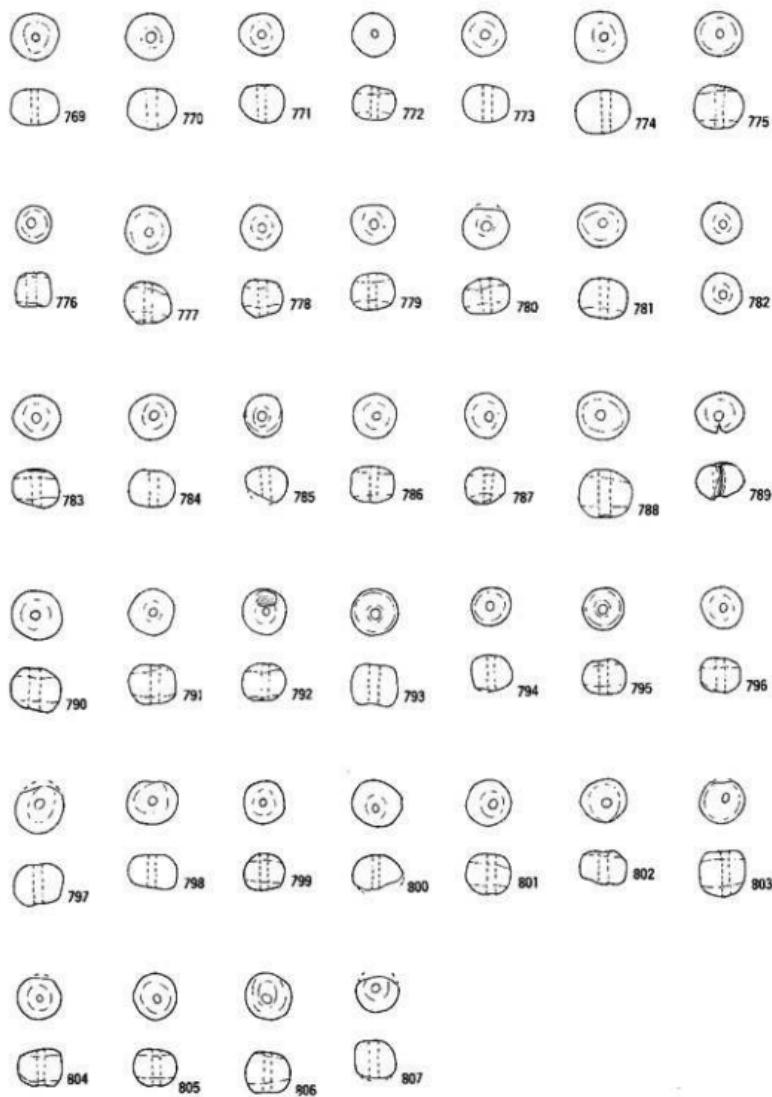


0 3cm

第53図 5号墳出土遺物(10) 緑玉



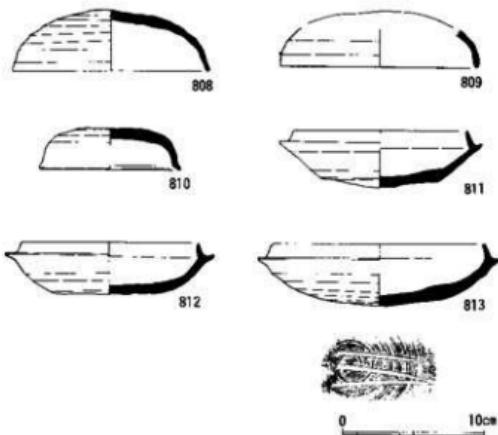
第54図 5号墳出土遺物(1) 緑玉



0 3cm

第55図 5号墳出土遺物(12) 線玉

様は、光沢のある黒色をした十製の丸玉である。径はほとんどが7~8mm程度であるが、602・759のように12mmを越えるものもある。形状は多様で、やや偏平な地形を呈し丸玉形を呈するものや側面の整形によって臼玉形を呈するもの、半上に近い形のものなどがある。図示したもの他にも数多く出土しているが、破損しているものが多く、実測できなかったものが多い。



第56図 5号墳出土遺物(3) 須恵器

須恵器 (808~813)

須恵器は、杯蓋、杯身、短頸壺の蓋であるが、蓋杯のセット関係は明確ではない(第56図)。808、809は蓋杯の蓋で、どちらも口徑14cm程度である。特に808は回転ナデが強く、外側の凹凸が激しい。810は短頸壺の蓋で、口縁端部に1条の沈線が巡る。811~813は蓋杯の身である。811、812は、口徑12cm程度で外反気味の口縁部へと外上方へのびる受部が特徴である。813は口径15cmほどで、内傾気味にのびる口縁部とやや水平にのびる受部が特徴である。また813には底部外面に3条のヘラ記号がある。

(4) 小結

本墳は、その土層堆積状況から、壁の石材抜き取りに伴う擾乱を受け、その後一時期に埋まつたものと考えられる。墳丘盛土も墳丘の西半分も全く残存していないほど現存状態は悪いが、その整然とした遺物の出土状況、残存状態の良好な遺物、さらに埋土中や周辺の表探遺物が少ないとから、床面については擾乱の影響を受けていないとされる。

追葬について、①須恵器は床面直上より出土した杯身(811・812)と埋土より出土した杯身(813)とを比較した場合、埋土より出土した杯身の方が型式的に古い様相を呈する。②鉄器は、最も擾乱を受けにくい5層最下部に位置するものの現存状態が他に比べて極度に悪い。③装身具についても、耳環や大形の玉類が2組に分けられる。④遺物の出土状況から考えて、掘り方中央に据えられたであろう棺以外の場所に埋葬した形跡がみられない。な

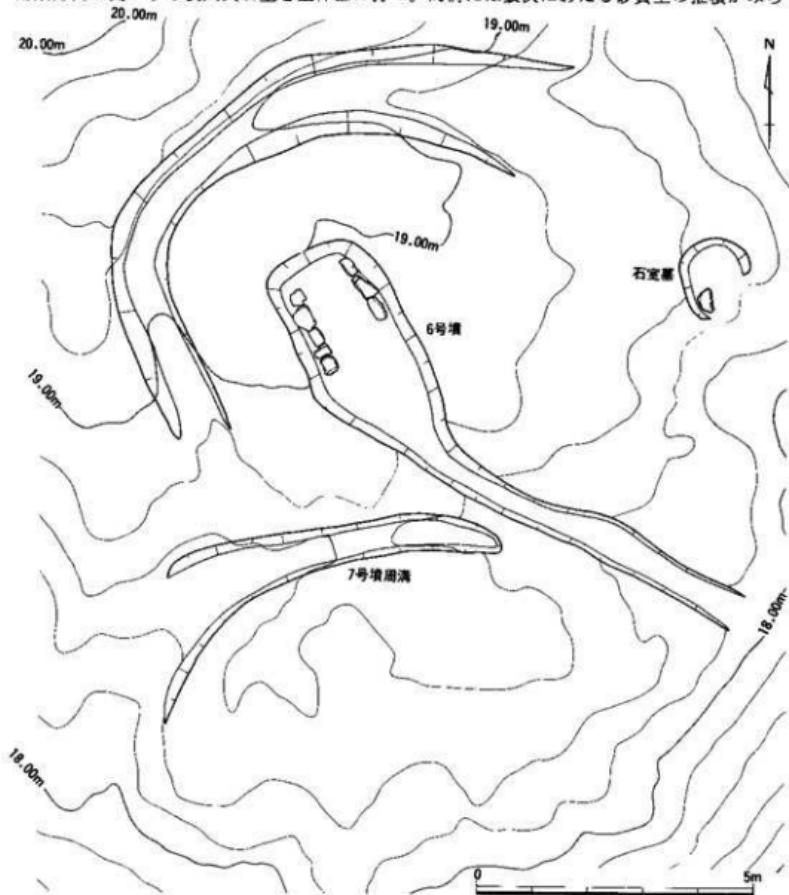
どの点から、掘り方中央のくぼみに少なくとも2度の埋葬が行われたものと考えられる。

本墳は、蓮華谷古墳群（Ⅱ）においては他のすべての古墳が尾根鞍部に立地するのに対し、本墳はやや下った斜面に立地すること、他の主体部の床面がすべて礫床が構築されているのに対し、シルトを敷き詰めて床面としているなど、構築手法に特徴がある。このことは副葬品構成において、徳島県下では少ない方頭鎌や筋鉤車がみられることや、規模に比べて鉄器や装身具が多い点にも表れており、本墳被葬者の性格を表すものとして注目される。

6号墳

(1) 墳丘・周溝

6号墳は、調査区の最南端に近い標高18~19mの地点にある。東側墳丘外に石室墓が、主体部のすぐ南側に7号墳周溝が構築されている。北側には墳丘をほぼ半周する周溝を有し、南東方向に開口する横穴式石室を主体部に持つ。周溝には数次にわたる砂質土の堆積がみら



第57図 6号墳墳丘測量図

れたが、遺物は少なかった。墳丘盛土は流失や削平により、全く残存しておらず、墳形や墳丘規模については、周溝や排水溝から直径6～7m程度の円墳と推定される（第57図）。

（2）主体部・石室構造

石室の掘り方は、長さ約3.6m、幅約2m、残存する深さ約30cmの隅丸長方形で石室開口部は幅が狭くなっている。掘り方内には黄褐色砂質土の堆積がみられたが、掘り方内には調査前より大きな陥没があり、ほぼ床面直上まで擾乱を受けていた。

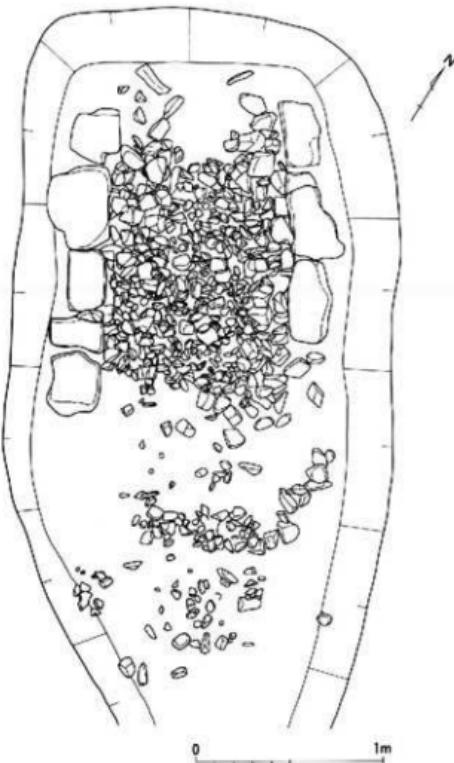
主体部には、主軸をN35°Wにとり、南東方向に開口する横穴式石室が構築されている。石室内法幅は約1mで、

長さは約2.5m程度と推定される。壁はその石材の多くを欠いている。側壁は部分的には2段残存し、1辺20～30cm大の板状の石を用いているが、ほとんどは1段であり、全く残存しない部分もみられた。奥壁は全く残存していないかった。掘り方から考えて無袖式の横穴式石室であったと考えられる（第58図）。

床面はまず第1段階で10cm大の大きさの揃った砾を敷き詰め、第2段階で5cm大の小さい砾をその上に敷くというように、2つの段階を経て構築されている。いずれの面にも棺台にあたるような石材は認められなかった。石室の開口部側半分と奥壁付近は、側壁石材はもとより床面の砾や遺物もかき出されており、本来の姿をとどめていない。

排水施設

南東側へ、長さ約7m、幅約60cm、深さ約20cmほどの断面U字形の排水溝が延びる。排水



第58図 6号墳石室平面図

溝内には、上面に明黄褐色（1層）、下面にぶい黄褐色砂質土（2層）の堆積がみられた。1層には須恵器や小碟が多くみられたが、須恵器はすべて破片であり、また碟にも意図的に置いたような形跡は認められなかった。石室の状況から考えて、本来石室内にあって掘り出されたものが含まれていると考えられる。しかし2層内にはほぼ完形に近い須恵器がみられ、排水溝に当初より置かれていた可能性が高い。排水溝北西端（837・840・841）、中央部（850・851）、南東端（849）がこれに該当する。排水溝北西端の開口部に近い地点では、蓋杯が、中央より先端部にかけては高杯や壺類が多くみられた。特に短頸壺や胞は、いずれも底部を上に向かって状態で検出されており、何らかの祭祀的意味をもたせたものと考えられる（第59図）。

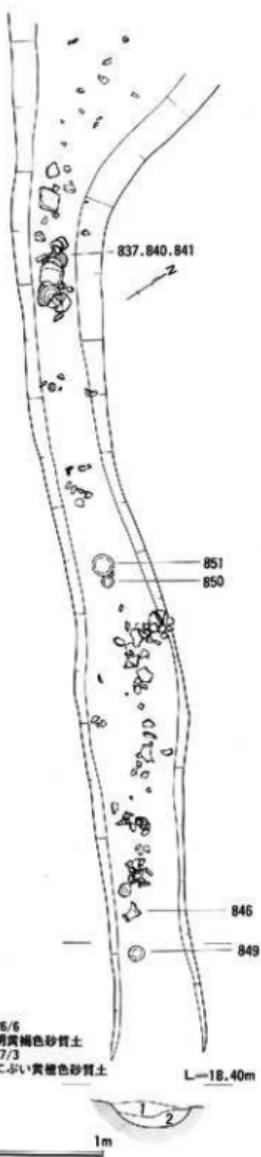
石室内遺物出土状況

前述のように石室内は擾乱がひどく、ほとんど何も残っていないかったに等しい状況である。わずかに礫床より耳環とガラス玉が礫間に落ち込むような状態で検出された。耳環は、814・815、816・817、818・819と、法量や形状から対をなすと考えられるものがやや離れて出土しており、原位置からは相当移動しているものと考えられる（第60図）。

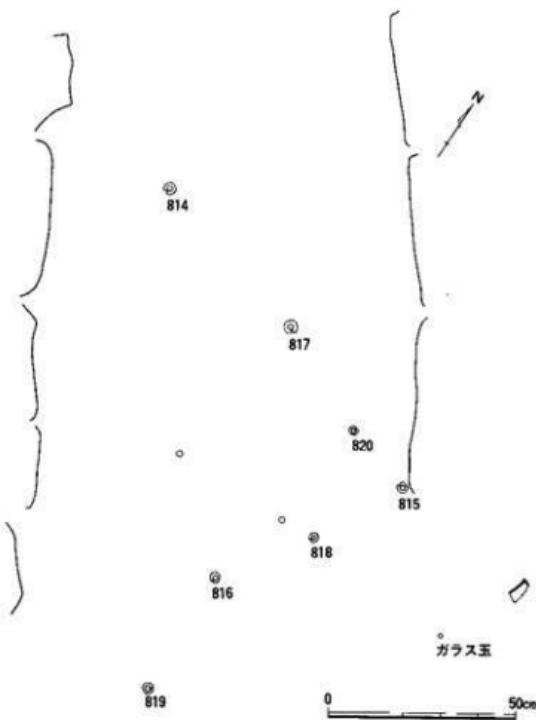
(3) 出土遺物

石室内・排水溝出土の遺物

6号墳の出土遺物には、耳環・ガラス玉などの装身具と、須恵器がある。須恵器には、蓋杯、高杯、平瓶、胞、短頸壺がある。以下各種遺物について記述する。



第59図 6号墳排水溝実測図



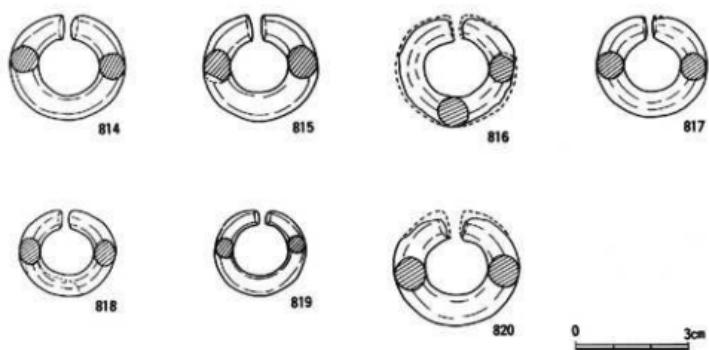
第60図 6号墳石室内遺物出土状況

耳環 (814~820)

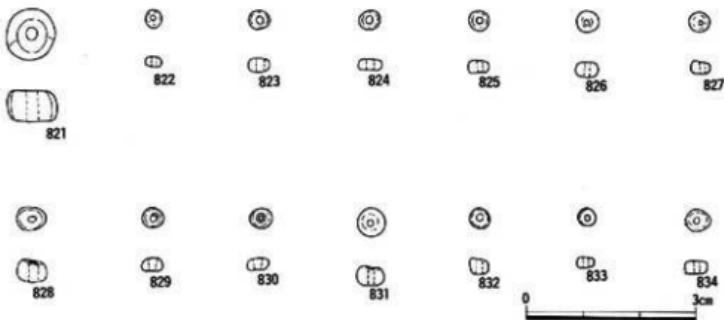
耳環はすべて右室から出土したものである(第61図)。その法量、重量によって、814・815、816・817、818・819と820の4組に分けられる。いずれも中実の銅芯を持ち、表面には銀箔が施されており、816を除いては銀の残存状況は比較的良好といえる。

ガラス玉 (821~834)

ガラス玉は14個あり、すべて石室内から出土したものである(第62図)。821は径9mmほどの紺色の玉で、上下両面を磨いてあり孔に平行に気泡が走る(A)。822~834は、径が3~5mm程度のもので色調によって分類した。822~830は径4mm程度の紺色の玉で、824のように上下両面を研磨してあるものもみられるが、830のように切り離し時の突起が残存するものがあることから、基本的に表面張力のみによって整形されたものである(B)。その他の上は



第61図 6号墳主体部出土遺物(1) 耳環



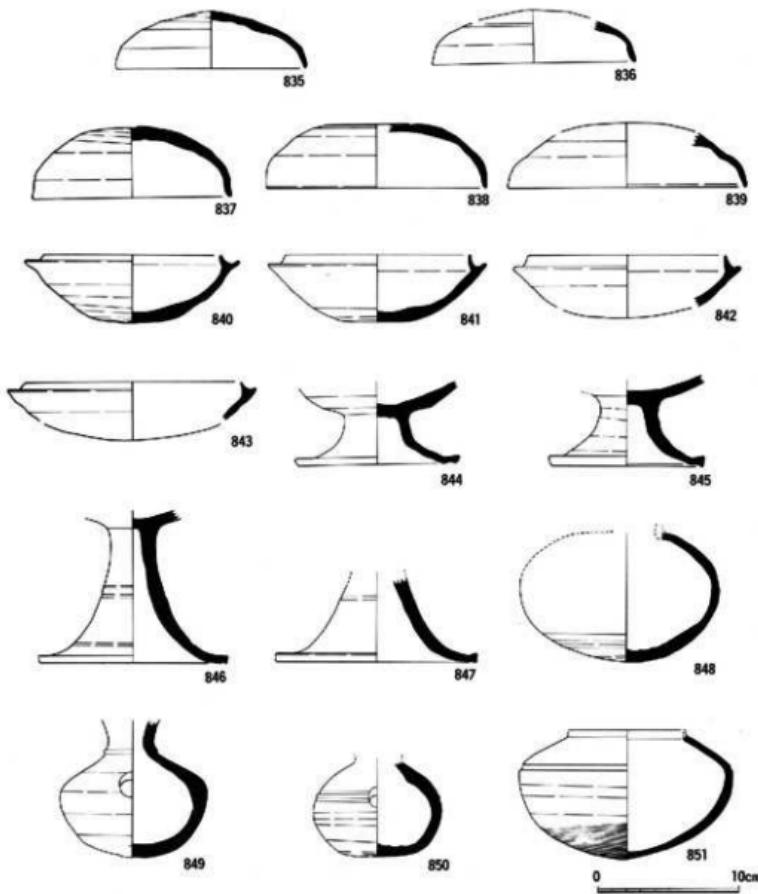
第62図 6号墳主体部出土遺物(2) ガラス玉

色調で分類し、831は不透明なにぶあおみどり（C）、832は透明感のあるにぶおあみどり（D）、833は不透明なさびあさぎである（E）。834は不透明なわさびいろの玉で、両面に研磨が施されている（F）。

須恵器（835～851）

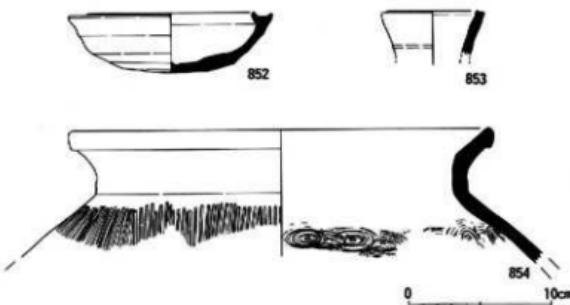
須恵器は、蓋杯、高杯、甌、短頸壺がある（第63図）。このうち835と836が石室内から、須恵器837から851が排水溝から出土したものである。

835から839は杯蓋で、口径が小さく天井が高く丸いもの（835・837）と、口径が大きく天井がやや低く平らなもの（836・838・839）がある。840～843は杯身で、840・841のように



第63図 6号墳主体部出土遺物(3) 須恵器

口径12.3cmで深いものと、843のように口径が大きく浅いもの、その中間（842）のものがある。高杯は、短脚のもの（844・845）と長脚のもの（846・847）がある。いずれも杯部を欠き、透かし孔はみられない。短脚のものは胎土が密で硬質焼成である。甌（849・850）は口頸部を欠く。いずれも壺部中央に円孔が穿たれ、849は口頸部基部に1条の凸線を、850は壺部中に2条の沈線を持つ。短頸甌（851）は口縁部を欠くが、体部の上位1/3に1条の沈線を持ち、底部に回転カキ目が施されている。



第64図 6号墳周溝出土遺物

周溝出土の遺物（852～854）

周溝出土の遺物には、杯身、瓶頸の口頸部、甕がある（第64図）。杯身（852）は、口径1.3cmと石室内や周溝出土のものに比べ、口径が小さく、立ち上がりも低い。また底部外面の大部分に自然釉がみられる。甕（854）は体部より下位を欠く。外面には擬格子タタキ、内面には同心円タタキが用いられている。

(4) 小 結

本墳は調査時には既に主体部に大きな擾乱を受け、墳丘盛土もほとんど残存していかなかったため、石室内からの遺物も少なく、状況も良好ではなかった。しかし排水溝は比較的良好な状態で残存しており、以下で本墳の特徴や出土遺物についてまとめておきたい。

須恵器は石室内も排水溝もほとんどが口径が小さく、杯身の口縁部の立ち上がりも低くなっている。また周溝からの杯身も同様の形態を持ち、型式差は認められない。したがって本墳においては、追葬は床面の状況からみて少なくとも1回は行われたようであるが、遺構存続期間自体は短かったものと考えられる。

排水溝においては、何らかの祭祀が行われた様子が窺えることが注目される。石室入口に近い場所では蓋杯が配され、離れた場所には底部を上に向いた壺頸が配されている。特に石室の入口に蓋杯を並べ置く行為は、4号墳排水溝にみられるものと共通する点があり、本古墳群の被葬者集団が共有する儀礼形態があったことが想像される。また排水溝の軸は、石室の主軸方向からやや北に振っている。これは本墳の築造時に既に7号墳が築造されていたために、7号墳を避けて構築したためとみられ、この点から築造時期は7号墳より若干遅かったものと考えられる。

蓮華谷古墳群（II）においては、ほとんどが尾根に対して直交する方向に主軸を設定し、

豊富に鉄器を持つのに対して、本墳のみ副葬品に鉄器を全く持たず、尾根に沿う方向に主軸を設定しているなど、先行して築造された古墳との間には古墳築造に関する考え方の変化が窺える。

7号墳

(1) 周溝・主体部

7号墳は6号墳の南側にあったことが推定される古墳である。調査時には残存約6m、幅約60cm、深さ約10cmを測る断面U字形の周溝が残存するのみであった。周溝には黄褐色砂質土の堆積が推積しており、須恵器が含まれていた。主体部があったと想定される地点は、削平されて南に向かってやや急な傾向となっており、主体部の掘り方を確認することはできなかったが、表土直下より須恵器やガラス玉が採集された(第57図)。

(2) 出土遺物

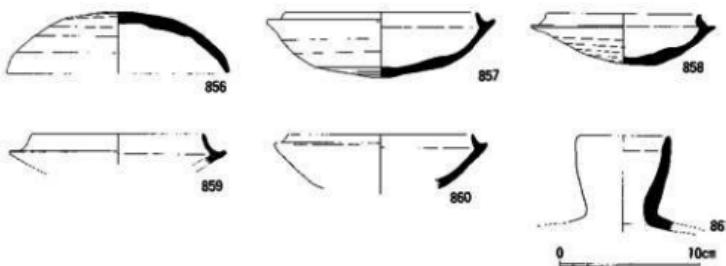
出土遺物は、主体部想定地点付近より、須恵器蓋杯、瓶類、ガラス玉が、また周溝より横瓶が出土している。856は杯蓋で、天井部内面には回転ナデのもの一定方向ナデが施されている。857~860は杯身で、857・858・860は口縁部の立ち上がりが頗く、859は口縁部の立ち上がりが高い。また857には底部内面に回転ナデのもの一定方向ナデが、858には不整方向ナデが施されている(第66図)。横瓶(862)は俵状の外形を呈し、体部外面には擬格子タタキのち回転カキメ、内面に同心円タタキが施されている(第67図)。

(3) 小結

本墳出土の須恵器は、口縁部の形態によって859のように立ち上がりが高いものと、857・858・860のように低いものの2つに分けられる。この2つの群には時期差が考えられ、追葬時期に対応すると考えられることから、少なくとも1回の追葬が行われたとみられる。また北側に隣接する6号墳の排水溝が本墳を避けるように構築されていることも考慮すると、製造時期は6号墳に先行するものと考えられる。

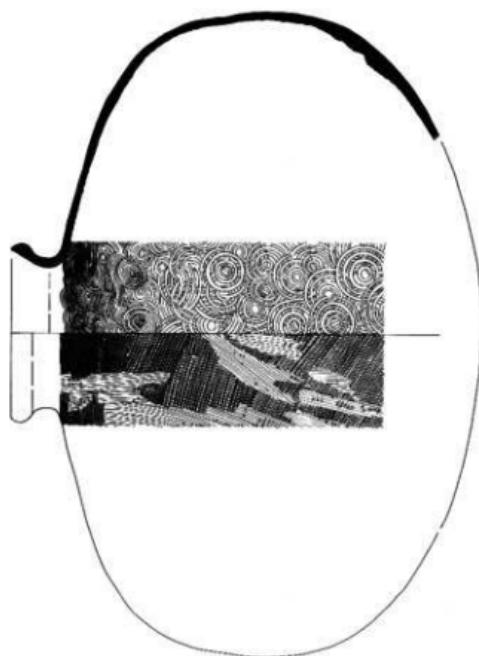
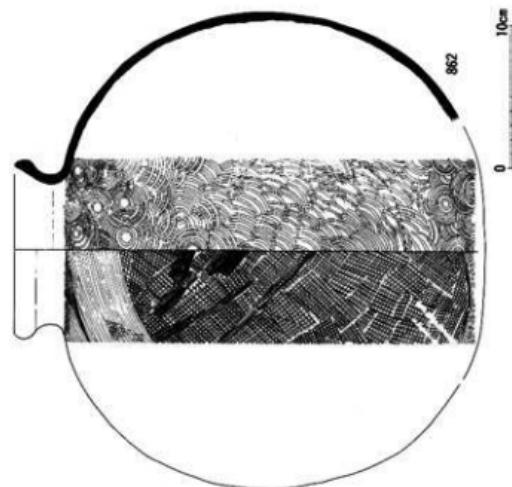


第65図 7号墳
出土遺物(1)ガラス玉



第66図 7号墳出土遺物(2) 須恵器

第67圖 7號埠出土遺物(3) 積惠器



石室墓

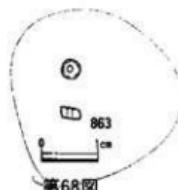
石室墓は、6号墳上体部から東へ約5mほど離れた、標高18.5mの東斜面に位置する。

全体的に大きく削平されている上、南辺から東辺中央部にかけては擾乱を受けて掘り方が不明瞭になるなど、残存状況はよくない。

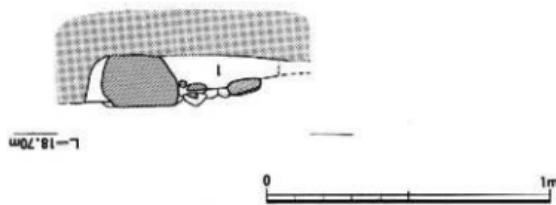
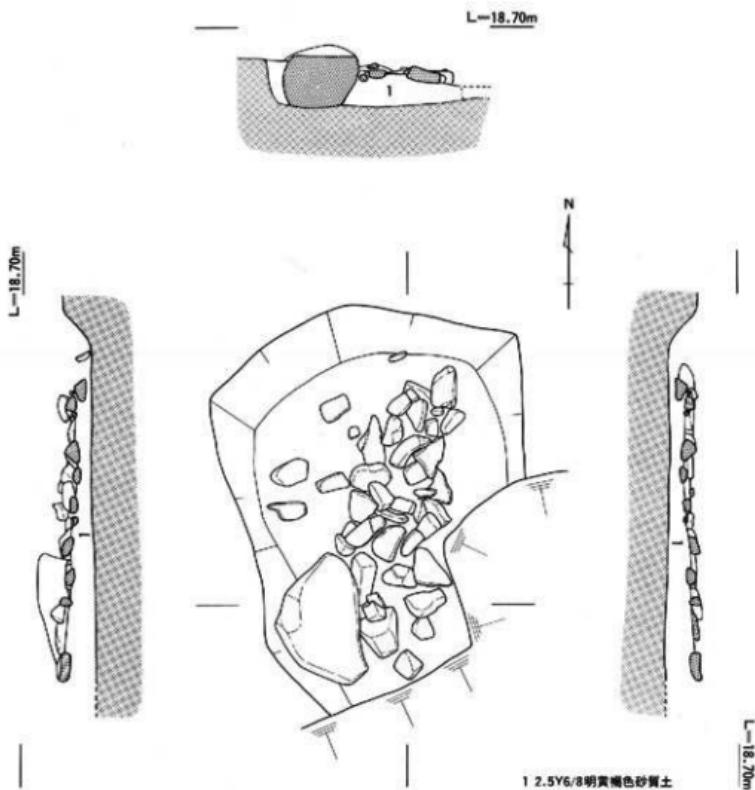
掘り方は、長軸方向の残存長約130cm、短軸方向約110cm、深さ約10cmの隅丸方形と推定される。床面直上まで削平されており、その上部堆積は不明である。本来は掘り方に沿って側壁が置かれていたものとみられるが、そのほとんどを欠き、わずかに1つだけ残っている石材が側壁の名残をとどめる。掘り方底部中央には、長さ110cm、幅35cmにわたって、10~15cmの小礫を用いた礫床が残存している(第69図)。掘り方や残存する側壁、小礫から推定される主軸方向はN20°Wである。

出土遺物は、礫床北隅の石の隙間よりガラス玉1点が出土した。ガラス玉は、直径3.40mm、厚さ2.15mm、孔径1.45mm、重量0.01gで、不透明な「水色」をしており、両面に研磨による平坦面がある(第68図)。

本石室墓の構築年代については、土器等年代の決定できる遺物を欠いているために明確ではないが、その立地と主軸方向等から、6号墳築造と近い時期に構築されたものと考えられる。



第68図 石室墓出土遺物



第69図 石室墓実測図

土 壤 墓

(1) 遺 構

土壤墓は、4号墳と6号墳のちょうど中間、標高21~22mの地点にある。尾根鞍部に近い東側斜面に位置し、西側斜面にある5号墳と、尾根を挟んで向かい合っている。

長軸は114cm、短軸は推定75cmの隅丸方形で、長軸はN34.5°Wにとる。掘り方は大きく削平され、最も良好に残存している部分で、深さ30cm程度である。東辺は削平により掘り方がほとんど残存していない(第70図)。

遺構内には大部分にしまりのない炭化物混じりのにぶい黄橙色の砂質土が堆積していた(1層)が、須恵器の上面には、やや他の部分より明るい色のよくしまった砂質土(2層)がはいっていた。

遺物は掘り方南西辺中央付近で、完形の杯蓋と身が3組、蓋が身が上になり、ちょうど上から落ち込んだような状況で検出された。曲刀鎌は北側で、着柄のための折り返しを下に、刃部を短軸方向に向け、掘り

方底よりやや高い位置で検出された。鉄鎌は掘り方底面直上ですべて鋒を短軸方向に向け、4本が束ねられた状態で検出された。

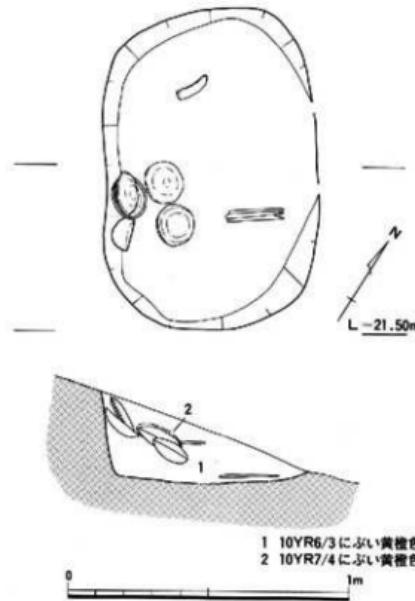
(2) 出土遺物

遺物は、須恵器蓋杯3組、鉄鎌1、鉄鎌4である。以下各種遺物について記述する。

鉄器(864~868)

鉄鎌はすべて長頭鎌で、笠被の形態より台形笠被を持つもの(864~866)と棘笠被を持つもの(867)の2種に分けることができる(第71図)。

864~866は鎌身部の平面形



第70図 土壤墓実測図

は三角形で、鎌身関部は角関を呈し、断面形は片丸造である。鎌被部長は864が8.3cmとやや短いが、おおむね9cm程度である。868は鎌身部の平面形、鎌身関部の形態は同じであるが、鎌を有し、断面形は片切刃造である。頭部は9.3cmと865・866に近いが、鍔笠被が採用されている点が大きく異なる。頭部、茎部とともに断面は方形であり、864・866・867には茎部に木質が残存している。

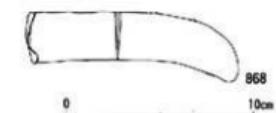
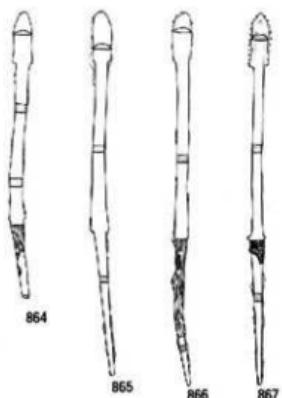
鉄鎌は全長13.4cm、幅2.7cm、厚さ3.4mmの中型の曲刃鎌で、身全体が緩やかにカーブし端部に至る。着柄部は欠損しているが、刃と着柄部のなす角度はほぼ90°である。

須恵器（869～874）

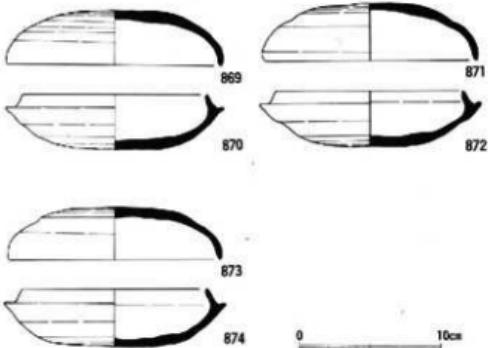
蓋杯蓋は口径約15cm、器高約4cm、身は口径約13cm、受部径15.4～7cm、器高約4cmと大きさもほぼ揃っている。蓋杯・蓋（869・871・873）はいずれも天井部がそう高くないうえ、丸みを帯びて中央部が平坦な形をしている。蓋杯・身（870・872・874）は、口縁部が内傾して外反気味に立ち上がり、受部は外上方へのびる。872・874の立ち上がり基部には1条の凹線が巡る。底部は浅く平坦であり、底部内面には一定方向ナデが施されている（第72図）。

（3）小結

本土墳墓の鉄鎌は、笠被部長のよく似た長頭鎌が4本あり、克ねられていたことが出土状況より明らかとなっていながら、笠被の形態には台形関と鍔関の2種類がみられる。従来徳島県では、台形関との転換期が明確には捉えられていなかったが、本遺構のように追葬の考えられない土墳墓



第71図 土墳墓出土遺物(1) 鉄器



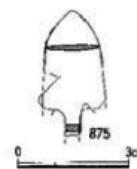
第72図 土墳墓出土遺物(2) 須恵器

において共伴していることから、兼用の採用にあたっては階層差は影響しなかったものとみられる。しかし平根旗を欠くことや、農工具を持つことなどから、副葬品組成によって階層差を表しているものと考えられる。

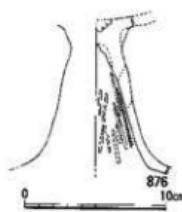
遺構に伴わない遺物

875は鉄鎌である。鎌身部が平造の腰快三角形鎌で、逆刃部先端と頭部を欠く。出土地点不明。

876は十師器の高杯である。内面にヘラ状工具によるナデがみられる。7Dグリッド出土。



第73図 包含層
出土遺物(1)鉄鎌



第74図 包含層
出土遺物(2)土師器

4 まとめ

(1) 2号墳

蓮華谷(II)2号墳は平坦墓壇底全面に礫石を敷き、その上に粘土棺床をもつ粘土構を主体部とする。基底部構造からは北野耕平氏分類の礫敷式⁽¹⁾、都出比呂志氏分類NB型式⁽²⁾、山本三郎氏分類C型⁽³⁾にあたるものであるが、主体の状況からは棺内・棺外遺物の同時性は明らかである。出土土器からは黒谷川N式直後の年代観⁽⁴⁾が与えられ、各地との対応関係では寺沢・薫編年布留0~1式間⁽⁵⁾、吉備・上東編年龜川上層式⁽⁶⁾に併行する。これは従来考えられてきた竪穴式石室の基底部構造の型式変遷や粘土構の出現時期を検討する上で看過できない重要な問題を含んでいるとともに、小形彷彿鏡の製作、副葬年代⁽⁷⁾にも波及する。刳抜式木棺の阿波地域での出現とも相まって検討すべき問題点が多いが、ここでは阿讃地域の前期古墳における主体の基底部構造と蓮華谷(II)2号墳の評価についてのみ触れておきたい。

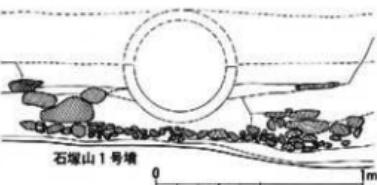
蓮華谷(II)2号墳にみられる礫石+粘土棺床のような構造をもつ主体部は阿波では知られていない。周辺地域では使用石材規模の相違はあるものの、類似する基底部構造を採用する例として瀬戸・石塚山1号墳がある⁽⁸⁾。

石塚山1号墳第1主体は墓壇をもたず、礫敷・石積壁体構築・棺の安置のち墳丘盛土という構築過程が復元されており、國木健司氏は暫定的に竪穴式石室と呼称されているが、細部において蓮華谷2号墳に類似点が多い。以下、諸点について列挙する(第75図)。

- ① 主体部構築の第1段階として礫石(礫敷)をもつ。
- ② 第2段階として大きさの異なる礫あるいは2・3段の石積が礫石(礫敷)外周に積み上げられる。
- ③ 刨抜式木棺(削竹形木棺)を採用する。
- ④ 粘土棺床は第1段階の礫石(礫敷)の直上に設置される。
- ⑤ 粘土棺床設置時点で礫積み(石積)が粘土によって埋設される。
- ⑥ 粘土棺床固定のための礫積みの機能が指摘される。
- ⑦ 第2段階の礫積み(石積)の内法幅



蓮華谷(II)2号墳



第75図 基底部断面模式図

の一方が大きく、隅丸を呈する。

⑧ 棺上半は明瞭な粘土による被覆ではない、ことなどが挙げられる。

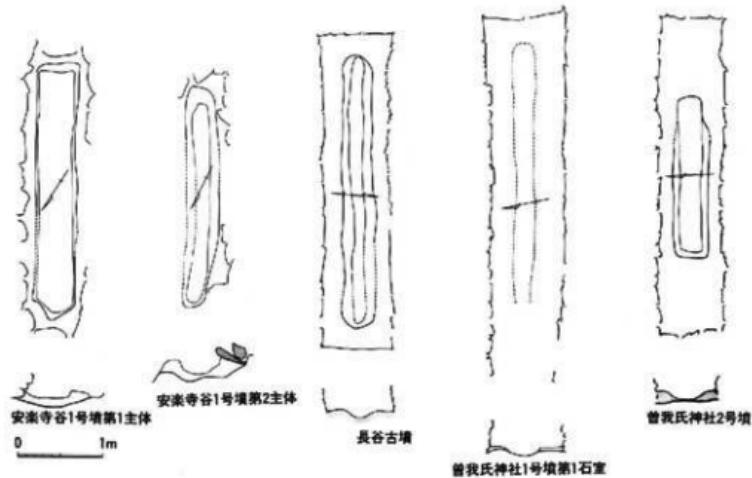
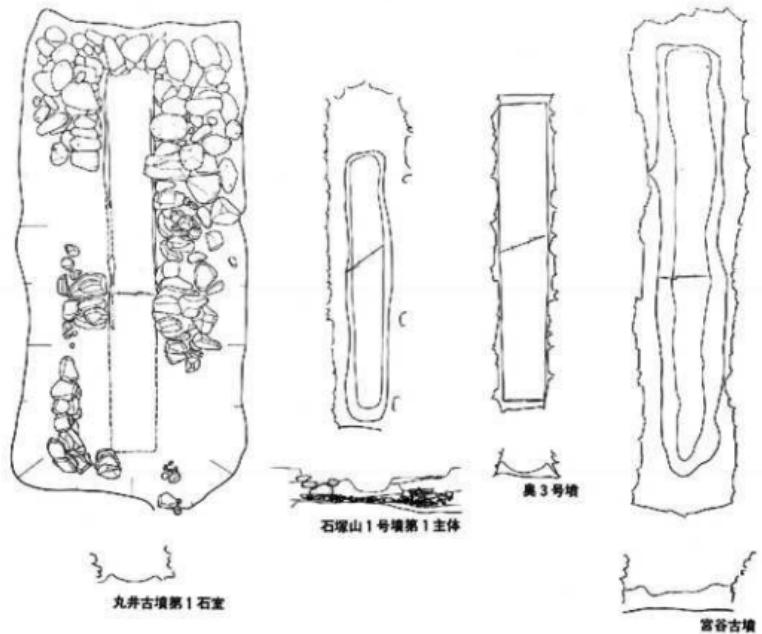
他方、棺の安置、棺床構築では蓮華谷（Ⅱ）2号墳が①礫石敷設後、棺床を構築し、棺を安置した後、墓壇外周への礫の積み上げ、粘土の充填を行うのに対して、石塚山1号墳第1主体では、外周を石積みし、壁体を構築した後、棺の安置、粘土を充填するという構築過程の相違がある。しかし石塚山1号墳第1主体にあっても、壁体は粘土棺床を固定する程度の意味をもつすぎず、報告書でも竪穴式石室の呼称の是非と粘土櫛の祖形としての可能性が指摘されているように、限りなく粘土櫛構造に近いものといえる。

石塚山1号墳については奥3号墳と同時期と考えられていることから、蓮華谷（Ⅱ）2号墳とに時期的な懸隔はなく、共に阿瀬地域における最古式の粘土櫛として認定することが可能であろう。

竪穴式石室及び粘土基底部構造の変遷については、冒頭に挙げた作業をはじめ多くの論考があるが、ここでは都出比呂志氏と山本三郎氏の分類を基に検討したい。都出氏は竪穴式石室を粘土棺床直接式・板敷式（S A I型式-1・α）、基台式（S A 2型式）、礫敷式（S B型式-1・2）、墓壇底U字形を呈する盛み十粘土棺床をもつもの（S C型式）に分類し、S B型式を新しい段階に出現する型式とされた⁽¹⁾。また粘土櫛についてはN A・N B・N C型式に分類し、S A型式より後出するものととらえられている。一方、山本氏は板礫敷+粘土棺床（A型式）、基台式（B型式）、礫敷式（C型式）、平坦墓壇+粘土棺床+周囲礫石（D型式）、墓壇底J字形を呈する盛み十粘土棺床（E型式）に分類し⁽²⁾、同様の基底部基準から粘土櫛をB・C・D・E型式に分類されているが⁽³⁾、礫敷式粘土櫛の出現を後出型式としている点で一致する。

ところで吉備地域の弥生墳丘墓における竪穴式石室や七つ塙1号墳1号石室・金蔵山古墳後方部中央石室・湯迫車塙古墳後方部石室などから、都出氏のいうS C型式を山本氏はE 1・E 2型式に分類し、E 1型式を前方後円墳成立期に吉備で出現した型式とみて、都出氏の石室基底部変遷観に疑義を提示された⁽⁴⁾。山本氏によって指摘されたような不整合な組列・複数型式の石室基底部の共存は阿瀬地域の前期古墳にも見られる。

第76図・第1表は阿波の前期古墳の主体基底部構造と讃岐の前期最古式古墳の基底部構造及び計測値を示したものであるが、礫敷き+粘土棺床をもつ例（都出S B型式-1・N B型式・山本C型式）として阿波・蓮華谷（Ⅱ）2号墳、讃岐・石塚山1号墳、鶴尾神社4号墳、礫敷が散漫ではあるが粘土棺床をもつ例に讃岐・丸井古墳第1石室、平坦墓壇に粘土棺床をもつ例（都出S A I型式-1・山本D型式）に阿波・宮谷古墳、長谷古墳、曾我氏神社1号墳第1石室、讃岐・奥3号墳、13号墳、墓壇底U字形を呈する盛み十粘土棺床をもつ例（都出S C型式・山本E型式）に阿波・安楽寺谷1号墳第1・2主体、讃岐・奥14号墳がある。



第76図 阿謨地域における前期古墳の主体基底部

古 墳 名	木棺長 (m)	木棺幅 (m)	主 体 部	時 期	基 底 部	型 式 (山本)
蓮華谷(Ⅱ)2号墳	280	45	粘土櫛	I期	NB	C
宮谷古墳	530	50	豎穴式石室	I期	SA1-1	D
安楽寺谷1号墳第1主体	304	43	豎穴式石室	II期	SC	E2
安楽寺谷1号墳第2主体	255	38	豎穴式石室	II期	SC	E2
長谷古墳	300	45	豎穴式石室	III期	SA1-1	D
曾我氏神社1号墳第1石室	310	22	豎穴式石室	IV期	SA1-1	D
曾我氏神社2号墳	200	42	豎穴式石室	IV期	SA1-1	D
丸井古墳第1石室	450	70	豎穴式石室	I期	SA1-1	D
奥3号墳	354	50	豎穴式石室	I期	SA1-1	D
石塚山1号墳第1主体	314	45	粘土櫛	I期	NB	C
奥2号墳	255	30	粘土櫛	II期	NC	E2
奥13号墳	310	55	豎穴式石室	II期	SA1-1	D
奥14号墳第1主体	355	50	豎穴式石室	II期	SC	E2
奥14号墳第2主体	400	50	豎穴式石室	II期	SC	E2

第1表 阿波地域における前期古墳主体基底部及び木棺計測値表

古墳の新旧関係はほぼ、丸井古墳・鶴尾神社4号墳→蓮華谷(Ⅱ)2号墳・宮谷古墳・石塚山1号墳・奥3号墳(前I期)⁽¹²⁾→安楽寺谷1号墳・奥13・14号墳(前II期)→長谷古墳(前III期)→曾我氏神社1・2号墳(前IV期)となるが、最古式古墳の出現段階において前方後円墳、円墳の階層差は存在するもののNB型式・C型式とSA1型式-1・D型式の共存が確認される。SC型式・E2型式は現状では後続段階に確認されるものではあるが、墓底底にU字形に粘土を充填し、上部に乱積みの石室を構築する例に庄内式併行期の安楽寺谷1号石室墓が存在することから、系譜関係は明確にしがたいものの、墓底部構造において型式的共存と組列の不整合が存在することを指摘しておきたい。ただし、都出NB・山本C型式の基底部構造はII期以降では明確な類例がない。阿波では後続時期にはSA1型式-1が主流となっており、現状ではより特異な存在といえる。

阿波の前期古墳には割竹形木棺と舟形木棺が安置される。これらは棺床形態と小口形状からの認定であるが、都出氏も指摘するように両小口幅に差異がなく、棺床に高低差のないものが散見する。また割竹形木棺と報告されている例にあっても全般に小口部分が丸みを帯び、棺床レベルが若干高くなる例がみられる。木棺規模は2~3m、幅40~50cm程度である。その意味では幾内的な割竹形木棺の存在は中期の前山古墳以前には明瞭ではなく、広義の刳抜式木棺の範疇に収まるものである。ただし、蓮華谷(Ⅱ)2号墳では粘土棺床小口部分は丸

みを呈していたが、小口板の痕跡が確認され、丸みを帯びた見かけ上の小口部分は小口板の押さえ部分にあたることから、他の古墳においても実際の小口形状の再検討が必要である。

徳島県では前方後円墳の構築に先駆けて堅穴式石室と箱形木棺をもち、船載鏡と玉を副葬する萩原1号墓が出現する。その時期は吉野川下流域後期編年Ⅵ期（黒谷川Ⅱ式=庄内式古段階）であり、定型前方後円墳はⅦ期直後、すなわち蓮華谷（Ⅱ）2号墳の時期に造営される。堅穴式石室と彷彿重圓文鏡、鐵轍、鐵斧、鐵鑿・鉢・玉を副葬する宮谷古墳が初現である。宮谷古墳出土の二重口縁壺は振凹線を施す黒谷川Ⅱ式以降の壺の系譜を引くものであるが、口縁部の屈曲は強くかつ短小であり、蓮華谷（Ⅱ）2号墳出土広口壺と共存するタイプであろう。宮谷古墳では前方部裾より三角縁神獸鏡が3面出土しており、その本来の帰属地點は不明といわざるをえないが、阿波での三角縁神獸鏡の副葬が寺沢氏編年の布留0～1式間に収まる蓋然性が高いことを示している。

阿波地域での最古の前期古墳である蓮華谷（Ⅱ）2号墳と宮谷古墳には、墳形・墳丘規模・主体には大きな隔差があるものの、三角縁神獸鏡を除いた副葬遺物にはさほどの懸隔を指摘できない。被葬者の関与する集落との関係でいえば宮谷古墳と矢野遺跡、蓮華谷（Ⅱ）2号墳と黒谷川郡頭遺跡のように、造営地点の眼下に展開する集落との関連が推察されるが、両地域での首長墳の出現は、古墳造営以前における矢野遺跡を中心とする鯖喰川流域遺跡群をヒンターランドとして、郡頭遺跡を形成させた社会状況の解体をうかがわせるものといえよう。

この時期が東阿波型土器拡散の最終段階であることを考え合わせた場合、前時期に想定される拠点的集落群と機能集落という関係を呈した社会構造の変動が想定される。それは吉野川下流域のより広範囲にも波及する。東阿波型土器と親縁関係をもつ下川津B類土器分布圏を離れた丸龜平野南東部地域の石塚山1号墳と蓮華谷（Ⅱ）2号墳の主体構造の近似、萩原1号墓石室にみられた外部圓み壁と石塚山2号墳第1主体部石積み墓壙の近似、あるいは東讃・雨滝山周辺地域の奥14号墳と安楽寺谷1号墳の石室類似などであり、被葬者間の新たな政治的関係の編成がうかがえよう。

ところで、阿瀬地域においては、頭位東西優位の原則が指摘されてきたが⁽¹⁴⁾、宮谷古墳では萩原1号墓以来の東西優位の原則を保持しているものの、蓮華谷（Ⅱ）2号墳、安楽寺谷1号墳第1・2主体では南頭位を示している。蓮華谷（Ⅱ）2号墳の被葬者は触れたように郡頭遺跡の首長を想定することが妥当であるが、前述の墳丘構築時期と畿内周辺への東阿波型土器の搬出ピークがオーバーラップすることや木材の1/3程度の棺痕跡が、現状では最も集中的に東阿波型土器が搬出された中河内地域の中の加美遺跡C類木棺のような構造を反映している可能性ともあいまって、蓮華谷（Ⅱ）2号墳に畿内的な思惟が流入したか否か、東西主軸以外の頭位を採用する背景について、検討すべき点は多い。

- (1) 北野耕平「前期古墳における内部構造の問題」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室報告 第1冊 1964
- (2) 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26-3 1979
- (3) 山本三郎「畿内地域における前期古墳の複数埋葬について」『関西大学考古学研究室開設参拝周年記念 考古学論叢』 1983
- (4) 皆原康夫「阿波弥生時代終末期社会の特質」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV 1 1992の編年観による。
- (5) 寺沢 帷『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1988
- (6) 柳瀬昭彦他『川入・上東』岡山県教育委員会 1977
- (7) 楠本哲夫「古墳時代彷彿鏡製作年代試考」『大和宇陀地域における古墳の研究』宇陀古墳文化研究会 1993
- (8) 國木健司『石塚山古墳群』棲歌町教育委員会 1993
- (9) 都出比呂志「埴輪編年と前期古墳の新古」「王陵の比較研究」京都大学考古学研究室 1981
- (10) 山本三郎「畿内における古墳時代前期の政治動向についての一視点—埋葬施設の構造を中心として—」『ヒストリア』87 1980
- (11) 注(3)文献。
- (12) 山本三郎「竪穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究』7 1992
- (13) 編年は近藤義郎編『前方後円墳集成』中国四国編 1991に準拠する。
- (14) 天羽利夫・岡山真知子『曾我氏神社古墳群調査報告』徳島県博物館 1982
- (15) 本項掲載の実測図、計測値に係る出典は個々には明記していないが、各報告書、縦文に依っている。

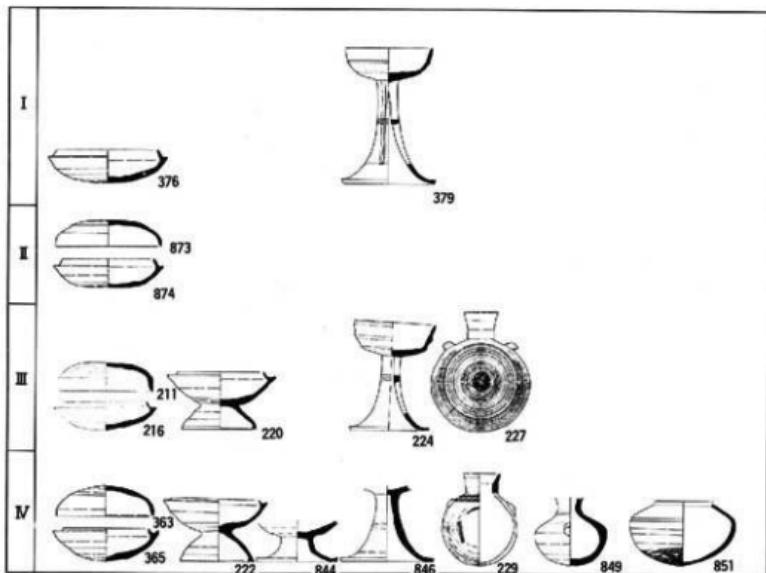
(2) 後期古墳

前節までの記述から古墳時代後期における蓮華谷古墳群(Ⅱ)は、横穴式石室墳4基、石室墓、土壙墓、現存しない各古墳1基より構成されていることが明らかとなった。以下では、古墳群の構成や副葬品を総括して、本古墳群の形成過程や存続期間を整理するとともに、特筆すべき特徴などをあげてまとめたい。

a 副葬品について

須恵器

須恵器は、形態や器種によってI～IVという4つの段階が考えられる。I期は、口径が大きく、器高の低い蓋杯に代表される段階である。この段階の杯身は、口縁部がやや内傾気味に高く立ち上がるものが多く、受部は水平にのびている。4号墳357・375・376、5号墳813がこれにあたる。出土数は少なく、4号墳無蓋長脚高杯379が含まれる程度で器種も少ない。II期には蓋杯はやや口径が小さくなり、口縁部が直線的または中位より若干外反気味で、受



第77図 蓮華谷古墳群(Ⅱ)出土須恵器の編年

部がやや上方へのびるもののがみられる。土壙墓資料がこれにあたる。Ⅲ期の蓋杯はⅡ期のものと比べた場合、器高こそ大きく変化しないが、口縁部の立ち上がりはほとんどのものがやや外反気味に、また受部は上方へとのびるようになり、口径もやや小さくなる。無蓋短脚高杯はⅠ期のものに比べて脚部が短くなる。3号墳215～218をはじめ、4号墳364、5号墳808・811・812など数量的にもこの段階に属するものが最も多い。またこの段階には器種も増え、有蓋短脚高杯や提瓶もみられるようになる。提瓶は把手がカギ状を呈する。Ⅳ期には蓋杯や有蓋短脚高杯はⅢ期に比べて身の口縁部の立ち上がりが短くなり口径に比して器高が高くなる。提瓶は把手がさらに退化しボタン状を呈する。この段階においてはさらに器種が増加し新たに應が加わるが、その一方で歓賀旋成のもの割合が高くなる。Ⅰ期は陶邑編年のMT85段階に、Ⅱ～Ⅲ期はTK43段階に、Ⅳ期はTK209段階にそれぞれ併行するものと考える（第77図）。

鉄器

鉄器には、馬具、刀、刀装具、弓飾金具、釘、鎌、鎌、刀子、鉄製心棒付紡錘車、鎌がある。

馬具は4号墳のみに副葬されていた。いずれも細片ではあるが、兵庫鎌や鞍具、辻金具など数種類みられ、鍛も含まれていることから本来は質量ともに充実していたことが窺える。

刀は3号墳に副葬されていた。4号墳は刀身こそ確認されなかったものの、刀装貝片が検出されており、副葬されていた可能性も考えられる。

鎌は3～5号墳と土壙墓に副葬されていた。鎌には平根鎌と長頭鎌があり、平根鎌には三角形鎌と脇抉三角形鎌、方頭鎌がある。三角形鎌、脇抉三角形鎌は、鎌身部の平面形がいずれも長三角形を呈する。3号墳にはやや浅い逆刺を持つものと斜関の三角鎌が、4号墳には鎌身関部が直角関の三角形鎌が、5号墳には直角関の三角形鎌と脇抉三角形鎌がみられる。また3号墳のものは、鎌身部長が4cm程度のものと5.6～7cm程度のものに分かれるものの、個体差は少なく、5号墳のものには法量や重値に若干個体差がみられる。

5号墳のみにみられる方頭鎌は、徳島県下では板野・上板地域に偏った分布を示す形式であり⁽¹⁾、5号墳のみに副葬されていることは、被葬者の性格を考える上で興味深い。徳島県の後期古墳に副葬されている鐵鎌は、脇抉三角形鎌と鎌身関部が直角関を呈する三角形鎌、それに鎌身部平面形が長三角形を呈する長頭鎌を中心とする。鳴門市のぬか塚古墳⁽²⁾、萩原4号石室墓⁽³⁾、徳島市の氣延山古墳群や海南町の大里1号墳⁽⁴⁾をはじめとする海岸部の古墳のみならず、吐氣山2号墳第1石室⁽⁵⁾や境谷古墳などの「忌部山型」石室を持つ古墳や願勝寺1号墳⁽⁶⁾などの「段ノ塚穴型」石室を持つ古墳のいずれもが三角鎌や脇抉三角形鎌、長頭鎌を副葬品として持っている。以上のことから、従来徳島県においては鐵鎌の石室

の築造方法に関係なく、一様な組成を示しているように考えられていた。

しかし本古墳群の5号墳をはじめとする板野・上板地域の後期古墳においては方頭鎌が、また菖蒲谷西山B遺跡4号墳⁽¹⁾においては柳葉鎌なども確認され、柿谷3号墳⁽²⁾資料はすべて方頭鎌であった。これら方頭鎌、圭頭鎌は北部九州から中国地方の瀬戸内海沿岸にかけて多くみられる形式であるが、四国でも方頭鎌、圭頭鎌は瀬戸内海沿岸を中心として分布し、西部瀬戸内地域つまり愛媛県から西讃地域にかけては特に密度が高く、東に行くにつれて少なくなる傾向がみられる。また密度の差は、法量や副葬品の差に置き換えることができる。つまり方頭鎌、圭頭鎌副葬古墳の多い西部瀬戸内では、比較的大型のものが多く、出土数も多い。しかし副葬古墳の少ない東部瀬戸内では、比較的小型のものが多く、出土数も少ない。板野・上板地域の方頭鎌・圭頭鎌は数、法量の両面から東讃地域の様子に近く、地理的条件や律令期の南海道のルートなどを考慮すれば、この地域の鉄鎌が東讃地域からもたらされた可能性は十分考えられる。

長頭鎌は、3号墳では台形闇のものは笠被部長が短く、棘闇のものは長いという傾向がみられるが、5号墳ではすべて棘闇のもので様々な長さのものが、また土壙墓においては、台形闇、棘闇いずれにも長いものがみられる。共伴する須恵器の形態から3、5号墳よりと上塙墓が先行することから、笠被部の長さと鎌の形式の間に相関関係は見いだしにくい。

本古墳群における鉄器の副葬形態は、基本的に鎌と刀や馬具、農工具を組み合わせることで構成されている。その組み合わせは、3号墳に刀、4号墳に馬具、刀装具等、5号墳に鉄製心棒付軽鍤車、上塙墓に曲刃鎌と、規模の大きな3、4号墳には武器や馬具が、規模の小さい5号墳や土壙墓には農工具が副葬されているなど、その種類や数量は遺構規模と相関関係がある。また鉄鎌においてもみられる平根鎌と長頭鎌の割合の差異にも鉄器組成と同様の傾向が認められる。3号墳は平根鎌に対して長頭鎌が多いが、5号墳では平根鎌の割合が高く、土壙墓では平根鎌を欠く。徳島県下の横穴式石室では、一般に副葬鎌が少數の場合、そのほとんどは平根鎌であり、長頭鎌を欠く場合が多い。これは平根鎌から古墳時代より儀礼的意味を持つ鎌として残存したという背景も影響している。このことから本古墳群にみえる鉄器組成の差異は、被葬者相互の階層差や職掌を反映したものと考えられる。

装身具

耳環については鍍金を施したものが確認されていないことから、ほとんどが銅芯銀張耳環とみられる。基本的に法量、重量が似たもの2個1対で副葬されているが、出土状況から考えて、被葬者1人あたり1対の副葬とは断定できない。どの横穴式石室墳にも用いられているが、土壙墓からは検出されていない。大型のものと小型のものがみられるが、法量と時期の関係は特に認められない。

勾玉、管玉など大形の玉類は、大きさ、数量ともに5号墳が圧倒している。4号墳はメノウの丸玉やヒスイの白玉、トンボ玉など他の主体部にはないものを持っている反面、勾玉は小さく、また切子玉は水晶の質が悪い上、断面がいびつであるなど加工がやや粗雑で、鉄器に比べて装身具は身外りがする。これに対して5号墳は、勾玉、管玉、切子玉のいずれをとっても最も大きく、数が多い。また平玉や算盤玉など水晶製のものにこだわりを感じる。練玉を持つのも5号墳のみである。練玉は、その形状や材質から単なるガラス玉の模造品と考えられがちであるが、5号墳は本古墳群の中で最もガラス玉その他の装身具が充実しており、改めて模造品を用いる必然性は認められない。徳島県内では出土状況の明瞭な練玉が少ないため検討できる段階はないが、ある一定条件の下で用いられた祭祀的意味合いの強い副葬品であった可能性を考えたい。

b 横穴式石室について

3号墳は、「忌部山型」石室の特徴である隅丸でやや胴張り気味の玄室プランを持つ。また「板野郡田上郷」籍に忌部氏の存在が記載されていることによって、調査時より「忌部山型」石室との関係が指摘されてきた⁽⁹⁾。

「忌部山型」石室は、穹窿式の天井、隅丸・胴張りの玄室平面プラン、副室構造に象徴される。短期間に限られた地域に集中して構築されていることによって、形態変化が少ないとされていたが⁽¹⁰⁾、忌部山古墳群においては玄門部の幅が狭く、玄室が細長くなる傾向がみられるなど、若干のバリエーションがあることが指摘されている⁽¹¹⁾。しかし「忌部山型」石室は、いずれも両袖式であり、袖部には必ず立柱石が用いられ、内側にせり出している。玄室平面プランにこそ共通点は認められるものの、3号墳は袖部の様子が不明であるため、「忌部山型」石室であるかどうかは、厳密には決定し難しい。

板野・上板地域では、横穴式石室はTK43併行期にかけての時期に最も多く築造されている。その玄室平面プランは、初現段階においてすでに隅丸・胴張り形（蓮華谷3号墳、山田A2号墳⁽¹²⁾）、円弧上の奥底（山崎1・2号墳⁽¹³⁾、柿谷7号墳⁽¹⁴⁾）と多様な形態がみられ、また袖部の形態も、左片袖式（山崎3号墳⁽¹⁵⁾）、両袖式（山田A1号墳⁽¹⁶⁾）、右片袖式（柿谷7号墳）、無袖式（山田A2号墳）、立柱石のみ（山崎1・2号墳）と多様である。明確にA型の玄門を持つものは柿谷7号墳しか確認されていないが、柿谷7号墳もまた右片袖式であり、「忌部山型」石室とは異なる形態を採用している。

麻植郡周辺で「忌部山型」石室が集中して築造されるTK43併行期に、板野・上板地域で既に多様な形態の石室がみられることは、これらの古墳を築造した集団が、「忌部山型」石室集団から分かれてこの地に移動してきたのではなく、本来異なる集団であった可能性が高い。またこの同時にこのことは「忌部山型」「段ノ塚穴型」石室の成立とも関連して興味深い。

資料になるものと考えられる。

c 石室墓について

古墳時代後期の徳島県において築造された堅穴式石室は、「小堅穴式石室」と「石室墓」に分けることができる。「小堅穴式石室」は横穴式石室を主体部に持つ古墳において、その墳丘上に主体部の横穴式石室に付設される形で構築される。葛城神社古墳⁽¹⁷⁾、吐氣山2号墳、忌部山1号墳⁽¹⁸⁾、脇町野村古墳⁽¹⁹⁾、山田A1号墳にみられ、吐氣山2号墳や山田A1号墳においては1墳丘上に2基構築されている。この「小堅穴式石室」は鳴門市大麻町から美馬郡脇町に至る吉野川流域に分布するが、石井町や徳島市、またそれよりの南の地域にはみられない。また遺物を持たないものが多く、初現の時期は不明であるが、山田A1号墳石室がTK209段階の須恵器を副葬していることや、また他の地域でも主体部の横穴式石室の築造時期から推測して、ほぼ同様の時期に構築されたものと思われる。本古墳群にもみられる「石室墓」は、墳丘を持たず単独で構築された小堅穴式石室である。他に萩原墳墓群、山田古墳群A、祐谷遺跡にみられ、鳴門市大麻町から上板町にかけての地域にみられる。中でも最も東に位置する萩原墳墓群においては、TK10～TK43併行期にかけて構築されている。この萩原墳墓群の所在する鳴門市大麻町付近は、横穴式石室のあまり発達していない地域であることから、横穴式石室を構築し得ない集団によるものと考えられる。そのほかの地域はTK209併行期と考えられるものが多い。板野・上板地域の古墳群においては、TK209併行期にはほとんどが小規模な無袖式石室を構築するか、もしくは築造を行わなくなってしまっており、かわって「石室墓」が多くみられるようになる。萩原墳墓群の所在する鳴門市大麻町付近で伝統的に用いられていた「石室墓」が、何らかの契機で薄葬化したTK209併行期の板野・上板地域において採用されたものと考えられる⁽²⁰⁾。

d 古墳群の構成と形成過程について

まず遺物の年代観によって、本古墳群の形成過程を復元する。まずⅠ期の段階で4号墳と5号墳が構築される。この2基の横穴式石室墳は、主軸方向こそ共通するものの、他の様々な面で対称的である。まず立地は4号墳は尾根筋に立地するのに対して、5号墳は尾根筋をはずれた斜面上に構築されている。また遺物も武具・馬具が充実しているのに対し、5号墳では装身具が充実し、紡錘車を持つ。さらに検出状況からみて4号墳は最も規模が大きく、玄室床面には櫛床が敷かれていたとみられるが、5号墳は最も規模が小さく、シルトを詰めて床面としている。やや遅れてⅡ期に構築される土壙墓は、5号墳と尾根筋を挟んで向かい合っている。この土壙墓も鉄器の鋒は先の2基の横穴式石室墳と共通しており、立地や農工具をもつこと、平根縁を欠くことともあわせ、4号墳-5号墳-土壙墓という階層構造を想

定するとともに、土塹墓構築をもって古墳群形成の第1段階の終了としたい。Ⅲ期になると、第1段階に築造が行われた区域の外側に、4号墳同様北側に周溝を持つ3号墳と7号墳が構築される。7号墳は詳細が不明であるが、3号墳については4号墳より規模が若干小さく馬具を持たないが、石室の主軸方向は4号墳と同じである。またこの頃4号墳、5号墳では追葬が行われたと考えられる。遺構配置をみるとこの段階で、4号墳、5号墳を中心にはほぼ等間隔に古墳が並んでおり、墓域の区割りがひとまず終了した段階とも言える。Ⅳ期には、3、4号墳で追葬が行われるとともに6号墳や石室墓が構築される。既に前段階において墓域の区割りは終了しているため、6号墳の築造には残った空間の利用という制約がついている。6号墳は7号墳のすぐ北側に構築されているが、6号墳の排水溝は主軸からはずれ、7号墳の方向を避けるように構築されている。また6号墳築造にあたっては、小規模な無袖式石室であること、石室主軸方向をそれまでのよう尾根に直交する方向でなく尾根筋に沿って設定していること、鉄器を全く副葬しないこと、軟質焼成の須恵器を多く含むことなど、古墳築造に対する考え方が変化した様子が窺える。さらに石室墓という墓制の登場をみると多様化する埋葬形態を窺うことができる。(第78図)

古墳群としての存続期間については、表掲遺物の中にもⅠ期より古い段階のものも新しい段階のものどちらもみられないことや、いずれの横穴式石室もⅣ期に追葬を終えたと考えられることから、Ⅰ期～Ⅳ期の間に収まるものと考えられる。したがって古墳時代後期の本古墳群は、概ね6世紀後半頃形成されはじめ、6世紀後半から7世紀初頭にかけての時期まで

	I期	II期	III期	IV期
3号墳				
4号墳		□	□	
5号墳		□	□	
6号墳				
7号墳				
石室墓				
土塹墓				

第78図 遺構存続期間一覧

で存続したものと考えられる。

既に述べたように本古墳群は、2～3基のやや大きな横穴式石室墳を中心となり、やや規模の小さい横穴式石室や土壙墓、石室墓が短期間のうちに構築されることで構成されている。Ⅲ期以前に構築されるもののいずれもが副葬品として豊富に鉄器、装身具を用いていることから、これら被葬者集団はこの頃までが盛期であったものと推測される。しかしⅣ期に築造されたのが6号墳と石室墓だけであることや、6号墳が規模の小さな無袖式石室で、鉄器を持たないこと、3号墳においてもⅢ期に行われたと考えられる追葬の際に持ち込まれたとみられる鉄器が非常に少ないとなどを考え合わせると、Ⅳ期には既にこれら集団の勢力は衰退しつつあったか、もしくは彼らの衰機によって薄葬化したものと考えられる。本古墳群の周辺の板野・上板地域の古墳群は、TK43併行期から古墳の築造が始まり、TK209併行期に終了するものが多い。唯一例外は柿谷遺跡で、TK43併行期に始まり、TK217併行期まで築造が行われている。この2者の違いは、古墳群形成過程に表れている。板野・上板地域の多くの古墳群は、横穴式石室は蓮華谷古墳群（II）と同じように短期間に集中して築造されており、1つの古墳群内によく似た時期の古墳が隣つてみられるのが普通である。これに対して柿谷遺跡では原則として各時期に横穴式石室は1基ずつ築造されており、石室墓や堅穴式石室が多く構築されている。このような古墳群のあり方は板野・上板地域の東側にあたる鳴門市大麻町付近の古墳群とよく似ている。その間に狭まれた地域に存続期間の短い古墳群が集中することは、これらの地域における各集団のあり方をそのまま反映したものとみられ、これまで実態のよくわかっていないかったこの地域の古墳時代後期の様子を考える上での重要な資料の一つとなるものである。

- (1) 須崎一平「徳島県下古墳出土の鉄器について」『真朱』第2号 1993
- (2) 「鳴門市史」上巻 1976
- (3) 「萩原墳墓群」徳島県教育委員会 1983
- (4) 岡田一郎『大里古墳』海部郡教育研究所 1953
- (5) 『吐氣山古墳発掘調査概報』鴨島町教育委員会 1983
- (6) 石丸 洋「徳島県美馬郡厭勝寺1号墳」『古代学研究』56号 1969
- (7) 財團法人徳島県埋蔵文化財センター編『徳島県埋蔵文化センター年報』Vol.4 1993
- (8) 財團法人徳島県埋蔵文化財センター編『徳島県埋蔵文化センター年報』Vol.3 1992
- (9) 財團法人徳島県埋蔵文化財センター編『徳島県埋蔵文化センター年報』Vol.2 1991
- (10) 『忌部山古墳群』徳島県博物館 1983
- (11) 喬原康夫『日本の古墳遺跡』37 徳島：保育社 1988

- 02 前掲注(8)
- 03 『山崎古墳群現地説明会資料』徳島県教育委員会 1987
- 04 前掲注(8)
- 05 前掲注33
- 06 前掲注(8)
- 07 『鳴門市史』 前掲注(2)
- 『天河別神社古墳群調査概報』徳島県教育委員会 1980
- 天羽利夫 前掲注00
- 08 天羽利夫 前掲注06
- 09 『野村古墳現地説明会資料』脇町教育委員会 1977
- 10 萩原墳墓群における「石室墓」築造の動機付けについて、菅原康夫氏は「形成年代に一定の時間的
幅を有さないことや石室の小規模性とも相俟って何らかの契機によって短期間に改葬として主体群
が形成されたと考えることが妥当」とし、天羽利夫氏は「横穴式石室を構築しない小規模な集団を
想定する方が無難」であるとした。
- 菅原康夫 前掲注(3)
- 天羽利夫 前掲注00

蓮華谷古墳群（Ⅱ）出土の勾玉、管玉の産地分析

糸 科 哲 男

（京都大学原子炉実験所）

はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイ原産地のうち、どこが原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら同内説で、岩石学的方法⁽¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^{(2), (3)}が報告されている。また、碧石製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例⁽⁴⁾が報告されている。石鎧など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。

(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるとスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば権力圏を現しているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉類は徳島県板野郡板野町字犬伏の蓮華谷古墳群（Ⅱ）出土の玉類で、4世紀初頭の2号墳出土の管玉9個および勾玉1個、6世紀後半の3号墳出土の管玉1個、6世紀後半の4号墳出土の管玉1個および白玉1個、6世紀後半の5号墳出土の管玉10個および勾玉2個である。これら遺物の分析結果が得られたので報告する。報告はヒスイ製玉類、碧玉製管玉の順序で行う。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合せ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別で

きなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している⁽⁵⁾ 非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信頼から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頃城郡青海町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の日高産⁽⁶⁾、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐町の引佐産の原石、(7)兵庫県養父郡大瀬町からの原石、(8)北海道旭川市神戸コタン産、(9)岐阜県大野郡丹生川村の飛驒産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地はこれではぼくされていると思われる。これら原石の原産地を第1図に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および緋園、春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム(Na)、アルミニウム(Al)、珪素(Si)などの軽元素⁽⁷⁾で、次いで比較的含有量の多いカルシウム(Ca)、鉄(Fe)、ストロンチウム(Sr)である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム(K)、チタニウム(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、ルビジウム(Rb)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオビウム(Nb)、バリウム(Ba)、ランタニウム(La)、セリウム(Ce)の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、その

ピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい、しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出できる方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他ないのではなかろうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛驒の各原産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛驒、引佐の原石に見られる。各産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に小さなNbのピークが見られ、Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときに有効な判定基準になる。長崎産ヒスイはTiの含有量が多く、Yのピークが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛驒産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてArなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川のものと区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素(As)のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多數の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2~3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものではなく、これらの原石は比重から軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しが

ラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し产地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行うときの判断基準を原石の分析データーから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。第1表に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準(1)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。第2表の判定基準(2)にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光X線ピークが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

第2図はヒスイ原石のSr/Feの比の値とSr/Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Feの値(横軸)2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考える。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの部分を示している。

糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピークが見られなかった場合、第2表の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判断でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および*印の引佐産の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Fe比を指標とすること

により（第3図）、糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより（第4図）、遺物がどこに分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

蓮華谷古墳群（II）の硬玉勾玉、白玉および軟玉製勾玉の分析結果

これら玉類の比重は硬玉製勾玉は3.339、白玉は3.269（アルキメデス法）で、軟玉製勾玉2.835で、これら比重を第3表にする。硬玉製遺物にはNa元素が観測され硬玉の可能性を示唆し、比重も硬玉の範囲に入る。また、軟玉と定義した勾玉にもNa元素が観測されることから、硬玉の成分を含む可能性を示唆しているのではないか。これら玉類の原石産地を明らかにするために、K/Ca、Ti/Ca、Sr/Fe、Zr/Sr、Ca/Si、Na/Si、Mg/Siなどの各比値を求め第3表に示し、また各原産地の原石の元素比量の分布範囲と比較し第5、6、7図に示した。これら図の中でも最も可能性のある硬玉製遺物の産地は糸魚川産地であることが分かる。また、これら硬玉にはBa元素が観測されないために若桜、大佐の原石の可能性は低いと言える。

大巣産地には、比重が2.7～3.0のヒスイ鉱物を含む白色のヒスイ岩が多く見られ、肉眼観察ではこの原石に、軟玉製勾玉が酷似している。軟玉製勾玉については側面と背面の2ヶ所の分析を行い結果をNo. 30753、32541番にそれぞれ示し、大量産ヒスイの原石群（第5、6、7図）と比較した。しかし、この軟玉製勾玉の原石産地を特定できなかった。糸魚川産地では良質なヒスイに注目しがちであるが、軟玉製勾玉の様な、白色の軟玉は糸魚川産地にも存在すると考えられ、肉眼観察のみで原石産地を推測することは誤判断の危険がある。

碧玉原石の蛍光X線分析

着三の蛍光X線スペクトルの例として佐渡、猿八産原石を第8図に示す。

花仙山、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの第8図でしめされるピークは観測される。土岐、奥部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原材料産地を判定する指標として用いる。

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を第9図に示す。佐渡島猿八原産地は、(1)新潟県佐渡郡畠野

町猿八地区で、産出する原石は、地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ヶ所か見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがありグリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間のものは31個、2.5~2.4の間は5個で合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で遡っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は(2)島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剝離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間のものは10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。下谷原産地は、(3)兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないとから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644~2.600は23個、2.599~2.589は4個の合計27で、下谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、下谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は(4)石川県金沢市二俣川地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で3個は、同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は(5)富山县婦負郡細入村割山定座岩地区的グリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、川土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した8個は2.25~2.12で、この

比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は(6)愛知県土岐市地域で、赤色、黄色、緑色などが混じり合った岩石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。この原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地(7)、北海道紋別郡西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地(8)、兵庫県氷上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り第4表に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群にわけて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にし、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉製の玉の原材料で原産地は不明の遺物が出土している。同質の材料で作られた可能性がある玉類は北陸、近畿、中国地方に分布しているらしい。この分布範囲を明らかにし、原石産地を探索すると言う目的で女代南遺物群として原石群と同じように使用する。

この他、鳥取県の福部村たねが池、鳥取市つづらお岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、縁系の原石ではない。

蓮華谷古墳群（II）出土の碧玉製管玉の分析と原石産地の判定

遺跡から出土した碧玉製の玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。

遺物の原材産地の同定をするために、(1)螢光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行う。(2)また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

螢光X線法による産地分析

これら遺物の分析結果を第5表に示す。これを第4表の碧玉原石群の結果と比較してみると比重の軽い遺物の組成は細入産原石と異なり、細入産原石の可能性は非常に低い。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホーリングT²検定⁽⁸⁾により同定を行い結果を第6表に示した。土岐、細人、石戸原産地は

統計処理ができるだけの原石の分析数が用意されていないが元素組成からこれら産地の原石でないと推定された。また興部産地でないことは鉄の含有量から証明できる。螢光X線分析の結果から試料番号30737～30752の(ⅰ)の産地は花仙山産に同定された。これら13個の管玉、勾玉が花仙山産原石で作られたと結論するには以下に述べる電子スピン共鳴(ESR)法による結果も花仙山群に一致すればより確実な結果となる。また、試料番号30729は女代(B)群と同定された管玉の原材料は、遺物の原材料産地は不明であるが、豊岡市の女代南遺跡で主として使用されている碧玉の原石と同じ組成であるという意味を示す。

ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、Varian社のE-4型Xバンドスペクトロメーターで行う。試料は完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。第10-1図のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号(Ⅰ)は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号(Ⅱ)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(Ⅲ)で構成されている。第10-1図では、信号(Ⅱ)より信号(Ⅲ)の信号の高さが高く、第10-2、-3図の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。

今回分析した蓮華谷古墳群(Ⅱ)の試料番号30726、30727、30728、30730、30732、3073、30734番の7個の管玉の信号(Ⅱ)を第11-1、2図に示した。信号(Ⅲ)が信号(Ⅱ)より小さい30730、30732、30733番は二俣、細入産のESR信号に似るが、元素比組成は二俣、細入とは異なる。原石の信号(Ⅲ)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。第12-1図に花仙山、猿八、土谷、土岐および第12-2図に興部、石戸、八代谷-4、女代(B)遺物群、八代谷の各原石の代表的な信号(Ⅲ)のスペクトルを示す。第13-1図の蓮華谷古墳群(Ⅱ)の試料番号、30729、30735、30737、30738、30741、30742、30743、30744、30745、30746、30747、30748、30750、30751番の14個の管玉の信号(Ⅲ)を第13-1、2、3、4図に示す。これら信号(Ⅲ)は信号(Ⅱ)より大きい、これら信号(Ⅲ)を各原石の信号(Ⅲ)と比較すると、試料番号30729、30735番は女代(B)群のESR信号と一致する。他の管玉の信号(Ⅲ)は花仙山群のスペクトルに一致し、これら碧玉製管玉が花仙山産の可能性が大きいことを示唆している(第6表)。

結論

蓮華谷古墳群（Ⅱ）出土の硬玉、軟玉、碧玉、グリーンタフで作られた玉類の原石産地の結果を第7表に示した。これら玉類の原石産地を明らかにすることは埋葬者の権力に関する情報が得られると推測される。出土した硬玉製勾玉、白玉には糸魚川産ヒスイ原石が使用され、軟玉製勾玉の産地は特定できなかった。試料番号30279番の4世紀初頭の管玉の原材料には、遺物の原材産地は不明であるが、豊岡市の女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉の原石が使用されている可能性が示唆された。また、6世紀後半の碧玉製管玉には花仙山産原石が使用されていることが明らかになり、試料番号30752番の碧玉製勾玉は遺物が大きすぎて、ESR分析はできなかったが、蛍光X線分析の結果では花仙山産原石が使用されていることが判明した。本古墳で使用されている糸魚川産ヒスイ製勾玉は日本各地で使用され、これら糸魚川産ヒスイを使用している遺跡は相互に情報の交換などがあった可能性が推測される。また、良質のヒスイは権力の強い古代人が入手できると考えると、この勾玉には緑色で半透明質の非常に良質の硬玉が使用されていることから、この勾玉の持ち主はかなり権力を持っていた可能性を考察しても産地分析の結果と矛盾しないであろう。

参考文献

- (1) 茅原一也 (1964)、長者が原遺跡のヒスイ (翡翠) について (続報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会: 63-73
- (2) 菊井哲男・東村武信 (1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6: 1-18
- (3) 菊井哲男・東村武信 (1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の产地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論叢』, 14: 95-109
- (4) Tetsuo Warashina(1992). Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. *Journal of Archaeological Science* 19: 357-373
- (5) 菊井哲男・東村武信 (1983)、石器原材の产地分析。考古学と自然科学, 16: 59-89
- (6) 番場猛夫 (1987)、北海道H高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録№18: 11-15
- (7) 河野義礼 (1999)、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石礦物鉱床学雑誌22: 195-201
- (8) 東村武信 (1976)、产地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9: 77-90

第1表 ヒスイ製造物の原石産地の判定基準(1)

原産地名	分析 個数	蛍光X線法による元素比の範囲					
		比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00~3.35	0.01~0.17	0.01~0.56	0.15~30	0.00~2.94	0.72~27.6
若桜産	12	3.12~3.29	0.01~0.91	0.03~0.59	3.45~47	0.00~0.25	4.33~48.4
大佐産	20	2.85~3.17	0.01~0.07	0.00~1.01	3.18~61	0.00~12.4	3.47~28.6
長崎産	3	3.16~3.23	0.01~0.14	0.17~0.33	0.02~0.06	4.30~16.0	
日高産	22	2.98~3.29	0.00~0.01	0.00~0.02	0.00~0.37	0.00~0.063	5.92~51.6
引佐産	8	3.15~3.36	0.04~0.04	0.00~0.03	0.03~0.33	0.00~0.018	36.3~65.9
大屋産	18	2.96~3.19	0.03~0.08	0.04~0.16	1.08~79	0.02~0.48	0.95~4.81
神居コタン産	9	2.95~3.19	0.02~0.49	0.09~0.17	0.04~0.22	0.12~0.85	2.22~17.3
飛脚産	40	2.85~3.15	0.01~0.04	0.00~0.00	0.02~0.10	0.00~1.24	12.7~28.5
ミヤマ産	26	3.15~3.36	0.02~0.14	0.01~0.26	0.09~2.5	0.01~23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND: 検出限界以下の濃度

第2表 ヒスイ製造物の原石産地の判定基準(2)

原産地名	蛍光X線法による分析元素 (各元素が確認できた個体数の百分率)							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND
飛脚産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミヤマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND: 検出限界以下 tr: 検出確認

第3表 蓮華谷古墳群(II)出土の硬玉製勾玉、臼玉、および軟玉製勾玉の元素分析値の比量と比重

分析番号	遺物品名	元素分析値の比量						分析元素の有無				試料比重	試料重量	
		K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si	Na/Si	Mg/Si	Nb	Ba	La	Ce		
30736	硬玉勾玉	0.015	0.013	1.137	0.680	5.478	0.238	0.488	×	×	×	×	3.339	2.538
30739	硬玉丸玉	0.023	0.010	1.163	0.096	3.772	0.252	0.560	×	×	×	×	3.269	1.749
30753	軟玉勾玉	0.131	0.130	35.092	0.030	1.704	0.215	0.079	×	○	×	×	2.835	3.487
62541	河上遺物	0.127	0.077	12.069	0.024	1.998	0.227	0.184	×	○	×	×	"	"
JG-1		1.342	0.274	0.349	0.755	2.249	0.011	0.106	加比司化整形試料					

Na30753は軟玉勾玉の側面分析値、Na32541は軟玉勾玉背面分析値

a) : 標準試料、Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.&Takeda,E.(1974).1974 compilation of date on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*. Vol.8 175-192.

第4表 各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析 個数	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe
		X±σ	X±σ	X±σ	X±σ	X±σ
奥部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
猿八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土岐	11	0.010±0.001	0.404±0.229	0.080±0.074	0.057±0.035	0.027±0.007
玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
女代南遺物群	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099

原石群名	分析 個数	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr
		X±σ	X±σ	X±σ	X±σ	X±σ
奥部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.081±1.434
猿八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土岐	11	0.091±0.029	47.540±31.76	4.074±2.784	0.271±0.323	0.269±0.265
玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.679±0.051	0.088±0.015
石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
女代南遺物群	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047

原石群名	分析 個数	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	比重
		X±σ	X±σ	X±σ	X±σ
奥部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
猿八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
土岐	11	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009
玉谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
花仙山1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
花仙山2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
女代南遺物群	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019

X: 平均値、σ: 標準偏差値

女代南遺物群: 女代南遺跡(鹿岡市)で使用されている原石産地不明の工原材料で作った群

第5表 蓬華谷古墳群(II)出土の碧玉製管玉の分析結果

試料番号	元素比							
	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
30726	.054	3.061	.141	.209	.121	.117	4.071	.476
30727	.059	3.080	.333	.183	.208	.179	2.182	.390
30728	.043	2.493	.292	.338	.113	.138	2.904	.401
30729	.000	3.827	.036	.094	.347	.257	2.247	.579
30730	.059	3.245	.073	.268	.106	.178	2.815	.500
30732	.056	2.742	.285	.321	.117	.116	3.383	.391
30733	.053	2.774	.185	.312	.102	.130	3.028	.393
30734	.056	3.146	.284	.189	.177	.173	2.806	.486
30735	.045	3.401	.000	.259	.234	.311	1.056	.329
30737	.026	.905	.083	.199	.045	.188	14.492	2.719
30738	.024	1.126	.077	.106	.052	.169	18.549	3.140
30741	.025	1.211	.034	.103	.115	.191	11.573	2.208
30742	.023	1.024	.040	.113	.092	.191	10.971	2.098
30743	.020	1.284	.038	.091	.118	.266	11.580	3.078
30744	.026	1.569	.026	.093	.122	.189	9.832	1.858
30745	.026	1.242	.037	.099	.088	.199	15.404	3.073
30746	.017	.918	.049	.107	.093	.221	10.880	2.408
30747	.023	1.141	.057	.120	.069	.207	16.637	3.447
30748	.023	1.224	.038	.124	.065	.182	18.160	3.305
30750	.025	1.026	.043	.146	.070	.210	14.197	2.984
30751	.023	.929	.037	.108	.105	.223	11.937	2.663
30752	.024	.911	.087	.171	.078	.208	13.005	2.705

試料番号	元素比					重量 gr	比重
	Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr		
30726	.792	.100	.003	.021	.030	2.884	2.368
30727	.879	.145	.004	.031	.020	2.662	2.407
30728	.517	.633	.007	.032	.000	1.729	2.153
30729	.231	.318	.007	.027	.031	1.291	2.558
30730	.169	.253	.008	.025	.025	0.815	2.233
30732	.670	.438	.008	.034	.000	1.971	2.232
30733	.343	.271	.008	.027	.027	1.281	2.114
30734	.987	.142	.005	.031	.037	2.062	2.384
30735	.057	.058	.000	.053	.035	0.387	2.615
30737	.235	.226	.001	.007	.000	1.082	2.442
30738	.185	.080	.001	.004	.000	2.061	2.576
30741	.270	.053	.001	.010	.000	2.825	2.577
30742	.217	.098	.001	.010	.108	6.239	2.604
30743	.354	.164	.001	.009	.090	3.990	2.589
30744	.155	.096	.000	.010	.101	4.265	2.582
30745	.232	.148	.001	.008	.164	5.488	2.591
30746	.301	.000	.001	.009	.118	2.716	2.587
30747	.296	.108	.001	.007	.092	5.552	2.610
30748	.198	.097	.001	.007	.078	3.809	2.609
30750	.328	.000	.002	.009	.000	4.765	2.590
30751	.399	.119	.002	.010	.000	2.643	2.571
30752	.287	.176	.002	.011	.024	8.296	2.546

第6表 蓮華谷古墳群(Ⅱ)出土の碧玉製管玉の蛍光X線、ESR結果

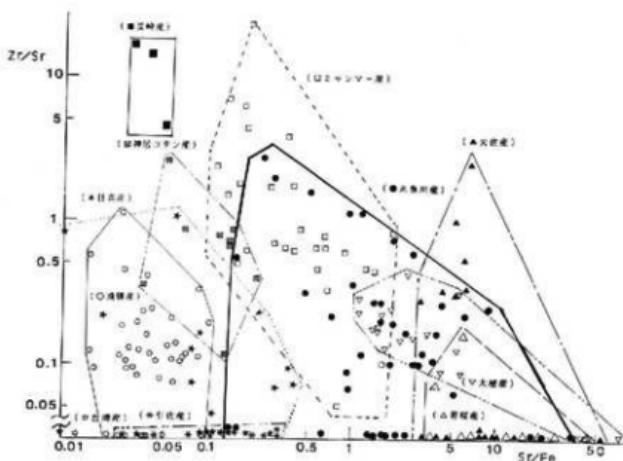
分析番号	蛍光X線分析法による帰属確率				ESR 信号形
	下谷群	花仙山群	猿八群	女代(B)群	
30726	2×10^{-8} %	5×10^{-10} %	1×10^{-6} %	4×10^{-6} %	不明
30727	3×10^{-7} %	8×10^{-12} %	2×10^{-10} %	8×10^{-13} %	"
30728	2×10^{-6} %	7×10^{-14} %	3×10^{-8} %	1×10^{-14} %	"
30729	3×10^{-7} %	--	2×10^{-12} %	2.23 %	女代(B)
30730	1×10^{-5} %	1×10^{-12} %	1×10^{-10} %	3×10^{-3} %	二段・細入
30732	2×10^{-6} %	3×10^{-14} %	3×10^{-17} %	3×10^{-11} %	"
30733	3×10^{-5} %	2×10^{-12} %	2×10^{-17} %	6×10^{-7} %	"
30734	6×10^{-7} %	9×10^{-12} %	9×10^{-6} %	7×10^{-8} %	"
30735	3×10^{-8} %	5×10^{-10} %	6×10^{-15} %	2×10^{-13} %	不明
30737	3×10^{-4} %	3.09 %	1×10^{-15} %	--	花仙山
30738	4×10^{-6} %	5.43 %	8×10^{-15} %	--	"
30741	5×10^{-3} %	47.00 %	1×10^{-8} %	--	"
30742	5×10^{-9} %	5.01 %	3×10^{-8} %	--	"
30743	6×10^{-7} %	17.65 %	2×10^{-11} %	--	"
30744	0.03 %	6.05 %	3×10^{-8} %	--	"
30745	1×10^{-6} %	0.02 %	3×10^{-1} %	--	"
30746	7×10^{-8} %	22.00 %	1×10^{-8} %	--	"
30747	2×10^{-7} %	11.04 %	4×10^{-1} %	--	"
30748	6×10^{-7} %	16.89 %	3×10^{-15} %	--	"
30750	4×10^{-6} %	1.62 %	2×10^{-17} %	--	"
30751	1×10^{-4} %	37.06 %	3×10^{-11} %	--	"
30752	3×10^{-4} %	29.39 %	2×10^{-16} %	--	試料過大

-- : 1×10^{-24} %以下の帰属確率第7表 蓮華谷古墳群(Ⅱ)出土のヒスイ、碧玉製玉類の原石産地推定結果
徳島県板野郡板野町大穴

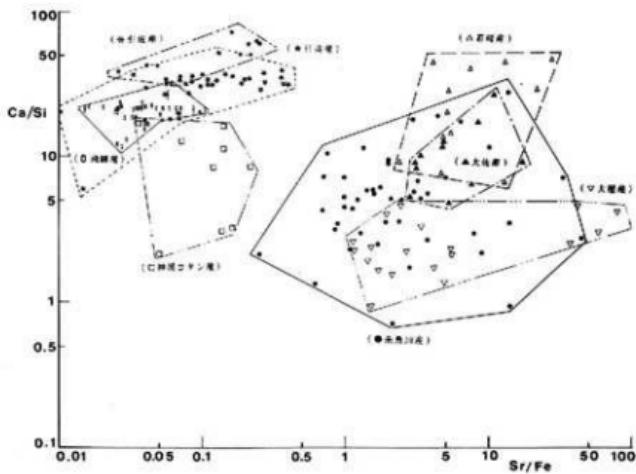
分析番号	出土遺跡、地区	時代時期	総合判定 原石産地	
			4世紀初頭	6世紀後半
30726	2号墳、グリーンタフ製管玉	4世紀初頭	不明	
30727	" " or碧玉製管玉	"	"	
30728	" " 製管玉	"	"	
30729	" 碧玉製管玉	"	女代南(B)	
30730	" " グリーンタフ製管玉	"	"	
30732	" "	"	不明	
30733	" "	"	"	
30734	" "	"	"	
30735	" 碧玉製管玉	"	"	
30736	" 硬玉製勾玉	"	糸魚川産	
30737	3号墳、碧玉製管玉		花仙山産	
30738	4号墳、"	"	"	
30739	" 硬玉製臼玉	"	糸魚川産	
30741	5号墳、碧玉製管玉	"	花仙山産	
30742	" "	"	"	
30743	" "	"	"	
30744	" "	"	"	
30745	" "	"	"	
30746	" "	"	"	
30747	" "	"	"	
30748	" "	"	"	
30750	" "	"	"	
30751	" "	"	"	
30752	" 碧玉製勾玉	"	"	
30753	" 硬玉製勾玉	"	"	
32541	同上試料(再分析)		不明	"



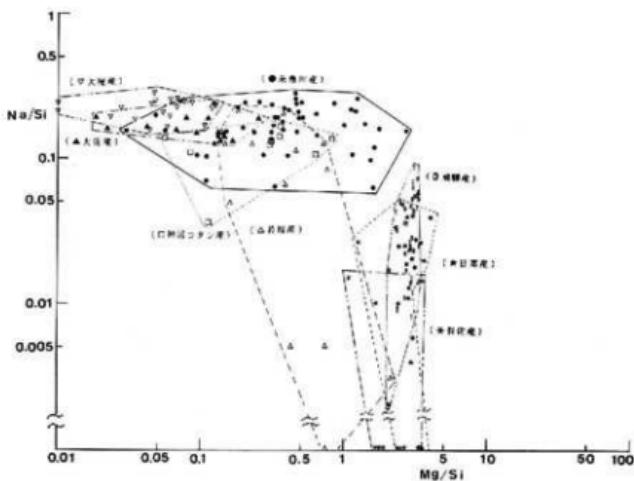
第1図 ヒスイとヒスイ類似岩の原産地



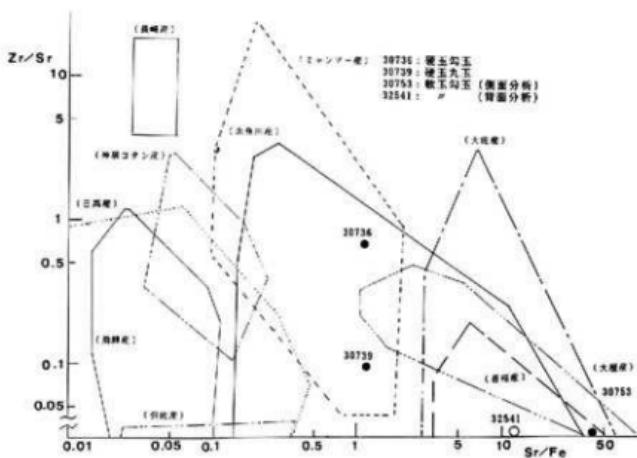
第2図 ヒスイ原石の元素比値 Zr/Sr 対 Sr/Fe の分布および分布範囲



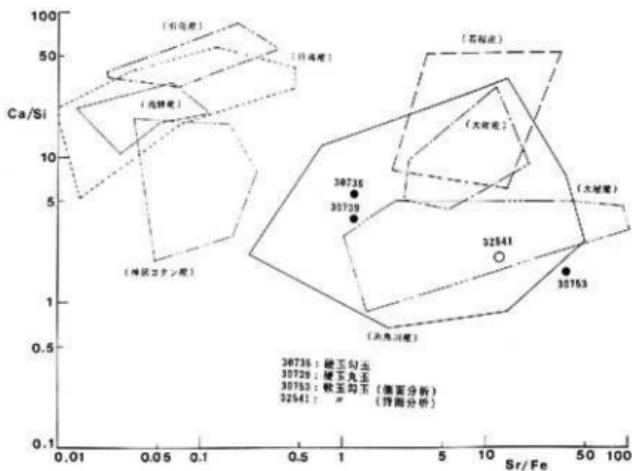
第3図 ヒスイ原石の元素比値Ca/Si対Sr/Feの分布および分布範囲



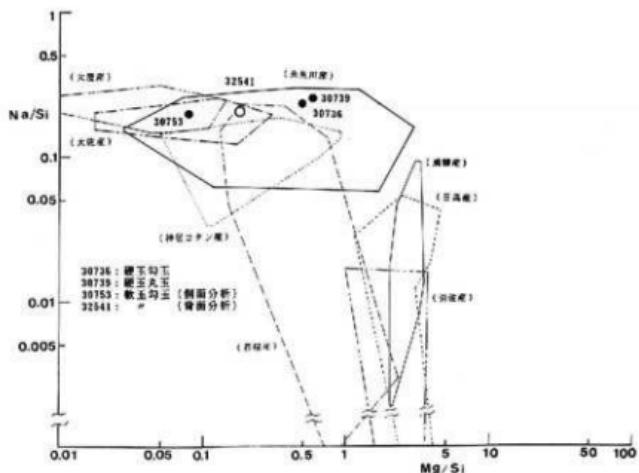
第4図 ヒスイ原石の元素比値Na/Si対Mg/Siの分布及び分布範囲



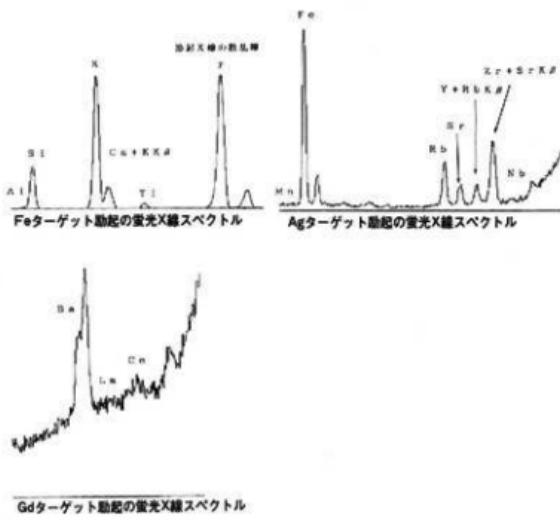
第5図 蓮華谷古墳群（Ⅱ）出土のヒシイ製玉類のZr/Sr対Sr/Feの分布



第6図 蓮華谷古墳群（Ⅱ）出土のヒシイ製玉類のCa/Si対Sr/Feの分布



第7図 蓼華谷古墳群（Ⅱ）出土のヒスイ製玉類のNa/Si対Mg/Siの分布

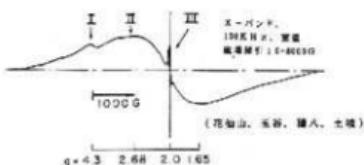


第8図 猿八産碧玉原石の螢光X線スペクトル



第9図 碧玉の原産地及び碧玉の様な緑色の石の产地

第10-1図



第10-2図

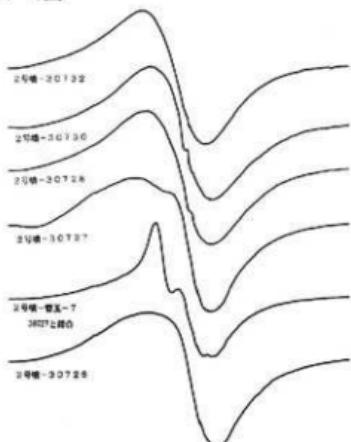


第10-3図



第10図 碧玉原石のESRスペクトル

第11-1図

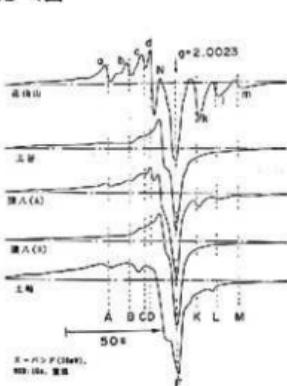


第11-2図

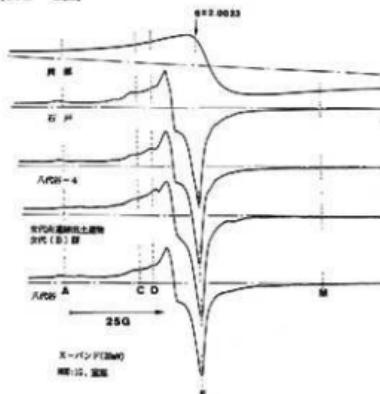


第11図 蓮華谷古墳群(II)出土管玉の信号(II)のESRスペクトル

第12-1図

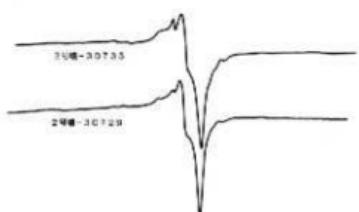


第12-2図

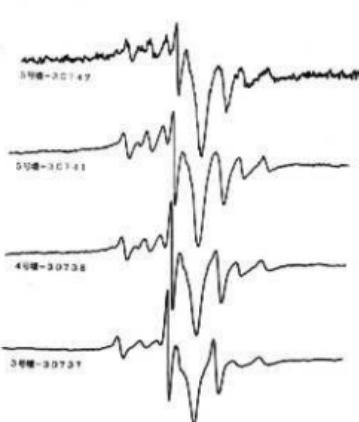


第12図 翡翠玉原石の信号(III)のESRスペクトル

第13-1図



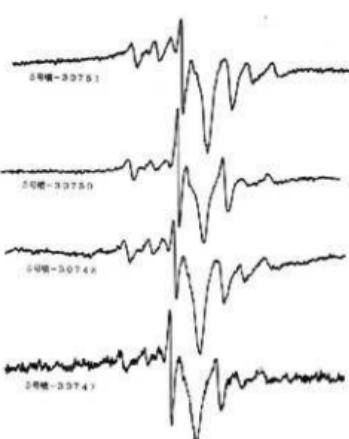
第13-2図



第13-3図



第13-4図



第13図 蓮華谷古墳群(Ⅱ)出土管玉の信号(Ⅲ)のESRスペクトル

分 析 番 号	本 文 遺 物 番 号	出 土 槽
30726	7	2号墳
30727	1 3	2号墳
30728	8	2号墳
30729	1 5	2号墳
30730	1 2	2号墳
30732	1 0	2号墳
30733	1 1	2号墳
30734	1 4	2号墳
30735	1 5	2号墳
30736	6	2号墳
30737	5 2	3号墳
30738	2 6 5	4号墳
30739	2 6 8	4号墳
30741	4 1 5	5号墳
30742	4 0 7	5号墳
30743	4 1 3	5号墳
30744	4 0 8	5号墳
30745	4 1 0	5号墳
30746	4 0 9	5号墳
30747	4 1 1	5号墳
30748	4 1 4	5号墳
30750	4 1 2	5号墳
30751	4 1 6	5号墳
30752	4 0 4	5号墳
30753	4 0 6	5号墳
32541	4 0 6	5号墳

第 8 表 試料番号・遺物番号対応表

蓮華谷古墳群（Ⅱ）2号墳の赤色顔料の分析について

徳島県立博物館学芸員 純一 島 魚

徳島県埋蔵文化財センターより依頼のあった次の資料の蛍光X線分析装置による非破壊定性分析の結果は次のとおりである。

1 資 料

蓮華谷古墳群出土 赤色顔料

2 分 析

分析は徳島県立博物館に設置されたテクノス社製エネルギー分散型蛍光X線分析装置T R E X 630 Lを用いておこなった。

条件は次のとおり。

X線管：Mo（モリブデン）

分析範囲：直徑2mm

X線管電圧：50KV

測定時間：100秒

X線管電流：0.2mA

測定雰囲気：大気

検出器：Si(Li)

3 結 果

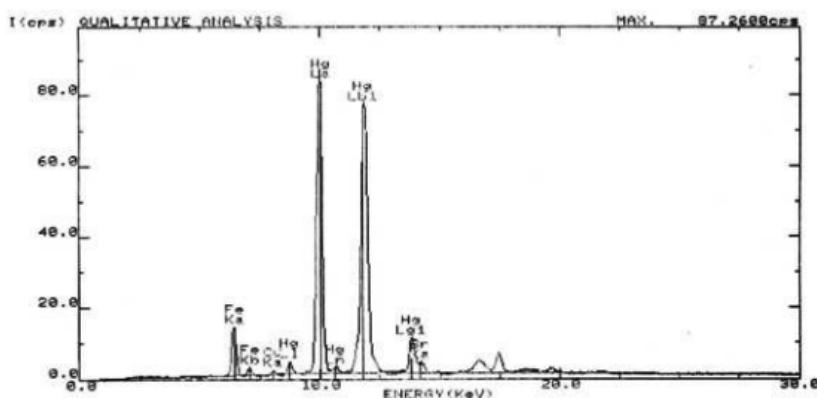
強いHg（水銀）のピークが検出された。Fe（鉄）のピークはHgにくらべかなり弱いので、土壤等に起因する可能性がある。

この顔料は、水銀朱（HgS）ではないかと考えられる。

ファイル名：レンゲ 2-1 测定日：93/05/17 15:32:04
 サンプル名：レンゲダニ 2 セキショクガソリョウ 測定者：J. UOSHIMA (TKPM)
 メモ 1：トクシマケンマイゾウブンカザイセンター イライ
 メモ 2：セキショクガソリョウヲフムツチ

測定時間：100sec
 X線管電圧：50 kV
 X線管電流：0.20mA
 ターゲット：Mo
 最 大：87.2600cps 敗落とし率：21.26%

No	元素	ENERGY (keV)	積分強度cps
1	Fe-K α	6.420	93.9755
2	Fe-K β	7.083	12.8604
3	Cu-K α	8.034	2.8481
4	Hg-LI	8.700	23.2308
5	Hg-L α	10.021	636.2630
6	Hg-L η	10.639	20.6516
7	Hg-L β 1	11.788	776.2210
8	Hg-L γ 1	13.827	92.2618
9	Sr-K α	14.198	25.9927



蓮華谷古墳群（Ⅱ）2号墳四神形鏡の螢光X線分析について

徳島県立博物館 学芸員 魚 島 純 一

標記資料の螢光X線分析法による定性分析をおこなった。

概要は以下のとおりである。

1 分析装置

テクノス社 エネルギー分散型螢光X線分析装置 T R E X 6 3 0 L

（徳島県立博物館に設置のもの）

2 分析条件

X線管電圧：50 kV

X線管電流：0.2 mA

ターゲット：Mo（モリブデン）

検出器：Si（Li）

測定範囲：直径 2 mm

測定時間：100秒

測定雰囲気：大気

測定方法：非破壊

3 測定部分

別添の図に示すとおり。

図中の番号は、添付したチャートのファイル名の枝番に同じ。

4 結果

材質は銅、スズ、鉛を主成分とする青銅。

不純物として微量の鉄、アンチモンおよびヒ素を含む。

（鉄は表面の不着物である可能性もある。）

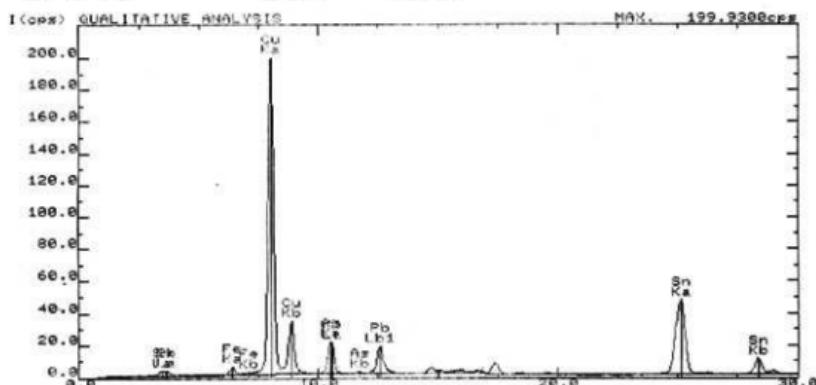


蓮華谷古墳群（II）2号墳出土四神形鏡（径10.2cm）（徳島県埋蔵文化財センター蔵）

ファイル名：レンゲダニ 1
 測定日：92/05/16 20:38:03
 サンプル名：シンケイキョウ
 測定者：J. UOSHIMA (TKPM)
 メモ 1：レンゲダニ 2 ゴウフン
 メモ 2：チュウ

測定時間：100sec
 X線管電圧：50 kV
 X線管電流：0.20mA
 ターゲット：Mo
 最 大：199.9300cps 數え落とし率：33.33%

No	元素	ENERGY (keV)	積分強度cps
1	Sn-L α	3.437	33.6160
2	Sb-L α	3.601	38.3258
3	Fe-K α	6.380	35.2421
4	Fe-K β	7.051	14.2558
5	Cu-K α	8.014	1495.0625
6	Cu-K β	8.874	260.1594
7	As-K α	10.531	193.3510
8	Pb-L α	10.547	194.3463
9	As-K β	11.712	3.5568
10	Pb-L β 1	12.606	178.7319
11	Sn-K α	25.156	426.2231
12	Sn-K β	28.395	84.6271

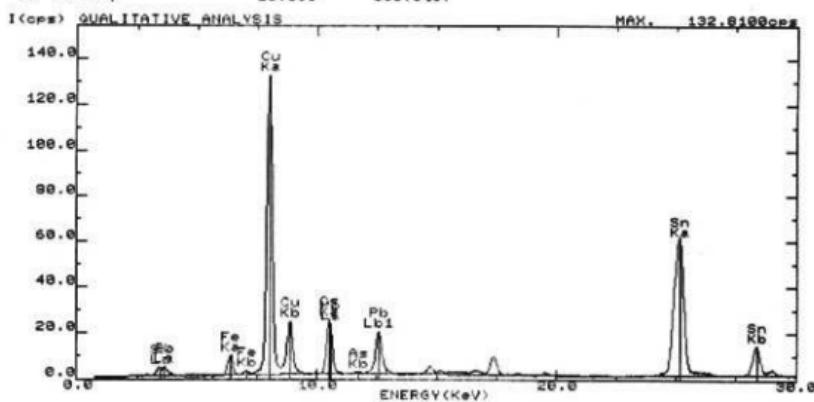


ファイル名：レンゲダニ2
 サンプル名：シシンケイキョウ
 メモ1 : レンゲダニ2 ゴウフン
 メモ2 : モンヨウタイ

測定日 : 92/05/16 20:42:05
 測定者 : J. UOSHIMA (TKPM)

測定時間 : 100sec
 X線管電圧 : 50 kV
 X線管電流 : 0.20mA
 ターゲット : Mo
 最大 : 132.8100cps 數え落とし率 : 31.97%

No	元素	ENERGY (keV)	積分強度cps
1	Sn-L α	3.439	41.1072
2	Sb-L α	3.601	47.6058
3	Fe-K α	6.380	61.7169
4	Fe-K β	7.054	15.2831
5	Cu-K α	8.014	991.9265
6	Cu-K β	8.874	180.3169
7	As-K α	10.527	220.2025
8	Pb-L α	10.542	218.7182
9	As-K β	11.741	5.6384
10	Pb-L β 1	12.604	195.6511
11	Sn-K α	25.156	546.4188
12	Sn-K β	28.395	108.9457

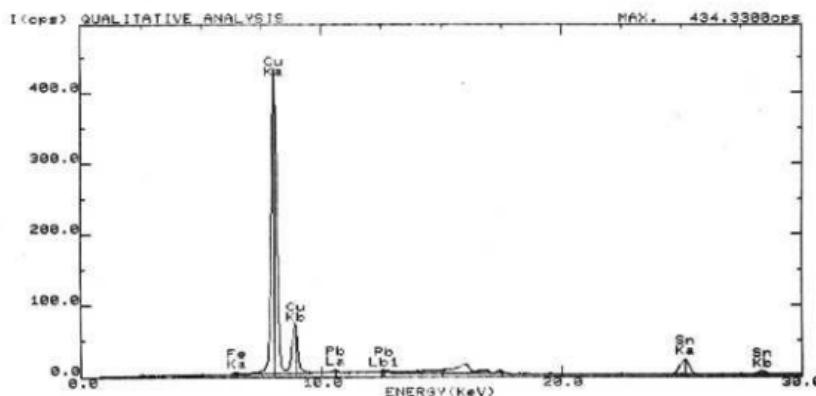


ファイル名：レンゲダニ 3
 サンプル名：シンケイキョウ
 メモ 1 : レンゲダニ 2 ゴウフン
 メモ 2 : ガイエン (ロクショウブン)

測定日 : 92/05/16 20:46:06
 測定者 : J. UOSHIMA (TKPM)

測定時間 : 100sec
 X線管電圧 : 50kV
 X線管電流 : 0.20mA
 ターゲット : Mo
 最 大 : 434.3300cps 敷え落とし率 : 43.82%

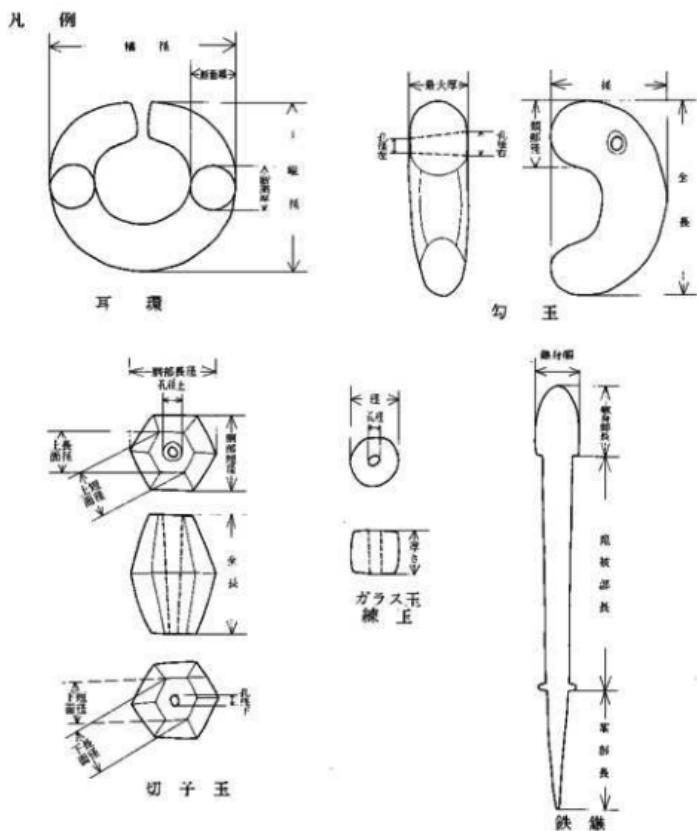
No	元素	ENERGY (keV)	積分強度cps
1	Fe-K α	6.409	19.5976
2	Cu-K α	8.043	3247.1670
3	Cu-K β	8.903	536.7812
4	Pb-L α	10.544	30.8207
5	Pb-L β 1	12.605	36.7027
6	Sn-K α	25.156	189.9225
7	Sn-K β	28.395	41.6053



遺物觀察表

① 表中の▲は残存値、※は推定値を表す。

② 遺物の計測値については次の各部を計測した。



第1表 2号墳鉄器計測表

番号	分類	全長	刃部長	刃幅	厚	基部長	備考
2	鉄刀	▲47.50	39.00	2.50	0.05	8.50	久日残存
3	鉄矛	8.90	5.00	—	0.03	—	右目残存
4	鉄鎌	12.40	10.06	厚0.03	—	—	右目残存
5	鉄劍	38.60	15.00	3.90	0.06	11.40	小質残存

第2表 2号墳勾玉計測表

番号	全長	径	最大厚	頭部径	左孔径	右孔径	重量	材質	穿孔方向	色調
6	19.70	13.60	5.50	7.80	3.40	—	3.80	ヒスイ	両面	こみどり

第3表 2号墳管玉計測表

番号	全長	上径	下径	上孔径	下孔径	重量	材質	穿孔方向	色調
7	33.75	7.25	7.35	2.80	3.10	2.89	グリーンタフ	両面	ミントグリーン
8	33.90	6.10	6.40	3.35	3.35	1.74	グリーンタフ	両面	褐色
9	29.30	7.15	7.25	2.20	2.55	不 判	不 明	両面	不 染
10	28.45	7.25	7.35	3.85	3.10	1.99	グリーンタフ	両面	オリーブドライ
11	22.50	6.55	6.80	3.70	2.60	1.29	グリーンタフ	両面	オリーブドライ
12	20.15	5.65	5.55	2.90	1.90	0.81	グリーンタフ	両面	褐色
13	29.50	7.20	7.25	2.75	2.25	2.67	グリーンタフ or 銀玉	両面	ミントグリーン
14	25.30	6.95	7.00	3.15	2.30	2.06	グリーンタフ	両面	ミントグリーン
15	15.45	7.30	7.30	3.15	2.90	1.29	碧 玉	両面	みるいろ
16	8.15	5.50	5.40	1.70	1.75	0.40	透 下	両面	アンティグリーン
17	5.95	3.95	3.90	2.00	2.00	不 明	グリーンタフ	不 明	ミントグリーン

第4表 2号墳土師器鏡素表

種類	番号	重量	形態の特徴	検法	備考
口	1	1.0	口盤部は外反気味に外方へのび端部に	口盤部外側中央タマハケのちナガ。他は	洗成 やや良好。
身	23.2	2.2	金物、柄羽に1条の沈挫を有する。柄部	ナガ。内面ニオサ。長いハケあり。	胎土 砂。胎土片岩含む。
脚	38	0.8	はやや内反氣味の倒錐形を呈し、底部	半額外面タマハケのち平行タキ。のち	色調 赤褐色。
蓋	36.8	3.6	は少し気味である。底部に黒斑がみられ	右上: 傷のヘラミガタ。底板、体部内面	
底	36.8	3.6	る。	二段、ビロオサ。体部内面凹ハケ	
底	30.4	3.0	は少し気味である。底部に黒斑がみられ	ズリ。	

第5表 2号墳埴丘出土鉄器計測表

番号	分類	全長	腰	身	柄	部	基部長	重量	備考
19	鉄刀	▲ 3.50	▲ 3.90	2.06	0.55	▲ 1.60	0.05	0.55	不明 廃身先端欠損

第6表 3号墳鉄器計測表

番号	分類	全長	腰	身	柄	部	基部長	重量	備考
20	鉄鎌	8.35	5.70	2.37	C.40	1.55	0.93	0.54 ▲ 1.15	12.03 基部欠損
21	鉄鎌	▲ 6.80	▲ 5.60	2.25	C.45	▲ 1.30	0.65	0.45	— 不 明 廃身先端欠損
22	鉄鎌	▲ 8.10	▲ 3.90	0.20	2.36	2.25	0.60	0.36 ▲ 2.10	不 明 基部欠損
23	鉄鎌	▲ 5.20	4.50	不 明	不 判	▲ 1.20	—	— 小 手	基部先端欠損
24	鉄鎌	12.40	3.00	1.10	0.26	6.60	0.52	0.27	2.80 4.87
25	鉄鎌	13.80	2.50	1.14	0.30	8.80	0.58	0.44	2.50 8.42
26	鉄鎌	13.70	▲ 2.30	1.22	0.32	7.20	0.61	0.44	4.20 ▲ 9.36 基身先端欠損
27	鉄鎌	13.00	3.20	1.25	0.33	8.10	0.63	0.47	▲ 1.7C. 1C.42 基身先端欠損
28	鉄鎌	▲ 3.00	▲ 2.80	1.45	0.40	—	0.65	0.30	▲ 2.33 基身先端のみ
29	鉄鎌	▲ 6.50	—	—	—	4.00	0.60	0.45 ▲ 2.50 ▲ 3.97 基身先端、基部のみ残存	
30	鉄鎌	▲ 8.20	—	—	—	▲ 7.40	0.62	0.47 ▲ 6.60 ▲ 6.53 基身先端欠損	
31	鉄鎌	12.90	—	2.60	1.00	9.00	0.57	0.37 ▲ 1.30 ▲ 6.53 基身先端欠損	
32	鉄鎌	17.40	—	2.95	1.03	9.55	0.55	0.39	4.90 9.24
33	鉄鎌	▲ 14.60	▲ 3.00	0.96	0.28	9.00	0.56	0.39	2.80 ▲ 7.03 基身先端欠損
34	鉄鎌	▲ 10.70	▲ 2.50	9.00	0.30	7.60	0.45	0.45 ▲ 0.35	不 明 基身先端欠損
35	鉄鎌	▲ 8.40	▲ 2.70	0.90	0.25	▲ 5.70	0.50	0.40	— 不 明 基部先端中位より欠損
36	鉄鎌	▲ 4.70	—	2.60	1.15	0.25 ▲ 2.10	0.50	0.40	— ベ ベ 基身先端、基部先端のみ残存
37	鉄鎌	▲ 6.70	—	—	—	6.40	0.50	0.30	0.30 不 明 基部先端のみ残存
38	鉄鎌	▲ 10.20	—	—	—	▲ 6.40	0.50	0.40 ▲ 3.75 不 明 基部先端のみ残存	
39	鎌	残存長2.70	船長1.90	厚0.30	—	—	—	—	約1/3脚皮肉存
40	鉄刀	刀身幅3.20	刀刃厚1.30	刀身裡存長56.50	—	—	—	—	基部欠損

単位 長さはmm、重量はg

第7表 3号埴耳環計測表

番号	廣径	横径	断面幅	断面厚	重量
41	▲ 34.30	32.06	8.00	▲ 8.90	30.11
42	35.55	▲ 31.06	8.85	▲ 8.90	29.80
43	▲ 29.40	28.70	7.70	7.45	15.08
44	▲ 30.25	28.25	8.20	8.70	15.74
45	▲ 24.40	▲ 23.85	4.30	4.35	3.70
46	▲ 24.45	▲ 22.95	4.35	4.30	4.23
47	▲ 18.00	▲ 17.15	4.70	▲ 5.00	2.79
48	▲ 17.30	▲ 16.20	4.00	5.40	3.38

単位 長さはcm、重量はg

第8表 3号埴勾玉計測表

番号	全長	直径	最大厚	頭部径	左孔径	右孔径	重量	材質	穿孔方向	色調
49	29.25	18.50	8.90	9.55	3.20	1.70	6.40	メノウ	左より穿孔	茶色
50	24.70	14.30	7.15	8.40	1.45	3.00	3.71	メノウ	右より穿孔	うぐいす色
51	21.00	12.53	6.00	7.85	1.70	3.00	2.01	メノウ	右より穿孔	シガ色

単位 長さはcm、重量はg

第9表 3号埴管玉計測表

番号	全長	上径	下径	上孔径	下孔径	重量	材質	穿孔方向	色調
52	17.50	6.20	8.05	2.80	2.05	1.39	碧玉	一側	青緑色

単位 長さはcm、重量はg

第10表 3号埴切子玉計測表

番号	全長	上面			下面			孔径			重量	材質	備考
		長径	短径	長径	短径	長径	短径	上	下	上			
53	26.10	8.85	8.15	14.80	13.50	8.40	7.90	4.25	1.40	6.70	水晶	表面に欠陥有	
54	25.00	8.80	7.60	14.70	14.00	8.50	7.10	4.10	1.45	6.39	水晶	"	
55	15.70	9.20	8.85	13.10	11.85	8.15	7.40	3.80	1.70	3.28	水晶	"	
56	12.45	8.85	7.80	12.05	11.45	7.75	7.00	3.80	1.70	2.39	水晶	"	

単位 長さはcm、重量はg

第11表 3号埴ガラス玉計測表(1)

番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備考	番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備考
57	12.60	10.80	3.25	2.63	A	委付	82	4.25	3.10	1.90	0.97	C 2	背面研磨
58	9.30	5.95	2.70	0.88	A	老け門面研磨	83	5.80	4.30	2.15	0.19	C 2	前面研磨
59	6.00	3.90	1.00	▲ 0.18	B	両面研磨	84	3.50	4.95	2.15	0.17	C 2	両面研磨
60	7.55	4.45	1.60	0.35	B	両面研磨	85	6.75	4.25	2.15	0.22	C 2	両面研磨
61	8.65	6.50	2.50	0.65	B	両面研磨	86	3.90	3.20	1.50	0.06	C 3	前面研磨
62	6.10	4.85	3.35	0.28	B	両面研磨	87	6.00	2.95	2.85	0.11	D	両面研磨
63	-----	-----	-----	-----	B	両面研磨	88	6.00	4.90	2.45	0.25	D	両面研磨
64	6.75	5.75	1.90	0.49	B	両面研磨	89	5.35	3.00	1.70	0.12	D	両面研磨
65	9.00	6.75	2.65	0.91	B	両面研磨	90	4.65	2.85	1.63	0.36	D	両面研磨
66	8.10	5.20	2.15	0.49	B	両面研磨	91	4.80	2.80	1.65	0.36	D	両面研磨
67	7.30	5.85	2.30	0.59	B	両面研磨	92	4.55	2.45	1.45	0.37	D	両面研磨
68	6.00	4.60	1.95	0.23	C 1	片面研磨	93	4.10	2.70	1.15	0.37	D	両面研磨
69	5.85	4.70	1.85	0.23	C 1	片面研磨	94	4.60	2.40	1.70	0.37	D	両面研磨
70	6.70	4.05	1.60	0.25	C 1	片面研磨	95	6.00	4.60	1.35	0.28	E 1	
71	5.85	3.75	1.55	0.18	C 1	片面研磨	96	4.90	3.30	1.60	0.39	E 1	
72	6.45	4.20	1.70	0.22	C 1	片面研磨	97	4.80	3.20	1.40	0.39	E 1	
73	6.10	3.30	2.35	0.17	C 1	片面研磨	98	4.70	2.70	1.40	0.37	E 1	
74	5.90	3.75	1.55	0.19	C 1	片面研磨	99	4.85	2.80	2.15	0.36	E 1	
75	6.40	2.85	1.80	0.15	C 1	片面研磨	100	5.25	3.10	1.50	0.39	E 1	
76	6.30	4.20	2.05	0.25	C 1	片面研磨	101	4.90	3.00	1.50	0.38	E 1	
77	6.40	3.90	1.20	0.25	C 1	片面研磨	102	-----	-----	-----	-----	E 1	
78	6.95	3.90	1.90	0.28	C 1	片面研磨	103	-----	-----	-----	-----	E 1	
79	6.60	3.50	2.25	0.20	C 1	F曲面研磨	104	5.25	3.10	1.40	0.10	E 1	
80	6.15	3.00	1.70	0.18	C 1	片面研磨	105	5.00	3.15	1.70	0.09	E 1	
81	6.50	3.30	2.10	0.19	C 1	F曲面研磨	106	5.40	2.75	2.00	0.10	E 1	

単位 長さはcm、重量はg

第12表 3号焼ガラス五計測表(2)

番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備考	番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備考
107	3.80	2.35	1.45	0.01	E 1		155	5.10	2.50	2.15	0.06	E 1	
108	5.00	3.30	2.30	0.09	E 1		156	4.85	3.05	1.70	0.09	R 1	
109	-----	-----	-----	-----	E 1		157	4.80	4.55	1.70	0.12	E 1	
110	4.65	3.70	1.50	0.11	E 1		158	5.20	2.75	1.90	0.10	R 1	
111	4.20	3.00	1.45	0.08	E 1		159	5.70	2.20	2.30	0.09	E 1	
112	4.80	3.20	2.15	0.09	E 1		160	6.20	3.60	2.55	0.13	E 1	
113	4.55	3.05	1.25	0.09	E 1		161	3.65	1.95	1.40	0.01	R 1	
114	4.30	2.55	1.35	0.07	E 1		162	4.90	2.75	1.65	0.09	E 1	
115	4.55	2.75	1.65	0.08	E 1		163	5.35	3.10	2.15	0.10	E 1	
116	-----	-----	-----	-----	E 1		164	4.30	2.50	2.70	0.08	R 1	
117	4.65	2.65	1.20	0.08	E 1		165	5.40	2.80	1.50	0.10	E 1	
118	4.50	3.25	1.45	0.09	E 1		166	4.10	2.00	1.60	0.03	E 1	
119	5.00	3.00	1.30	0.10	E 1		167	4.95	3.60	1.60	0.11	E 1	
120	4.70	2.90	1.45	0.09	E 1		168	5.00	2.80	1.35	0.10	E 2	両面研磨
121	-----	-----	-----	-----	E 1		169	4.65	3.15	1.60	0.08	F 1	
122	5.25	3.05	2.00	0.10	E 1		170	3.80	2.20	1.05	0.03	F 1	
123	4.30	2.55	1.80	0.07	E 1		171	3.75	2.10	1.35	0.04	F 1	
124	4.95	2.65	1.40	0.08	E 1		172	-----	-----	-----	-----	F 1	
125	5.00	2.90	2.00	0.08	E 1		173	3.75	2.40	1.20	0.04	F 1	
126	5.20	2.75	2.15	0.08	E 1		174	3.40	2.40	1.20	0.01	F 1	突起あり
127	5.35	2.85	1.50	0.10	E 1		175	3.65	2.30	1.10	0.04	F 1	
128	4.30	3.60	1.20	0.09	E 1		176	4.10	2.85	1.45	0.07	F 1	
129	3.90	2.55	1.40	0.05	E 1		177	3.85	2.50	1.05	0.05	F 1	突起あり
130	3.60	2.40	1.45	0.05	E 1		178	3.90	2.40	1.20	0.04	F 1	突起あり
131	4.20	2.40	1.30	0.06	E 1		179	3.85	2.50	1.35	0.05	F 1	突起あり
132	4.80	3.65	1.30	0.12	E 1		180	3.95	2.70	1.15	0.05	F 1	突起あり
133	5.00	3.65	1.10	0.12	E 1		181	3.90	2.50	1.45	0.05	F 1	突起あり
134	5.45	2.80	1.65	0.11	E 1		182	3.90	2.55	1.25	0.06	F 1	突起あり
135	5.90	3.65	2.20	0.11	E 1		183	3.70	1.35	1.35	0.04	F 1	
136	5.00	3.36	1.85	0.11	E 1		184	4.25	2.70	1.20	0.07	F 1	
137	5.00	2.70	1.90	0.09	E 1		185	3.55	2.30	1.50	0.04	F 1	
138	5.15	3.30	2.20	0.09	E 1		186	3.70	2.30	1.20	0.04	F 1	
139	4.70	2.85	1.80	0.07	E 1		187	4.05	1.80	1.60	0.04	F 1	
140	5.50	3.35	1.80	0.10	E 1		188	4.95	2.85	1.30	0.07	F 2	
141	4.90	3.35	1.95	0.09	E 1		189	3.80	2.20	1.45	0.03	F 2	
142	5.50	2.70	2.35	0.10	E 1		190	3.60	1.95	1.15	0.04	F 2	
143	6.30	2.90	1.95	0.10	R 1		191	3.40	2.05	1.50	0.01	F 2	
144	4.55	2.80	1.55	0.07	E 1		192	3.70	2.50	1.50	0.05	F 2	
145	4.70	3.10	1.50	0.10	E 1		193	3.30	2.65	1.30	0.04	F 3	
146	4.85	4.00	1.85	0.11	E 1		194	4.00	2.70	1.25	0.05	F 3	
147	4.00	2.20	1.80	0.05	E 1		195	3.30	2.15	1.45	0.03	F 3	
148	5.35	3.05	1.70	0.09	E 1		196	3.70	2.90	1.60	0.06	F 3	
149	4.80	3.30	2.25	0.10	E 1		197	3.80	2.55	1.65	0.04	F 3	
150	4.60	2.85	1.90	0.09	E 1		198	3.60	1.55	1.60	0.02	F 4	
151	4.80	2.70	1.45	0.08	E 1		199	3.85	2.70	1.35	0.06	F 4	
152	4.30	2.90	1.25	0.07	E 1		200	4.00	2.40	1.60	0.05	F 5	
153	4.95	2.60	1.50	▲ 0.09	E 1		201	4.25	3.05	1.75	0.06	F 5	
154	4.85	3.55	2.00	0.10	E 1		202	2.70	1.50	1.15	0.01	G	

第13表 3号埴土器観察表(1)

番号	器種	底盤	形態の特徴	技法	備考
203	蓋杯 蓋	口径 14.3 基高 4.6	口縁部は開き気味に外下方へ下り、端部は丸い。大井部は丸く、中央部のみ平坦。	天井部外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。	焼成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 緑青灰色 外面 青灰色 断面 緑青灰色 にぶい赤褐色 ヨクロ回転 時計回り
204	蓋杯 蓋	口径 14.1 基高 4.4	口縁部はほぼ直線的に外下方へ開き、端部に更る。端部は丸い。大井部は丸い。	天井部外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 緑青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 反時計回り
205	蓋杯 蓋	口径 14.0 基高 4.1	口縁部はほぼ直線的に外下方へ開き、端部に丸い。端部は丸い。大井部は丸い。	天井部外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 別オーブス次色 外面 灰白色 ヨクロ回転 時計回り
206	蓋杯 蓋	口径 14.1 基高 4.2	口縁部はやや内側気味に外下方へ開き、端部に丸い。端部は丸い。天井部は丸いが、中央部は平坦。	天井部外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。	焼成 良好 胎土 やや密 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 時計回り
207	蓋杯 蓋	口径 12.9 基高 3.5	口縁部はほぼ平底に下り、端部に丸い。天井部は丸い。天井部はやや丸みを帯びるが、ややえみを寄せる。	天井部外側へテ削り。 他は四転ナダ。 天井部内面一定方向ナダ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 時計回り
208	蓋杯 蓋	口径 13.4 基高 4.0	口縁部はほぼ平底に下り、端部に丸い。天井部はやや丸みを帯びるが、ほぼ平底。	天井部外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。 のち、大井部内面一定方向ナダ。	焼成 良好 胎土 やや密 色調 内面 緑青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 時計回り
209	蓋杯 蓋	口径 14.2 基高 4.2	口縁部は開き気味に外下方へ下り、端部丸い。天井部は丸みを寄せるが、中央部は平底。	天井部外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。 のち、天井部内面一定方向ナダ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 緑青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 時計回り
210	蓋杯 蓋	口径 13.7 基高 4.3	口縁部は内側した後、垂直に下る。端部は丸い。天井部は丸い。	天井部外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。 ただし、口縁部外側は弱いナダ。	焼成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 緑青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 時計回り
211	蓋杯 蓋	口径 13.0 基高 4.0	口縁部は垂直に下り、外側気味に端部に丸い。天井部は丸みを帯びるが、中央部は平底。	天井部外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。	焼成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 緑青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 時計回り
212	蓋杯 蓋	口径 10.5 基高 2.9	口縁部はほぼ垂直に下り、端部やや丸い。天井部は丸みを帯びるが、中央部は平底。	天井部外側回転へテ削り無調整。 他は四転ナダ。 のち天井部内面一定方向ナダ。	焼成 良好 胎土 やや粗 (2~3mmの 砂粒少々) 色調 内面 緑青灰色 外面 緑青灰色 ヨクロ回転 時計回り

第14表 3号埴土器観察表(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	技 法	備 考
213	鉢 皿 豆 壺	口径 16.8 断高 3.6	口部は外反とも内弯気味にとり、端部は丸い。 天井部は丸い。口縁部附近に自然整少し。	天井部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。 のち天井部内面一定方向ナヂ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 淡青灰色 外面 紫灰色 ロクロ回転 時計回り
214	高 杯 乗	口径 11.1 断高 3.6	口縁部は外反気味にとり、底部牛込に内弯する 紋を有する。底部は丸い。 天井部は平折だが、やや丸みを含む。	天井部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。 のち天井部内面一定方向ナヂ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 淡青灰色 外面 紫灰色 ロクロ回転 時計回り
215	煮 杯 身	口径 12.0 受部径 14.4 断高 3.8	口縁部は内傾して、外反気味の立ち直り立ち上るが、底部は斜い。 受部は内上方へのび、底部は丸い。 底部は丸みを含む。	底部外面回転ヘラ削り。 他は立軸ナヂ。 のち底部内面一定方向ナヂ。	焼成 良好 胎土 中や密 色調 内面 淡青灰色 外面 淡青灰色 ロクロ回転 時計回り
216	蓋 杯 身	口径 11.5 受部径 14.4 断高 4.1	口縁部は内傾して、外反気味に立ち上るが、 底部は丸い。 受部は外上方へのび、端部は丸い。 底部は丸みを含むが、中央部は平底。	底部外回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。 のち底部内面一定方向ナヂ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 淡青灰色 外面 淡青灰色 ロクロ回転 時計回り
217	蓋 杯 身	口径 11.5 受部径 14.1 断高 3.8	口縁部は内傾の立ち直り立ち上り、端部や やや斜い。受部は外上方へのび、底部は丸い。 底部は丸みを含むが、中央部は平底。	底部外回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。 のち底部内面一定方向ナヂ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 淡青灰色 外面 淡青灰色 ロクロ回転 時計回り
218	蓋 杯 身	口径 10.7 受部径 13.4 断高 3.7	に縁部は内傾の立ち直り立ち上り、端部や やや斜い。受部は外上方へのび、底部は丸い。 底部は丸みを含むが、中央部は平底。	底部外回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。 底部外面に切り落し痕残る。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 淡青灰色 外面 淡青灰色 ロクロ回転 時計回り
219	蓋 杯 身	口径 11.7 受部径 14.0 断高 3.3	口縁部は内傾の立ち直り立ち上り、端部や やや斜い。受部は外上方へのび、底部は丸い。 底部は平底で浅い。	底部外回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。 底部外面に切り落し痕残る。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 淡青灰色 外面 淡青灰色 ロクロ回転 時計回り
220	蓋 杯 身	口径 12.2 受部径 15.4 断高 10.5 断高 8.1	口縁部は外反とも内弯氣味に立ち上り、端部 は丸い。受部は外上方へのび、底部は丸い。 底部中央より側杯刃の鋸歯がのびる。	底部外回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。	焼成 良好 胎土 密 0.5~1mmの側柱含む 色調 内面 淡青灰色 外面 淡青灰色 ロクロ回転 時計回り
221	高 杯 身	口径 12.6 受部径 15.1 断高 10.4 断高 8.0	底部の縁部は外反気味に立ち上り、端部 は丸い。受部は外上方へのび、底部は丸い。 底部中央より側杯刃の鋸歯がのびる。	底部外回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 淡青灰色 外面 淡青灰色 ロクロ回転 時計回り

単位 cm

第15表 3号埴土器観察表(3)

番号	器種	出量	形態の特徴	技法	備考
222	盆 身	口径 12.4 受部径 底部 脚部 身高 9.0	口縁、底部はやや内傾して立ち上がり。面部は鋸い。受部は外上方へのび、腹部は鋸い。 腹部はやや膨らみを帯びる。 底部中央より脚部形に算出かのびる。	杯底部外面四輪へラ削り。 他は回転ナダ。 脚部はハリック。	焼成 良好 粘土 やや重 色調 内面 青青灰色 外面 青青灰色 ヨクロ回転 時計回り
223	高 盆 身	口径 12.4 受部径 底部 脚部 身高 8.0	口縁 口縁部は緩く内側のち外反して立ち上 がり底部は鋸い。受部は外上方へのび、腹部は 丸い。 底部は深く、丸みを帯びる。 底部中央より脚部形の算出かのびる。	底部外面四輪へラ削り。 他は回転ナダ。 脚部はハリック。	焼成 良好 粘土 常 色調 内面 青青灰色 外面 青青灰色 ヨクロ回転 時計回り
224	盆 身	口径 11.5 受部径 脚部 身高 11.0 脚高 上部 15.3	口縁、底部は支椎的に外上方へのびて腹部 に立る。面部は鋸い。体部はマスの底底より脇 由して立ち上がり、鋸い後をなしてマス部に 続く。底部は平底でやや丸みを帯びる。脚部は 脚部頃から丸く平面に下り、のち外反して脚部 で外上方へのび、底部に当る。脚部やや鋸い。 上部1/3のところに2矢の沈線ある。その上下 2方に4箇の細長い長刀溝スキンが外から内 側へ穿たれてゐる。	杯底部外面四輪へラ削り。 他は回転ナダ。 杯底部内面一定方向ナダ。	焼成 やや良好 粘土 常 色調 内面 青青灰色 外面 青青灰色 所持 ぶい褐色 ヨクロ回転 時計回り
225	碗	口径 9.4 脚高 7.6	口縁部はやや外反青灰のち直立して立ち上 り。面部は丸い。体部中央に1条の凹線があり、 その周囲にはカサカサが認められる。 底部は浅く丸いが、やや平坦。	底部外面四輪へラ削り。 他は回転ナダ。	焼成 不良 粘土 常 色調 内面 淡白色 外面 淡白色 断面 淡白色 ヨクロ回転 時計回り
226	盆 腹 盤	口径 6.9 脚部 7.4	口縁部は鋸く、外反して瓶形に立る。面部は丸 い。体部は内円突出で立ち上がる。底部は浅く 丸い。	底部外面四輪へラ削り無剥離。 他は回転ナダ。	焼成 不良 粘土 常 色調 内面 淡白色 外面 淡白色 断面 淡白色 ヨクロ回転 反対引抜き
227	盆 腹	口径 4.7 脚部 16.8	口縁部基部はやや大きく、内面のち外反して瓶 形に立る。底部は丸い。体部は扁平な球形をな し。前面にカサ形の把手を取り付けている。	体部内面全面とも凹輪カキ目(1mmは薄く、 もう1面は厚い)。 他は回転ナダ。	焼成 良好 粘土 常 色調 内面 青青灰色 外面 青青灰色 断面 青青灰色 ヨクロ回転 時計回り
228	盆 腹	口径 5.1 脚部 19.3	口縁部は底部やや太く、直線形のび、面部は 丸い。体部は若干の球形をなし、側面にボタン 状の把手を貼り付ける。	体部全面に四輪カキ目。一面はナダ消して いる。もう一側は中辺部は内輪方向のハケ 目。脚部基部に筋向のカキ目。他は回 転ナダ。	焼成 良好 粘土 常 色調 内面 青青灰色 外面 青青灰色 断面 青青灰色 ヨクロ回転 反対引抜き
229	盆 腹	口径 5.2 脚部 12.9	扁平な球形をなす体部の頂部にやや基部の太 いに頭部を貼り付ける。口縁部は外反弧形で 立ち上がり、脚部付近で屈曲する。面部は丸 い。側面両脇にボタン状突起を貼付する。口縁 部より体部中央まで自然難あり。	体部両面に四輪カキ目。一面はナダ消して いる。もう一側は中辺部は内輪方向のハケ 目。脚部基部に筋向のカキ目。他は回 転ナダ。	焼成 良好 粘土 常(2~3mm大の ひだ含む) 色調 内面 青青灰色 外面 青青灰色 断面 青青灰色 ヨクロ回転 時計回り

単位 cm

第16表 3号埴土器観察表(4)

番号	器種	重量	形態の特徴	技法	備考
230	手 瓶	4.0 14.3 10.6	口部は内反気味に立ち上がり、のち外反して端部に平ら。端部は丸みを帯びて下る。口部はなだらかな円錐を描く。底部は内面にくぼんでいる。口部から作成中位にかけて自然縮あり。	口部上面から2/3まで回転ナガ。底部外側へ軽くこし盛あり。	焼成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 灰白色 外側 灰色 断面 灰色 ロクロ回転 時計回り
231	長 瓶 壺	17.6 21.4 24.0	口部は大きく外反して上方へのび、瓶身は直線的で、底部にかかる。口部はやや外反する。口部から上位に1条の凹縫跡ある。底部はやや外反気味の中内側して底部に平らとなる。上位1/3に1条、少し下位に2条の沈縫道ある。底部は丸みを帯びるが、手く捏い。	口部外面回転ナガ。口部付近回転ナギ。全体半回転ナギ。底部下半回転ナギ。底部直輪へ軽く削り。	焼成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 灰白色 外側 灰色 断面 灰赤色 ロクロ回転 時計回り
232	長 瓶 壺	18.4 20.4 26.3	口部は外反して上方へのび、瓶身近くで屈曲してのち内側して底部に至る。端部は外下方へ向かって握る箇所を持つ。体部は後やかに緩和して下り、のち大きめに内側して底部に至る。底部は丸みを帯びる。口部は上位1/3に1条、中位に2条、基部近く2条、体部上位に2条の沈縫道ある。口部底に3段のハラ摘きを施す。	作成下より裏面にかけて回転ナガ。他は直輪ナギ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 灰色 外側 灰色 ロクロ回転 時計回り
233	土 器 器 皿	13.9 17.9	口部は外反気味に上方へのび、底部に平ら。端部は丸い。体部は内側して下り、粗く外反し、さらに内側して底部に至る。底部は丸みを持つが、手く捏い。	口部付近横ナギ。体部には12条/26mmのハケが上部は輻方向に、中央は輻方向に、下部は輻方向にそれぞれ施されている。体部内底へ軽く削り。下半指ナギ。	焼成 やや小良 胎土 粗 色調 内面 棕褐色 外側 ぶい褐色
234	土 壺 器	11.5 2.5	口部は内側してのち外反気味に上方へのび、瓶身は斜めで内側する。底部は斜めで平ら。内面には赤色斑形が施されている。	底部回転輪へ軽く削り。下半指ナギ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 ぶい褐色 外側 明褐灰色 断面 灰色
235	壺	11.0 3.1	口部は外反気味に立ち上がり、のち瓶部附近で内側する。	回転ナギ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 灰白色 外側 灰白色 断面 灰白色
236	土 器 器 皿	24.3 6.4	口部は外反気味に上方へのび、底部に至る。底部は斜めで平ら。	口部付近横ナギ。 体部外側8mm×10mmのハケ。 体部内面約6mm周囲の底いハケ。	焼成 不良 胎土 粗 色調 内面 ぶい褐色 外側 ぶい褐色 断面 ぶい褐色

第17表 4号培耳環計測表

番号	直径	横径	断面	横断面	断面厚	重量
261	25.45	28.65	5.75	6.20	13.06	
262	25.30	27.90	5.65	6.25	13.82	
263	▲ 25.75	▲ 27.50	▲ 6.70	▲ 8.60	▲ 13.52	

単位 長さはmm、重量はg

第18表 4号埴勾玉計測表

番号	全長	径	最大厚	頂部厚	孔径	孔径	材質	穿孔方向	色調
264	17.40	9.00	3.90	6.30	2.25	0.66	粘土	不明	スレーブグレイ

単位 長さはmm、重量はg

第19表 4号埴管五計測表

番号	全長	上径	F径	上孔径	F孔径	重量	材質	穿孔方向	色調
265	17.35	7.00	8.05	2.20	1.30	2.07	粘土	片壁	ペトルグリーン

単位 長さはmm、重量はg

鉄 237 ~ 260

第20表 4号埴子玉計測表

番号	全長	上 面		側 面		下 面		孔 径		重量	材質	備考
		長径	短径	長径	短径	長径	短径	上	下			
266	18.15	9.10	-----	15.15	-----	8.90	-	3.60	1.40	5.38	水晶	底部欠損あり
267	17.15	10.10	7.25	12.50	11.15	9.60	8.90	4.20	1.45	3.51	水晶	底部欠損あり

単位 長さはmm、重量はg

第21表 4号埴その他の玉計測表

番号	種類	径	厚さ	上孔径	下孔径	重量	材質	色調
268	主玉	11.40	7.70	3.65	2.00	1.74	硬玉	オパールグリーン、白
269	丸玉	7.20	5.65	2.00	-----	0.40	メノウ	緑色
270	トング玉	7.50	6.45	2.50	-----	0.46	ガラス	うすき・緑

単位 長さはmm、重量はg

第22表 4号埴ガラス玉計測表

番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備考	番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備考
271	9.75	7.15	2.20	0.98	A	円筒研磨	314	4.25	3.80	1.35	0.09	B	両面研磨
272	9.00	6.10	1.80	0.67	A	両面研磨	315	5.00	3.30	2.15	0.11	B	両面研磨
273	6.30	4.15	1.45	0.20	A	両面研磨	316	4.35	2.75	1.85	0.07	B	
274	7.10	7.20	1.95	0.59	A	両面研磨	317	4.60	2.85	2.15	0.06	B	
275	6.75	4.10	1.65	0.29	A	両面研磨	318	4.80	2.85	1.80	0.08	B	両面研磨
276	8.05	6.65	1.95	0.68	A	両面研磨	319	3.60	1.70	1.30	0.02	B	両面研磨
277	9.75	5.70	1.70	0.73	A	両面研磨	320	3.10	1.70	1.10	0.02	B	両面研磨
278	6.75	4.50	1.60	0.32	A	両面研磨	321	3.35	2.05	1.15	0.03	B	両面研磨
279	6.90	5.10	2.20	3.57	A	両面研磨	322	3.30	1.55	1.25	0.02	B	両面研磨
280	7.75	5.50	1.95	0.55	A	両面研磨	323	3.65	2.60	1.60	0.05	T	
281	6.60	4.60	2.60	0.28	A	両面研磨	324	3.55	2.00	1.20	0.01	B	両面研磨
282	8.20	7.20	2.25	0.73	A	両面研磨	325	3.95	1.85	1.75	0.01	B	両面研磨
283	9.50	6.50	2.75	0.73	A	両面研磨	326	4.00	2.25	1.65	0.01	D	両面研磨
284	6.85	6.70	2.40	0.35	A	両面研磨	327	4.05	3.05	1.30	0.06	B	
285	7.20	5.05	2.35	0.94	A	両面研磨	328	4.10	2.15	1.35	0.04	B	両面研磨
286	7.60	5.50	2.40	0.41	A	両面研磨	329	4.40	2.65	1.50	0.07	B	両面研磨
287	6.90	5.50	2.70	0.94	A	両面研磨	330	3.45	2.40	1.50	0.04	B	両面研磨
288	6.15	4.50	1.30	0.28	A	両面研磨	331	3.65	2.25	1.50	0.03	B	両面研磨
289	5.35	4.65	1.35	0.19	A	両面研磨	332	3.80	2.80	1.30	0.04	B	両面研磨
290	5.25	3.75	1.20	0.12	B		333	3.85	2.90	1.25	0.07	B	両面研磨
291	5.35	4.00	1.55	0.16	B		334	3.65	1.95	1.45	0.03	B	両面研磨
292	6.25	3.85	1.30	0.21	B		335	3.80	2.05	1.40	0.04	B	両面研磨
293	5.35	3.35	1.35	0.13	B		336	4.35	3.30	1.30	0.09	B	両面研磨
294	5.65	4.05	1.70	0.18	B		337	3.20	2.05	1.15	0.02	B	
295	4.98	3.30	1.60	0.11	B		338	4.00	2.70	1.60	0.06	B	
296	5.45	3.85	1.80	0.16	B		339	4.20	2.45	1.55	0.05	B	突起あり
297	4.80	3.65	1.15	0.12	B		340	3.50	2.25	1.35	0.01	B	
298	5.10	3.45	1.35	0.12	B		341	4.20	2.60	1.25	0.07	T	
299	5.15	3.80	1.70	0.14	B		342	3.35	1.75	1.45	0.03	B	
300	5.10	3.60	1.70	0.12	B		343	3.60	2.45	1.50	0.05	C	
301	4.60	2.70	1.65	0.08	B		344	3.50	2.25	1.25	0.03	D	
302	4.85	3.35	1.30	0.11	B		345	3.65	1.95	1.65	0.03	E	
303	4.45	2.10	1.15	0.06	B		346	3.70	2.20	1.25	0.05	E	
304	5.30	4.05	1.55	0.13	B		347	5.00	3.65	1.60	0.15	E	両面研磨
305	4.30	3.35	1.40	0.08	B		348	4.35	2.10	1.75	0.05	F	
306	4.35	2.60	1.40	0.07	B		349	3.20	2.50	1.20	0.02	G	
307	4.55	2.70	1.30	0.08	B	両面研磨	350	4.70	3.90	1.95	0.12	H	両面研磨
308	4.75	3.30	1.90	0.09	B		351	3.70	2.70	1.50	0.05	H	両面研磨
309	4.80	3.20	1.50	0.08	B		352	3.30	2.85	1.05	0.01	I	
310	3.85	3.25	1.15	0.06	B	両面研磨	353	3.25	2.30	1.20	0.04	I	
311	4.40	2.60	1.65	0.05	B		354	1.80	2.00	0.85	0.01	J	
312	4.00	2.60	1.70	0.06	B		355	2.50	1.90	1.00	0.01	K	
313	4.95	3.60	1.35	0.12	B	両面研磨	356	1.95	1.45	1.00	0.01	K	

単位 長さはmm、重量はg

第23表 4号墳須恵器類索引表(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	技法	備考
351	蓋 身	口徑 14.2 受部径 16.5 脚高 4.4	口縁部は強く内傾して立ち上がり、底部は丸い。受部は斜め水平に外方へのび、端部は高い。底部はやや丸みを帯び、浅い。口縁部に強いナダによる凸縁有り。外面に3条のヘラ記印有り。	底部外側回転ヘラ削り。 他は回転ナダ。	焼成 良好 胎土 やや密 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 反時計回り
355	鏡	口徑 13.3 脚高 8.4	口縁部は内側気泡から上方へのび、端部やや深い。受部は中位に1条の沈縫が巡る。	底部外側回転ヘラ削り。 他は回転ナダ。 のち底部内面一定方向ナダ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 断面 にぶい黄色 ヨクロ回転 時計回り
359	蓋 蓋	口徑 15.5 基部 4.2	口縁部は外下方向へ下り、端部は丸い。天井部は平坦に丸いがやや平坦。	天井部外側回転ヘラ削り。 他は回転ナダ。 のち大井部内面不整方向ナダ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 灰色 外面 灰白色 ヨクロ回転 時計回り
360	蓋 杯 蓋	口徑 13.6 脚高 4.0	口縁部はほぼ逆曲に下り、端部はやや鋭い。天井部は天井部はやや丸みを帯びているが、おおむね平坦。	天井部外側回転ヘラ削り。 他は回転ナダ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 灰色 外面 灰色 ヨクロ回転 時計回り
361	蓋 杯 蓋	口徑 13.2 脚高 4.0	口縁部は外下方向に開き、端部は丸い。天井部は天井部は丸みを帯びているが、おおむね平坦。	天井部外側正軸ヘラ削り。 他は回転ナダ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 灰色 外面 灰色 ヨクロ回転 時計回り
362	蓋 杯 蓋	口徑 13.9 脚高 3.9	口縁部は外下方向に開き、端部は丸い。天井部は天井部は丸みを帯びているが、中央部は尖っている。	天井部外側正軸ヘラ削り。 他は回転ナダ。 のち天井部内面一定方向ナダ。	焼成 良好 胎土 やや密 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 時計回り
363	蓋 杯 蓋	口徑 13.8 脚高 4.4	口縁部は内側気泡のもの。裏底にドリ、端部は鋭い。天井部は丸みを帯びているが、中央部は尖っている。	天井部外側正軸ヘラ削り。 他は回転ナダ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 時計回り
364	蓋 身	口徑 12.3 受部径 15.0 脚高 4.6	口縁部は強く内傾して立ち上がり、端部は鋭い。受部は外上方へのび、端部は丸い。底部は底部はやや深く丸みを帯びているが、半径に近い。外底1/3に自然縮有り。	底部外側回転ヘラ削り。 他は回転ナダ。	焼成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 反時計回り
365	蓋 身	口徑 12.2 受部径 15.0 脚高 4.7	口縁部は強く内傾して立ち上がり、端部は鋭い。受部は外上方へのび、端部は丸く深い。底部は底部から底部にかけての外側約1/3に自然縮有り。外底に裕物有り。	底部外側回転ヘラ削り。 他は正軸ナダ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 灰白色 外面 灰白色 ヨクロ回転 反時計回り
366	蓋 身	口徑 11.7 受部径 13.6 脚高 4.2	口縁部は強く内傾して立ち上がり、端部はやや鋭い。受部は強く外上方へのび、端部やや深い。底部はやや段く深い。	底部外側回転ヘラ削り。 他は正軸ナダ。	焼成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 灰白色 外面 灰白色 ヨクロ回転 不明

第24表 4号填須器検査表(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	技 法	備 考
367	蓋 杯 身	口径 12.1 受部径 13.9 基高 4.0	口盤部は細く内側して立ち上がり、端部は鋸 り。受部は細く外上方へのび、端部は丸い。 底部はやや浅く、平坦。	底部外面回転ヘラ切りのち粗いナギ。 他は回転ナヂ。 のち底部内面一定方向ナギ。	焼成 やや不均 胎土 やや粗 色調 内面 明オリーブ灰色 外面 明オリーブ灰色 ロクロ回転 不明
368	蓋 杯 身	口径 10.9 受部径 13.0 基高 3.9	口盤部は細く内側して立ち上がり、端部は鋸 り。受部は細く外上方へのび、端部は丸い。 底部はやや丸みを帯びて深く、中心 部は平坦。	底部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 青灰色 外面 青灰灰色 ロクロ回転 不明
369	蓋 杯 身	口径 10.7 受部径 12.6 基高 3.5	口盤部は細く内側して立ち上がり、端部は鋸 り。受部は細く外上方へのびる、端部は丸い。 底部はやや浅く丸い。	底部外面回転ヘラ切り無調整。 他は回転ナヂ。	焼成 不良 胎土 やや粗 色調 内面 淡白色 外面 淡白色 ロクロ回転 反時計回り
370	蓋 杯 蓋	口径 13.0 基高 4.0	口盤部は外下方へ下り、端部に凹る。端部はや や鋸り。口盤部内面はナギによる凸凹大きい。 天井部は丸みを帯びている。	天井部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 淡白色 外面 淡白色 ロクロ回転 時計回り
371	蓋 杯 蓋	口径 15.0 基高 4.0	口盤部は外下方へ下り、端部は丸いがやや鋸 り。天井部は丸いがやや平坦。	大井部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。	焼成 不良 胎土 粗 色調 内面 淡白色 外面 淡黄色 ロクロ回転 時計回り
372	蓋 杯 蓋	口径 14.1 基高 4.0	口盤部は外下方へ下り、端部は丸い。口盤部内 面にやや鋸いナギによる凹痕が1条ある。 天井部外面は平坦。	天井部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 青灰色 外面 青灰灰色 ロクロ回転 時計回り
373	蓋 杯 蓋	口径 14.9 基高 4.1	口盤部は外下方へ下り、端部は丸い。口盤部内 面にやや鋸いナギによる凹痕が1条ある。 天井部は丸い。	天井部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 淡白色 外面 青灰灰色 ロクロ回転 時計回り
374	蓋 杯 蓋	口径 14.5 基高 4.2	口盤部はやや内角丸めになり、端部は丸い。口 盤部内面にやや鋸いナギによる凹痕が1条ある。 天井部は平坦。	天井部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 淡色 外面 淡色 ロクロ回転 時計回り
375	蓋 杯 身	口径 12.8 受部径 15.1 基高 4.3	口盤部は内側してのちやや直立気味に立ち上 りがり端部は鋸り。受部は細く外上方へのび、端 部はやや鋸り。底部は丸みを帯びるが、平坦に近 い。受部付近に若干自然難有り。	底部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 青灰色 外面 青灰灰色 ロクロ回転 時計回り
376	蓋 杯 身	口径 14.4 受部径 17.0 基高 4.7	口盤部は内側してのち、ほぼ直線的に立ち上 りがり端部は丸い。受部は細く外上方へのび、端 部はやや鋸り。立ち上がりの基部に2点の沈 みがある。底部は浅く、やや丸みを帯びるが、平坦に近 い。	底部外面回転ヘラ削り。 底部内面一定方向ナギのもの同じタタキ 2 回。	焼成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 青灰色 外面 青灰灰色 ロクロ回転 時計回り

第25表 4号埴須須錠表(3)

番号	器種	法量	形態の特徴	技 法	備 考
377	蓋 杯	口径 12.4 受部深 い。 筋高 3.8	は縦部は広くほぼ垂直に立ち上がり、端部は鋸 鋸。受部は扱く、外上方へのびる。端部は丸 い。	底部外面回転ヘテ削り。 他は回転ナダ。	焼成 やや良好 胎土 やや粗 色調 内面 青灰色 外向 青灰色 ヨクニ回転 時計回り
378	高 杯	受部深 16.6 筋高 3.6	杯部 受部は広く外上方へのびる。端部は鋸 鋸。い。底部は浅く、平坦。	底部外面回転ヘテ削り。 他は回転ナダ。	焼成 やや不良 胎土 やや密 色調 内面 黒色 外向 淡黄色 ヨクニ回転 反時計回り
379	高 杯	口径 12.4 筋高 19.2 中央 12.5	杯部 口縁部は外上方へ立ち上がり、端部や や鋸。後は鋸く扱ります。底部はやや丸く1 条の凹線が進る。	杯部底部外回転ヘテ削りのち回転ナダ。 他は回転ナダ。脚部はハリタケ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青灰色 外向 青灰色 ヨクニ回転 時計回り
380	要	口径 21.3 体部 底部 41.3 筋高 36.5	口縁部は外反して立ち上がり、端部で把手厚 さある。体部は内側して下り、のち緩やか に下って底部に至る。底部欠損。 に底部外面に2条のヘタ記す。	体部外表面磨子タタキ。後上半は回転カオ メ。体部内面同心円タタキ。他は回転ナダ。	焼成 良好 胎土 粗 色調 内面 青灰色 外向 青灰色 ヨクニ回転 不明

第26表 5号埴鉄器計測表

番号	分類	全長	鐵身部			鐵枝部			基部長	重量	備 考
			長	幅	厚	長	幅	厚			
381	鉄 箕	12.2	5.20	2.74	0.28	2.40	0.77	0.32	4.60	8.36	
382	"	10.2	4.10	2.10	0.25	2.10	0.88	0.38	4.00	7.60	基部に木質残存
383	"	▲ 7.6	4.90	2.27	0.31	2.20	0.68	0.39	▲ 0.50	6.73	基部先端欠損
384	"	10.8	▲ 5.80	2.58	0.20	2.60	0.86	0.37	3.80	9.03	基部に木質残存
385	"	▲ 6.4	▲ 6.20	2.85	0.25	-----	-----	-----	不 明	逆刺突起	
386	"	10.0	6.40	3.40	0.50	-----	-----	-----	3.60	13.70	無開
387	"	20.0	2.90	0.90	0.26	9.80	0.50	0.46	7.30	10.70	基部に木質残存
388	"	18.0	2.70	0.92	0.37	9.20	0.46	0.39	▲ 6.10	11.50	基部に木質残存
389	"	14.5	2.85	1.04	0.29	6.80	0.58	0.33	▲ 4.90	6.86	基部に木質残存
390	"	▲ 11.1	3.25	0.90	0.30	7.50	0.55	0.35	▲ 0.30	不 明	基部先端欠損
391	"	-	----	-	-	▲ 4.20	0.40	0.36	▲ 2.00	不 明	鉄部と基片
392	"	-----	-	-----	-	-----	-----	-----	▲ 3.10	不 明	基片
393	"	-----	-	-----	-	-----	-----	-----	▲ 2.30	不 明	基片
394	刀 子	13.8	▲ 8.60	1.01	0.51	-	-----	-----	5.20	15.50	基部に木質残存
395	"	▲ 12.9	▲ 6.60	10.50	0.77	-----	-----	-----	5.30	15.60	基部先端欠損
396	"	▲ 4.4	-----	---	---	-----	-----	-----	-----	不 明	
397	"	▲ 6.5	-----	---	---	-----	-----	-----	不 明	-----	
398	紡錘車輪	全長33.8	幅0.55	厚0.49		紡錘車輪3.82	浮1.20		43.68		輪のみ鉄製

第27表 5号埴耳環計測表

番号	鍔 程	横 径	断面幅	断面厚	重 量
399	24.10	26.15	3.95	3.70	2.88
400	24.80	25.45	4.20	4.10	3.42
401	26.45	27.50	4.90	3.45	7.41
402	30.00	33.00	8.00	8.50	29.13

単位 長さはmm、重量はg

第28表 5号填縫勾玉計測表

番号	全長	径	最大厚	肩部径	左孔径	右孔径	重量	材質	穿孔方向	色調
403	34.30	22.40	9.70	10.85	3.10	1.60	9.45	メノウ	左より	青いらちゅ
404	34.25	20.25	10.55	12.45	2.80	4.40	8.30	碧玉	右より	ボトルグリーン
405	24.45	13.95	8.35	7.85	2.80	1.45	4.00	水晶	左より	
406	23.15	14.05	8.40	8.70	3.55	3.40	3.45	軟玉	左より	白

単位 長さmm、重量はg

第29表 5号填縫玉計測表

番号	全長	上径	下径	上孔径	下孔径	重量	材質	穿孔方向	色調
407	29.75	10.50	10.35	3.00	3.20	6.23	碧玉	両面	ボトルグリーン
408	21.60	10.10	10.10	3.05	2.20	4.28	碧玉	両面	#
409	21.95	8.05	8.15	2.65	2.10	2.81	碧玉	両面	#
410	27.35	10.10	10.30	2.80	1.45	5.55	碧玉	片面	#
411	28.00	10.20	10.20	3.10	1.90	5.49	碧玉	片面	#
412	26.30	10.00	9.85	4.70・9.30	1.50	4.76	碧玉	片面2度	#
413	25.70	9.20	9.20	3.25	1.45	3.98	碧玉	片面	#
414	23.65	9.15	9.15	2.85	1.90	3.81	碧玉	片面	#
415	22.00	8.05	8.00	3.50・2.75	1.15	2.72	碧玉	片面2度	#
416	21.80	8.05	7.90	3.65・3.10	1.45	2.64	碧玉	片面2度	#
417	21.85	8.15	8.05	4.40	2.00	2.40	水晶	片面	
418	26.65	7.75	7.20	3.90	1.80	1.81	水晶	片面	
419	▲17.95	8.05	-----	4.20	-----	▲1.69	水晶	片面	

単位 長さmm、重量はg。#417-418は最大径

第30表 5号填切子玉計測表

番号	全長	上部			中部			下部			孔径	重量	材質	備考
		長径	短径	長徑	短径	長径	短径	上	下	下				
420	27.80	9.20	7.65	15.00	13.40	6.55	7.40	4.10	1.60	7.19	水晶	底面に欠損感		
421	28.90	8.55	8.30	14.85	14.65	6.70	8.10	4.25	1.90	7.45	水晶			
422	22.45	8.80	9.75	14.85	13.65	9.45	8.90	3.75	2.00	5.97	水晶	底面一部欠損		
423	21.05	8.50	7.55	14.60	13.50	8.10	7.70	3.30	1.70	5.28	水晶	底面に欠損感		
424	18.80	8.85	7.60	13.65	13.00	8.10	7.35	3.75	1.50	4.18	水晶	底面に欠損感		
425	17.25	8.30	7.55	12.70	11.45	8.10	7.70	3.70	1.10	3.52	水晶	底面に欠損感		
426	17.15	8.05	6.85	12.95	11.45	7.80	6.90	3.50	1.35	3.30	水晶	底面に欠損感		
427	18.90	10.20	8.80	12.85	11.85	8.80	8.10	4.70	1.45	3.61	水晶	底面に欠損感		
428	16.50	8.50	7.55	13.05	11.35	8.30	7.50	3.75	1.65	3.21	水晶	底面に欠損感		
429	16.20	8.50	7.55	12.45	11.05	8.05	6.30	4.05	1.35	2.82	水晶	底面に欠損感		
430	15.25	7.85	7.60	13.00	12.30	8.40	7.80	3.80	1.30	3.19	水晶	底面に欠損感		
431	15.30	8.85	7.80	12.75	12.00	8.95	7.80	3.60	1.45	3.12	水晶	底面に欠損感		
432	13.85	9.35	8.60	11.95	11.50	8.30	6.00	4.30	1.40	2.72	水晶	底面に欠損感		
433	12.60	8.60	8.70	11.85	9.40	7.75	7.45	3.70	1.35	1.94	水晶	底面に欠損感		
434	10.80	9.15	7.50	11.25	10.75	7.50	6.50	3.40	1.30	1.06	水晶	底面に欠損感		
435	10.80	6.70	5.60	8.65	8.20	6.40	5.75	3.40	1.45	1.00	水晶	底面に欠損感		

単位 長さmm、重量g

第31表 5号機その他の玉計測表

番号	分類	全長	上面径	胴部		下面径	孔径 上	孔径 下	重量	穿孔 方向	材質	備考
				長径	短径							
436	平玉	13.20	---	13.20	8.10	----	3.40	1.45	2.24	片面	木品	底面に欠損痕
437	裏玉	15.55	-	10.10	9.20	----	3.20	2.40	1.07	片面	理木	
438	算盤玉	10.30	7.50	12.10	7.85	3.40	1.50	2.05	片面	木品	底面に欠損痕	
439	算盤玉	10.25	7.70	11.65	7.40	3.50	1.35	1.89	片面	木品	底面に欠損痕	
440	算盤玉	10.45	7.90	12.10	8.20	3.50	1.30	2.11	片面	木品	底面に欠損痕	
441	算盤玉	10.50	5.90	9.10	5.50	2.80	1.20	1.14	片面	木品	底面に欠損痕	

単位 長さmm、重量はg

第32表 5号機ガラス玉計測表(1)

番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備考	番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備考
442	7.90	6.45	1.55	0.63	A1	両面研磨	454	3.90	3.10	1.30	0.06	B1	突起あり
443	8.35	6.20	2.00	0.67	A1	両面研磨	455	3.85	2.30	1.65	0.04	B1	両面研磨
444	9.30	5.65	2.20	0.61	A1	両面研磨	456	4.65	2.40	1.90	0.07	B1	両面研磨
445	8.85	4.65	1.90	0.53	A1	両面研磨	457	4.10	3.50	1.45	0.07	B1	突起あり
446	7.90	5.20	2.10	0.43	A1	両面研磨	458	3.85	2.20	1.20	0.05	B1	両面研磨
447	8.00	4.60	2.15	0.40	A1	両面研磨	459	4.80	2.90	1.70	0.10	B1	両面研磨
448	8.05	3.55	1.55	0.37	A1	両面研磨	460	4.00	2.85	1.70	0.06	B1	突起あり
449	7.85	5.90	1.95	0.52	A1	両面研磨	491	3.90	3.20	1.75	0.06	B2	両面研磨
450	7.25	4.50	1.45	0.34	A1	両面研磨	492	3.95	2.60	1.60	0.04	B2	
451	7.65	5.65	2.90	0.39	A1	両面研磨	493	4.80	4.10	1.30	0.12	B2	
452	8.10	4.70	1.60	0.40	A1	両面研磨	494	4.10	3.05	1.30	0.06	B2	両面研磨
453	8.10	5.25	1.70	0.50	A1	両面研磨	495	4.10	2.45	1.35	0.05	B2	両面研磨
454	7.90	6.70	2.60	0.53	A1	両面研磨	496	3.65	3.45	1.35	0.07	B2	両面研磨
455	9.10	5.95	2.10	0.71	A1	両面研磨	497	4.00	2.25	1.45	0.05	B2	両面研磨
456	8.00	5.90	2.90	0.43	A1	両面研磨	498	4.40	2.65	1.55	0.07	B2	両面研磨
457	8.10	5.30	1.60	0.50	A1	両面研磨	499	5.80	2.80	1.85	0.11	B2	両面研磨
458	8.25	5.05	2.45	0.51	A1	両面研磨	500	4.00	2.65	1.20	0.06	B2	
459	7.95	5.30	1.70	0.41	A1	両面研磨	501	4.95	3.15	1.70	0.08	B2	
460	8.10	5.80	2.40	0.50	A1	両面研磨	502	3.80	2.50	1.25	0.03	B2	
461	8.95	6.55	1.65	0.75	A1	両面研磨	503	4.60	2.40	1.55	0.06	B2	
462	7.80	4.60	2.20	0.40	A1	両面研磨	504	4.55	2.60	1.65	0.06	B2	
463	8.10	4.30	2.00	0.37	A1	両面研磨	505	3.30	2.15	1.40	0.03	B2	
464	7.45	5.45	1.90	0.46	A1	両面研磨	506	5.10	3.00	2.35	▲ 0.07	B2	
465	7.60	5.10	1.70	0.42	A1	両面研磨	507	4.60	3.15	1.40	0.09	B3	両面研磨
466	7.95	5.00	2.95	0.39	A1	両面研磨	508	4.00	2.65	1.35	0.03	B4	
467	9.05	7.60	2.10	0.95	A1	両面研磨	509	3.80	2.70	1.20	0.02	B4	
468	7.60	4.90	2.15	0.43	A1	両面研磨	510	4.35	3.15	1.40	0.08	B4	
469	8.15	4.90	1.80	0.38	A1	両面研磨	511	4.30	3.00	1.30	0.06	B4	
470	7.85	5.10	1.70	0.43	A1	両面研磨	512	4.05	2.40	1.25	0.09	B4	
471	7.40	6.15	1.70	0.49	A1	両面研磨	513	4.30	2.70	1.65	0.07	B4	
472	6.90	3.30	2.00	0.20	A1	両面研磨	514	4.75	4.50	2.15	0.13	C	両面研磨
473	8.50	5.80	1.10	0.64	A1	両面研磨	515	4.85	4.35	2.20	0.17	C	
474	6.55	4.20	1.90	0.21	A1		516	2.80	2.60	1.15	0.03	D1	
475	8.90	8.30	2.85	0.99	A1	両面研磨	517	3.25	2.20	1.30	0.03	D1	
476	7.80	5.20	2.65	0.44	A1		518	3.30	2.05	1.30	0.03	D1	
477	8.00	5.60	2.25	0.45	A2	両面研磨	519	3.80	2.25	1.40	0.04	D1	
478	7.00	4.30	1.75	0.34	A2	両面研磨	520	4.00	2.30	1.20	0.05	D1	
479	6.90	4.60	3.10	0.30	A3	両面研磨	521	3.05	1.85	1.35	0.02	D1	突起あり
480	6.85	2.80	3.20	0.16	A3	両面研磨	522	3.45	2.50	1.15	0.03	D1	
481	8.60	6.00	3.15	0.54	A4	両面研磨	523	3.25	2.05	1.20	0.03	D1	突起あり
482	8.70	6.70	2.90	0.63	A4	両面研磨	524	3.10	2.40	1.05	0.02	D1	
483	5.95	3.95	1.70	0.26	A5		525	2.80	2.30	1.20	0.02	D1	

単位 長さmm、重量はg

第33表 5号培養ガラス玉計測表(2)

番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備考	番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備考
526	3.40	2.20	1.40	0.03	D 1		564	3.55	1.75	1.45	0.01	D 3	
527	3.15	1.95	1.25	0.02	D 1		565	4.05	2.30	1.55	0.05	D 3	
528	3.05	2.10	1.25	0.03	D 1		566	3.85	1.95	1.60	0.03	D 3	
529	3.05	1.15	1.40	0.01	D 1		567	3.50	2.10	1.00	0.03	D 3	
530	3.40	3.15	1.25	0.05	D 1		568	3.20	2.20	1.10	0.02	D 3	
531	3.00	2.15	0.90	0.02	D 1		569	3.80	3.50	1.35	0.07	D 3	
532	2.90	2.00	1.05	0.02	D 1		570	3.40	1.85	1.40	0.02	D 3	
533	3.10	1.95	1.30	0.01	D 1		571	3.65	2.15	1.00	0.04	D 3	
534	3.80	2.00	1.70	0.03	D 1		572	3.55	2.90	1.45	0.06	D 3	
535	3.50	2.45	1.35	0.01	D 1		573	3.00	2.65	1.00	0.03	D 4	
536	2.90	2.00	1.30	0.01	D 1		574	2.60	1.70	1.30	0.01	D 4	
537	3.80	2.75	1.60	0.02	D 1		575	2.75	1.95	0.75	0.02	D 4	
538	3.50	1.60	1.30	0.01	D 1		576	-----	1.80	0.85	▲ 0.01	D 4	
539	3.20	2.55	1.05	0.03	D 1		577	2.35	2.25	0.95	0.02	D 4	
540	2.65	2.15	1.20	0.02	D 1		578	2.90	1.85	1.10	0.02	D 4	
541	3.30	2.00	1.35	0.03	D 1		579	3.00	2.00	1.20	0.01	D 4	
542	3.30	2.40	1.40	0.03	D 1		580	2.60	1.80	0.80	-----	D 4	
543	3.85	2.60	1.70	0.04	D 1		581	3.55	2.60	1.25	0.03	D 4	
544	3.30	2.85	1.30	0.01	D 1		582	3.10	2.00	0.90	0.03	D 4	
545	4.25	2.20	2.15	0.05	D 1		583	3.25	2.40	1.45	0.03	D 4	
546	3.05	2.20	0.95	0.02	D 2		584	2.90	2.10	1.20	0.03	D 4	
547	2.70	1.35	0.95	0.02	D 2		585	3.60	2.55	1.80	0.04	D 4	
548	3.20	2.95	1.85	0.04	D 2		586	3.30	3.55	1.40	▲ 0.04	D 4	
549	3.65	2.15	1.45	0.02	D 2		587	3.80	3.30	1.60	0.05	D 5	
550	3.55	2.30	1.15	0.02	D 2		588	4.30	3.10	1.60	0.06	D 5	
551	3.35	2.40	1.35	0.03	D 2		589	4.00	2.70	1.65	0.06	D 5	
552	3.40	2.05	1.25	0.03	D 2		590	3.85	1.80	1.50	0.01	D 5	
553	2.90	2.45	1.00	0.03	D 2	両面研削	591	4.30	3.00	1.45	0.07	D 5	
554	3.75	2.15	1.45	0.04	D 3		592	4.35	2.50	1.45	0.05	D 5	
555	3.50	2.30	1.30	0.03	D 3		593	3.15	1.85	1.00	0.03	D 5	
556	3.75	2.15	1.30	0.04	D 3		594	2.35	1.60	0.95	0.01	E	
557	3.00	2.15	0.95	0.01	D 3		595	2.60	1.25	1.05	0.02	E	
558	3.20	2.45	1.20	0.04	D 3		596	2.25	1.65	1.30	0.01	E	
559	3.20	2.20	0.90	0.02	D 3		597	2.30	1.30	1.10	0.01	E	
560	3.55	2.80	1.20	0.05	D 3		598	2.65	1.80	1.05	0.01	E	
561	3.00	2.10	1.20	0.02	D 3		599	2.60	2.00	1.10	0.01	E	
562	2.85	2.45	1.00	0.02	D 3		600	2.20	1.05	1.05	0.01	E	
563	3.50	1.80	1.35	0.03	D 3							単位：長さmm、重量はg	

第34表 5号培養玉計測表(1)

番号	径	厚さ	孔径	重量	備考	番号	径	厚さ	孔径	重量	備考
601	8.10	▲ 8.55	1.40	▲ 0.47	下部欠損	611	7.90	6.30	1.55	▲ 0.39	
602	12.00	9.05	2.20	0.86		612	7.75	6.85	1.20	▲ 0.30	
603	9.60	8.40	1.65	▲ 0.49	試部一部欠損	613	7.40	-----	1.55	▲ 0.23	
604	7.90	6.40	1.50	0.38		614	8.15	6.85	1.20	0.45	
605	8.35	7.95	1.65	▲ 0.47	半分欠損	615	7.40	6.40	1.40	0.37	
606	7.90	6.00	1.55	▲ 0.37	一部欠損	616	7.60	6.00	1.35	0.32	
607	8.25	6.25	1.35	0.38		617	7.75	6.55	1.65	0.40	
608	8.15	7.45	1.35	0.43		618	9.05	8.00	1.45	0.58	
609	8.60	▲ 6.70	1.70	▲ 0.48	下部欠損	619	8.50	7.05	1.85	0.47	
610	7.95	6.50	1.70	▲ 0.38	一部欠損	620	8.20	7.65	1.60	▲ 0.49	

単位：長さmm、重量はg

第35表 5号練玉計測表(2)

番号	径	厚さ	孔径	重量	備考	番号	径	厚さ	孔径	重量	備考
621	8.35	6.20	1.55	0.39		671	8.30	7.4C	1.2C	C.48	
622	8.10	6.35	1.60	0.42		672	8.10	6.50	1.55	▲ C.44	
623	8.35	6.6C	1.2C	▲ C.46		673	7.70	6.65	1.50	▲ C.32	
624	8.55	6.75	1.55	C.48		674	8.50	5.70	1.80	▲ C.33	
625	7.65	6.50	1.40	0.32		675	8.60	-----	2.00	▲ C.27	
626	8.4C	6.60	1.45	▲ C.40		676	-----	-----	1.65	▲ C.22	
627	7.40	6.35	1.40	0.36		677	9.10	6.10	1.9C	C.40	
628	8.10	6.20	1.35	0.39		678	8.70	6.65	1.75	C.42	
629	7.55	▲ 7.15	1.75	0.34		679	8.15	7.70	1.50	C.44	
630	7.40	6.80	1.35	0.30		680	9.30	7.50	1.55	C.63	
631	8.05	6.6C	1.15	C.35		681	8.55	7.25	1.70	▲ C.44	
632	8.35	7.10	1.70	0.51		682	7.90	7.55	2.20	C.44	
633	8.3C	6.45	1.70	▲ C.41		683	8.00	-----	1.80	▲ C.26	
634	7.55	6.80	1.50	▲ C.36		684	8.55	7.25	1.30	▲ C.50	
635	9.50	7.70	1.80	0.53	無理8.50 空洞	685	8.35	7.45	1.35	▲ C.48	
636	8.25	7.80	1.65	▲ C.47		686	8.70	7.40	1.60	C.48	
637	7.65	5.80	1.30	0.35		687	8.25	7.10	1.55	▲ C.47	
638	8.10	7.10	1.75	▲ C.44		688	7.65	▲ 6.45	1.35	▲ C.33	
639	8.55	7.05	1.80	▲ C.47		689	7.80	6.65	1.15	C.41	
640	8.80	7.3C	1.95	▲ C.54		690	7.55	6.40	1.65	C.36	
641	8.95	7.30	1.80	▲ C.51		691	8.45	▲ 7.00	1.60	▲ C.43	
642	7.85	6.35	1.50	0.38		692	8.65	▲ 6.55	2.30	▲ C.47	
643	8.15	6.85	1.90	0.41		693	8.70	▲ 6.30	1.95	▲ C.44	
644	8.05	6.85	1.50	▲ C.35		694	▲ 8.05	▲ 6.55	2.30	▲ C.41	
645	7.75	6.25	1.60	▲ C.32		695	▲ 8.55	6.60	1.80	▲ C.45	
646	7.55	6.80	1.70	▲ C.36		696	▲ 8.30	▲ 5.90	1.95	▲ C.36	
647	8.20	6.8C	1.90	▲ C.44		697	8.20	7.55	1.55	C.52	
648	7.35	6.40	1.55	▲ C.32		698	-----	-----	1.75	▲ C.17	
649	8.15	6.35	1.70	▲ C.37		699	▲ 7.35	6.60	1.05	▲ C.39	
650	8.35	7.30	1.80	0.52		700	7.80	6.35	1.10	C.35	
651	8.30	7.10	1.20	0.47		701	▲ 5.60	▲ 6.45	1.90	▲ C.35	
652	8.85	6.45	1.70	0.39		702	8.30	7.10	1.80	▲ C.46	
653	8.45	6.85	1.80	▲ C.41		703	▲ 7.65	-----	1.50	▲ C.27	
654	8.30	6.95	1.35	0.47		704	▲ 8.10	7.15	1.75	▲ C.47	
655	7.65	6.0C	1.50	▲ C.36		705	▲ 7.45	5.65	1.45	▲ C.31	
656	8.10	6.75	1.75	▲ C.42		706	▲ 9.50	-----	2.10	▲ C.53	
657	7.55	6.20	1.25	▲ C.36		707	▲ 8.70	6.90	1.95	▲ C.48	
658	8.50	▲ 7.05	1.75	▲ C.42		708	▲ 8.55	7.85	1.70	▲ C.48	
659	7.90	7.50	1.80	▲ C.51		709	▲ 8.40	6.90	2.10	▲ C.43	
660	8.65	6.65	1.85	▲ C.39		710	7.90	7.55	1.75	C.41	
661	8.10	6.55	1.40	0.41		711	8.40	6.70	1.85	C.39	
662	7.95	6.65	1.15	▲ C.39		712	8.25	5.75	1.90	▲ C.34	
663	7.40	5.90	1.40	▲ C.19		713	8.45	7.20	1.45	C.46	
664	8.90	▲ 5.95	1.70	▲ C.40		714	7.90	-----	1.40	▲ C.27	
665	7.55	7.15	1.70	▲ C.46		715	8.40	6.90	2.10	▲ C.41	
666	9.20	6.65	1.65	0.52		716	8.45	6.50	1.85	C.42	
667	8.35	7.60	1.85	▲ C.49		717	8.55	6.15	1.45	C.50	
668	7.20	5.90	1.15	▲ C.25		718	8.25	6.45	1.70	C.40	
669	7.90	7.15	1.80	▲ C.39		719	8.15	6.70	1.65	C.43	
670	7.65	7.00	1.15	▲ C.36		720	7.80	6.55	1.50	C.42	

単位：径さきはmm、重量はg

第36表 5号填縫玉計測表(3)

番号	径	厚さ	孔径	重量	備考	番号	径	厚さ	孔径	重量	備考
721	8.10	8.55	2.25	0.55		765	7.75	6.25	1.90	▲ 0.26	
722	8.20		2.05 ▲ 0.31			766	7.95	7.20	1.60	0.41	
723	9.30	5.95	2.10 ▲ 0.47			767	8.15	6.85	1.60	0.49	
724	7.95	6.95	1.35 ▲ 0.36			768	9.00	7.20	2.15	0.44	
725	7.55	6.30	1.55 ▲ 0.32			769	8.35	6.30	1.55	0.41	
726	8.50	6.50	1.65 0.42			770	8.60	7.05	1.90	0.49	
727	8.10	6.40	1.70 ▲ 0.31			771	7.80	7.00	1.70	0.36	
728	7.60	6.50	1.80 ▲ 0.28			772	7.80	6.00	1.45	0.38	
729	7.85	6.55	1.70 ▲ 0.40			773	8.05	6.35	1.90	0.39	
730	9.15	-----	1.70 ▲ 0.45			774	9.30	7.30	2.10	0.54	
731	7.90	6.55	1.55 0.36			775	8.30	7.70	1.30	0.49	
732	9.40	-----	1.90 ▲ 0.43			776	8.50	6.05	1.50	0.27	
733	8.40	7.55	1.95 0.51			777	8.50	7.10	1.50	0.44	
734	8.95	6.65	2.50 ▲ 0.43			778	7.85	6.10	1.60	0.36	
735	7.80	7.00	1.70 ▲ 0.34			779	7.90	6.40	1.90	0.36	
736	8.50	6.90	1.60 ▲ 0.39			780	8.40	6.25	1.90 ▲ 0.36		
737	7.70	6.75	1.75 ▲ 0.39			781	8.60	6.80	1.70	0.45	
738	7.75	6.40	1.75 0.38			782	7.15	6.90	1.70	0.38	
739	8.05	5.95	1.70 ▲ 0.36			783	8.80	6.75	1.80	0.42	
740	8.60	7.35	2.05 0.56			784	8.45	6.65	1.60 ▲ 0.42		
741	8.45	6.55	1.50 0.42			785	7.65	5.20	1.55 ▲ 0.30		
742	8.40	7.10	1.45 0.48			786	8.05	6.40	1.65	0.38	
743	7.85	7.00	1.40 0.44			787	7.90	6.45	1.55	0.36	
744	8.25	6.70	1.90 ▲ 0.41			788	9.40	8.20	2.25	0.60	
745	8.60	6.85	2.15 ▲ 0.43			789	8.60	6.20	1.95	0.32	
746	7.85	6.90	1.40 0.42			790	9.40	7.90	2.00	0.62	
747	7.50	6.65	2.00 ▲ 0.39			791	8.35	7.00	1.65	0.45	
748	8.70	7.60	2.25 0.51			792	8.10	6.65	1.50	0.41	
749	8.45	-----	1.90 ▲ 0.40			793	8.15	-	2.20 ▲ 0.47		
750	7.65	-----	2.10 ▲ 0.24			794	7.30	5.95	1.55	0.25	
751	7.80	6.50	1.60 0.36			795	7.65	6.20	1.50	0.34	
752	8.25	6.15	2.15 ▲ 0.33			796	7.70	6.20	1.70	0.34	
753	8.10	6.20	1.55 ▲ 0.35			797	7.90	7.20	1.70 ▲ 0.49		
754	7.20	6.45	1.40 ▲ 0.29			798	8.80	5.85	1.80	0.39	
755	7.95	7.25	1.60 0.43			799	7.90	6.45	1.60	0.37	
756	8.70	7.45	1.80 0.49			800	8.85	-	1.50 ▲ 0.36		
757	8.40	6.80	2.15 ▲ 0.41			801	8.35	7.20	1.70	0.47	
758	8.50	6.95	1.95 0.44			802	8.55	-----	1.65 ▲ 0.32		
759	9.10	7.25	2.05 0.53			803	8.65	7.85	1.60 ▲ 0.54		
760	13.05	10.90	2.65 1.15			804	8.20	-----	1.45 ▲ 0.42		
761	8.90	7.55	2.25 0.48			805	8.10	6.40	1.55	0.37	
762	8.15	6.85	1.45 ▲ 0.48			806	8.45	7.60	2.00	0.48	
763	8.30	7.20	1.50 0.45			807	7.30	-----	1.85 ▲ 0.25		
764	7.90	6.80	1.90 ▲ 0.33								単位：英吋、重量：g

第37表 5号填須済器鏡察表

番号	器種	法量	形態の特徴	技 法	備 考
808	蓋杯 蓋	口径 13.9 脚高 4.3	口縁部は内側してから、外反気味に下り、喉部は丸い。天井板は丸い。ナゲによる凹凸が大きい。	大井筒外面回転ヘラ削り。 他は回転ナグ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 鎌青灰褐色 外面 青灰色 ロクロ回転 反時計回り
809	蓋杯 蓋	口径 14.0 脚高 2.7	口縁部はほぼ垂直に下り、喉部は丸い。	回転ナグ。	焼成 良好 胎土 疎 色調 内面 青灰色 外面 鎌青灰褐色 脚部 青灰色 ロクロ回転 不明
810	粗 型 査 査	口径 10.0 脚高 2.9	口縁部はやや内寄り方に外下方へ廻り、極く外反して底部に寄る。喉部は丸い。天井部は丸いが、中央部は平坦。口縫端部に1条の比較窓ある。	天井部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナグ。 のち天井部内面一定方向ナグ。	焼成 良好 胎土 疎 色調 内面 鎌青灰褐色 外面 青灰色 ロクロ回転 時計回り
811	蓋 杯 身	口径 12.2 受部径 14.3 脚高 4.0	口縁部は内側して立ち上がり、喉部は鋸い。受部は外上方へのび、喉部は丸い。底部は浅く、平坦。	底部外面回転ヘラ切り無調整。 他は回転ナグ。 のち底部内面一定方向ナグ。	焼成 良好 胎土 疎 色調 内面 鎌青灰褐色 外面 青灰色 ロクロ回転 時計回り
812	蓋杯 身	口径 12.4 受部径 14.7 脚高 3.8	口縁部は直立気味に立ち上がり、喉部は鋸い。受部は外上方へのび、喉部は丸い。底部は浅く、平坦。	底部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナグ。 のち底部内面一定方向ナグ。	焼成 良好 胎土 中や粗 色調 内面 鎌青灰褐色 外面 鎌青灰褐色 ロクロ回転 反時計回り
813	蓋 杯 身	口径 14.8 受部径 17.0 脚高 4.3	口縁部は内側し、やや内寄り気味に立ち上がり、喉部は鋸い。受部は外上方へほぼ水平にのび、喉部は鋸い。底部は浅く少し丸みを帯びる。底部外面に3条のヘラ切配有り。	底部外面回転ヘラ削り。 他は回転ナグ。 のち底部内面一定方向ナグ。	焼成 良好 胎土 疎 色調 内面 青灰色 外面 灰色 ロクロ回転 時計回り

単位 cm

第38表 6号填耳環計測表

番号	縦径	横径	断面幅	断面厚	重量
814	30.65	27.75	7.45	8.00	19.19
815	31.15	27.95	7.65	7.90	18.63
816 ▲	30.20	▲ 28.75	▲ 6.58	▲ 7.30	▲ 15.02
817	29.70	26.95	7.05	7.85	14.28
818	25.30	22.50	5.40	6.50	8.93
819	24.30	22.60	▲ 4.82	6.10	▲ 7.08
820 ▲	33.90	▲ 28.60	8.50	8.60	▲ 21.12

単位 長さはmm、重量はg

第39表 6号填ガラス玉計測表

番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備 考	番号	径	厚さ	孔径	重量	分類	備 考
821	9.05	5.60	2.40	0.70	A	円面研磨	826	5.25	3.50	1.70	0.11	B	
822	3.25	2.05	1.45	0.03	B	突起あり	829	3.80	2.25	1.90	0.05	B	
823	3.80	2.40	1.50	0.05	B		830	3.85	2.40	1.50	0.04	B	突起あり
824	4.05	2.05	1.70	0.06	B	片面研磨	831	5.20	3.00	1.45	0.11	C	
825	3.72	2.40	1.20	0.05	B		832	3.80	2.40	1.55	0.04	D	
826	4.00	2.75	1.15	0.06	B		833	3.20	2.10	1.20	0.03	E	
827	3.70	2.25	1.25	0.04	B		834	4.55	2.70	1.35	0.07	F	

単位 長さはmm、重量はg

第40表 6号埴須器観察表(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	技法	備考
835	蓋杯 蓋	口径 13.2 器高 4.0	口部は直線的に外下方へ下り、端部は丸い。 天井部はやや丸みを帯びるが、中央部は尖る。	天井部外周面削りへテ削り。 他の回転ナデ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 断面 青灰色 ロクロ回転 時計回り
836	蓋杯 蓋	口径 14.2 残存高 2.9	口部は外反気味に外下方へ下り、端部はやや鋸歯状。	天井部外周面削りへテ削り。 他の回転ナデ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 断面 青灰色 ロクロ回転 時計回り
837	蓋杯 蓋	口径 13.5 器高 5.0	口部はほぼ直線的に外下方へ下り、端部付近で外反する。端部は丸い。 天井部は高く、丸い。	天井部外周面削りへテ削り。 他の回転ナデ。 のち天井部内面一定方向ナデ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 断面 青灰色 ロクロ回転 時計回り
838	蓋杯 蓋	口径 15.4 器高 4.5	口部は内反気味に下り、端部は付近で外反する。 端部はやや鋸歯状。天井部は底く、中央部は平ら。	天井部外周面削りへテ切う無調整。 他の回転ナデ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 緑青灰色 外面 緑青灰色 断面 青灰色と 灰褐色 ロクロ回転 不明
839	蓋杯 蓋	口径 16.0 残存高 3.8	口部は外方へ屈曲したのも、内反気味に下り、端部は丸い。	四軸ナデ。	焼成 良好 胎土 やや密 色調 内面 緑青灰色 外面 緑青灰色 断面 青灰色と 灰褐色 ロクロ回転 ハメ
840	蓋杯 身	口径 12.3 受部径 15.1 器高 4.8	口部は強く外反気味に立ち上がり、端部は丸い。受部は比較的長く外上方へのび、端部は丸い。底部は丸く深いが、中央部は平坦。	底面外周面削りへテ削り。 他の回転ナデ。	焼成 良好 胎土 やや密 色調 内面 緑青灰色 外面 青灰色 ロクロ回転 時計回り
841	蓋杯 身	口径 12.9 受部径 15.4 器高 4.7	口部は内傾のち直立気味に立ち上がり、端部は鋸歯状。受部は外上方へのび、端部は丸い。底部は丸く丸いが、中央部は平坦。	天井部外周面削りへテ削り。 他の回転ナデ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 緑青灰色 外面 紫灰色 断面 灰白色 ロクロ回転 時計回り
842	蓋杯 身	口径 13.9 受部径 16.0 残存高 3.6	口部は近く直立しての外反気味に立ち上がり、端部は鋸歯状。受部は外上方へのび、端部は丸い。	四軸ナデ。	焼成 良好 胎土 やや密 色調 内面 緑青灰色 外面 紫灰色 断面 灰白色 ロクロ回転 不明
843	蓋杯 身	口径 15.1 受部径 17.5 残存高 2.7	口部は近く直立気味に立ち上がる。端部はやや鋸歯状。受部は外上方へのび、端部はやや鋸歯状。	四軸ナデ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青灰色 外面 緑青灰色 断面 ぶい赤褐色 ロクロ回転 不明

単位 cm

第41表 6号墳須恵器観察表(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	技 法	備 考
845	高杯	高基部径 4.5 底径 11.1 残存高 5.7	脚部・基部太く直線的に外刃へ入り、中位で屈曲して大きく外方へ開き、端部に至る。 端部に内傾する段を有する。	杯部底面外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。 のち底部内面一定方向ナダ。	焼成 不良 胎土 やや粗 色調 内面 明緑灰褐色 外面 明オサーブ灰色 断面 明オリーブ灰色 ロクロ回転 総計五回
846	高杯	高水部径 4.0 底径 10.6 残存高 0.4	脚部基部太く下方へ直線的に下り、中位より大きく外方へ開き、さらに漸減で外上方へのびて底部に至る。端部に内傾する段を有する。	杯部底面外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。	焼成 不良 胎土 やや粗 色調 内面 明オサーブ灰色 外面 明青灰色 断面 明翠灰色 ロクロ回転 総計回り
846	高杯	脚部底径 4.6 底径 13.1 残存高 10.7	脚部基部よりゆるやかに外反して下り、中位より大きく外方へ開く。底部に内傾する段を有する。脚部中位に2条、地部近辺に1条の凹痕がある。	回転ナダ。	焼成 良好 胎土 塗 色調 内面 青灰褐色 外面 青灰褐色 断面 青灰褐色 ロクロ回転 不明
847	高耳杯	底径 14.1 残存高 6.0	底部で凹曲して外方へ開く。 端部に内傾する段を有する。	四転ナダ。	焼成 良好 胎土 塗 色調 内面 青灰褐色 外面 青灰褐色 断面 青灰褐色 ロクロ回転 不明
848	平底盤	体徑 14.0 残存高 9.0	上部縁やかに内曲して下り、中位で大きく内曲して底部に至る。底部は丸い。	底面外側回転へテ削り。 他は加転ナダ。	焼成 良好 胎土 塗 色調 内面 青灰褐色 外面 青灰褐色 断面 青灰褐色 ロクロ回転 反時計回り
849	底	最大径 10.3 残存高 9.6	口縁部は緩やかに外反してのびる。底部は緩やかに内曲して下り、中位で大きく内曲して底部に至る。底部は丸い。底部中位に円孔。	底部外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。	焼成 不良 胎土 塗 色調 内面 淡緑色 外面 淡オリーブ色 断面 ぶい緑色 ロクロ回転 総計回り
850	底	底部 最大径 9.0 残存高 6.6	底部上縁より緩やかに内曲して下り、中位で大きく内曲し、底部に至る。底部中位に円孔、2条の沈線。	底部外側回転へテ削り。 他は四転ナダ。	焼成 良好 胎土 塗 色調 内面 青灰褐色 外面 淡青灰褐色 ロクロ回転 総計回り
851	口盤 頭 底	口盤 8.2cm 体径 15.0 残存高 9.1	体盤上面は緩やかに斜傾して下り、中位で大きく内曲して底部に至る。底部は丸い。 上位1/3に1条の沈線有り。	底部外側回転カキモ。 他は四転ナダ。	焼成 良好 胎土 塗 色調 内面 青灰褐色 外面 青灰褐色 断面 青灰褐色 ロクロ回転 総計回り

単位: cm. ※は推定値

第42表 6号埴須恵器観察表(3)

番号	器種	法量	形態の特徴	技法	備考
852	盃 身	口徑 11.6 受部深 14.3 器高 4.2	口縁部は唇に内側して立ち上がり、底部は鋸歯状。受部は外上方へのび、端部は丸い。底部は深く丸いが、中央部は平坦。外面は大部分に自然釉。	天井部外周回転ヘラ引り。 他は回転ナガ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青白色 外面 青白色 断面 青白色 ヨクロ回転 時計回り
853	瓶 蓋	口徑 6.3 器高 3.1	外上方へ開き気味にのび、底部は平ら。腹部に凹凸を有する。中位に1条の凹溝有り。	四輪ナガ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青白色 外面 青灰色 断面 青灰色 ヨクロ回転 不明
854	盃 身	口徑 29.3 器高 9.6	口縁部は直立したものと並び、内窓気味に外上方へのびる。断面三角形の縁を外方に突いたものを底部に至る。底部は丸い。	体部外周に腰骨子タタキ。 に額部外周回転ナガ。 内面同心円タタキ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青灰色 外面 青青灰色 断面 灰色 ヨクロ回転 不明

第43表 7号埴須ガラス玉計測表

番号	径	厚さ	孔径	重量	色調
855	3.90	2.45	1.30	0.04	青 紫

単位 厘メートル、重量g

第44表 7号埴須恵器観察表(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	技法	備考
856	盃 蓋	口徑 15.5 器高 4.4	口縁部は浅井型縁状に外下方へ下る。底部は丸い。	天井部外周四輪ヘラケズリ。 他は回転ナガ。 天井部外周スサの凹痕。 天井部内面一定方向ナガ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青青灰色 外面 青青灰色 ヨクロ回転 不明
857	盃 身	口徑 13.6 受部深 16.2 器高 4.6	口縁部は内窓気味に立ち上がり、底部はやや斜めで細い。 受部は外上方へのび、端部は丸い。 底部は平坦だが、中央部は丸い。	底部外周回転ヘラケズリ。 他は回転ナガ。 底部内面一定方向ナガ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 ヨクロ回転 時計回り
858	蓋 身	口徑 10.9 受部深 13.1 器高 3.6	口縁部は内窓のち外反気味に立ち上がり、底部はやや斜めで細い。 受部はほぼ水平にのび、端部はやや細い。 底部は丸い。	底部外周回転ヘラケズリ。 他は回転ナガ。 底部内面不整方向ナガ。	焼成 良好 胎土 密 色調 内面 青青灰色 外面 青青灰色 ヨクロ回転 時計回り
859	盃 身	口徑 12.0 受部深 15.3 器高 2.2	口縁部は内窓のち外反気味に立ち上がり、底部はやや斜めで細い。 受部は外やや上方へのび、端部は丸い。	四輪ナガ。	焼成 やや不良 胎土 やや密 色調 内面 青灰色 外面 青青灰色 断面 青灰色 ヨクロ回転 不明
860	蓋 身	口徑 12.9 受部深 14.9 器高 3.8	口縁部は外反気味に立ち上がり、底部はやや斜めで細い。 受部は外上方へのび、端部は丸い。	四輪ナガ。	焼成 良好 胎土 やや密 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 断面 青灰色 ヨクロ回転 不明

単位 cm

第45表 7号埴須器観察表(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	技 法	備 考
861	瓶 蓋	口径 6.4 残存高 3.8	内面しての直立気泡に立ち上がりて口縁 輪部に凹る。端部はやや鋸い。	回転ナヂ。	施成 良好 胎土 密 色調 内面 青灰色 外曲 青灰色 断面 青灰色 ロクロ回転 小明
862	瓶 蓋	口径 11.9 体部長径 45.1 体部厚径 33.0	山根部は外反気泡に立ち上がり、頭部付近 で若干内凹する。 全体には波状を呈する。	体部外反屈筋タタキ、のち回転カタメ。 体部内面弓心タタキ。	施成 良好 胎土 濃 色調 内面 青灰色 外曲 青灰色 断面 青灰色 ロクロ回転 不明

単位 cm

第46表 石宝墓ガラス玉計測表

番号	径	厚さ	丸径	重量	色調	備考
463	3.40	2.15	1.45	0.01	水色	四面研磨

単位 長さはmm、重量はg

第47表 土塹基鉄器計測表

番号	分類	全長	鐵身部			鐵披部			基部長	重量	備考
			長	幅	厚	長	幅	厚			
864	鉄 鎌	▲ 15.4	2.80	0.98	0.28	8.30	0.62	0.47	4.30	5.92	基部に木質残存
865	"	19.6	2.65	0.98	0.35	9.15	0.64	0.39	7.30	11.75	
866	"	20.1	2.70	1.02	0.33	9.50	0.66	0.43	7.90	12.18	基部に木質残存
867	"	20.0	2.90	0.93	0.41	9.30	0.53	0.49	7.80	11.64	基部に焼皮・木質残存
868	由 刀 鎌	13.4	横 2.70	厚 0.34					----	20.23	折り返し型欠失

単位 長さはcm、重量はg

第48表 土塹基須器観察表(1)

番号	器種	法量	形態の特徴	技 法	備 考
869	蓋 杯 蓋	口径 15.3 基高 3.9	口縁部は内面弧状に外下方へ開き、中位で凹 曲し直面に下る。端部は丸い。 天井部は丸みを帯び、中央部は平底。	天井部外反回転ヘリ削り。ヘリ切り模様ある。 他は回転ナヂ。	施成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 青灰色 外曲 青灰色 ロクロ回転 斜計回り
870	蓋 杯 身 身	口径 13.0 受深 15.4 基高 4.0	口縁部は内傾した後外反気泡に立ち上がり、 縁部は丸い。受部は外やや上方にのび、端 部はやや鋸い。 底部に丸みを持ち、中央部はやや平坦。	底部外反回転ヘリ削り。ヘリ切り模様ある。 他は回転ナヂ。 底部内面一定方向ナヂ。	施成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 青灰色 外曲 青灰色 ロクロ回転 斜計回り
871	蓋 杯 蓋	口径 15.0 天井部 3.8	口縁部は外下方に下り、端部は丸い。 天井部は丸いが、天井部はやや平坦。	天井部外反回転ヘリ削り。 他は回転ナヂ。 大井窓内面一定方向ナヂ。	施成 良好 胎土 やや粗 色調 内面 青灰色 外曲 青灰色 ロクロ回転 斜計回り
872	蓋 杯 身	口径 13.0 受深 15.7 基高 4.1	口縁部は内傾して立ち上がり、端部はやや鋸 い。 受部はほぼ水平にのび、端部はやや鋸い。 立ち上がり基部に1条の沈線がある。 底部は浅く平坦。	底部外反回転ヘリ削り。 他は回転ナヂ。 底部内面一定方向ナヂ。	施成 良好 胎土 やや密 色調 内面 緑青灰色 外曲 青灰色 ロクロ回転 斜計回り

単位 cm

第49表 土壌基須恵器観察表(2)

番号	器種	法量	形態の特徴	技 法	備 考
873	口徑 直杯	口徑 15.3 直径 4.1	口部は内傾してから直徑に下り、直部は丸い。 天井部は丸みを帯び、中央部は平坦。	天井部外周回転ヘラ削り。 他は同軸ナヂ。	焼成 良好 黏土 やや粗 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 ロタリ回転 時計回り
874	高杯 受部	口徑 15.1 受部径 15.6	口部は内傾してから外反45度に立ち上がり、 底部はやや斜め。立ち上がりの基部に1条の沈線が巡る。 底部は丸みを帯びる。	底部外周回転ヘラ削り。 他は回転ナヂ。 底部内面一定力キテ。	焼成 良好 粘土 やや粗 色調 内面 青灰色 外面 青灰色 ロタリ回転 時計回り
	身	高さ 3.9			

単位 cm

第50表 包含層出土遺物計測表

番号	分類	全長	器身部			蓋部			基部長	重量	備 考
			長	幅	厚	長	幅	厚			
875	鉢	▲ 6.80	5.40	3.40	0.25	▲ 1.40	0.80	0.35	-----	不明	逆剥型、蓋被部、蓋部欠損

単位 長さcm、重量g

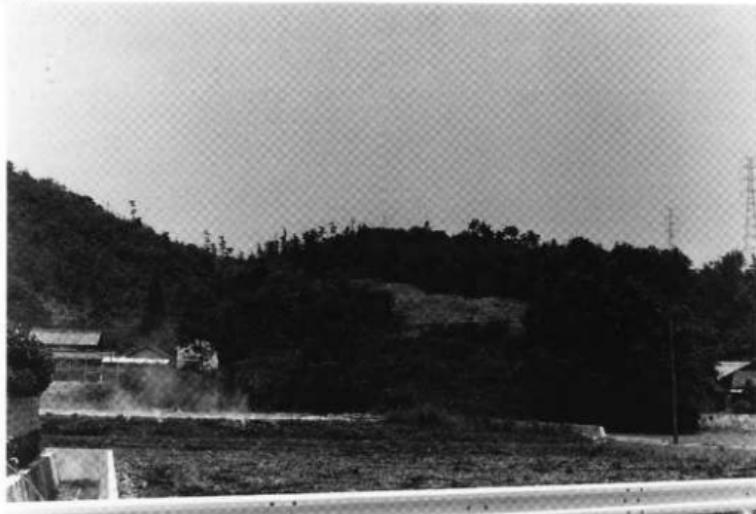
第51表 包含層出土遺物観察表

番号	器種	法量	形態の特徴	技 法	備 考
876	土器 筒形 器身 直立	脚基部径 4.5 直徑 11.2	脚基部より内側気球に下り、屈曲しては注出部に広がり、裏脚付近で外反する。	外壁 ナヂ。 内面 ヘラ状工具によるナヂ。 脚基部行糞ココナチ。	焼成 不良 粘土 粗 色調 内面 にふい赤褐色 外側 棕色 底面 棕色

単位 cm

写 真 図 版

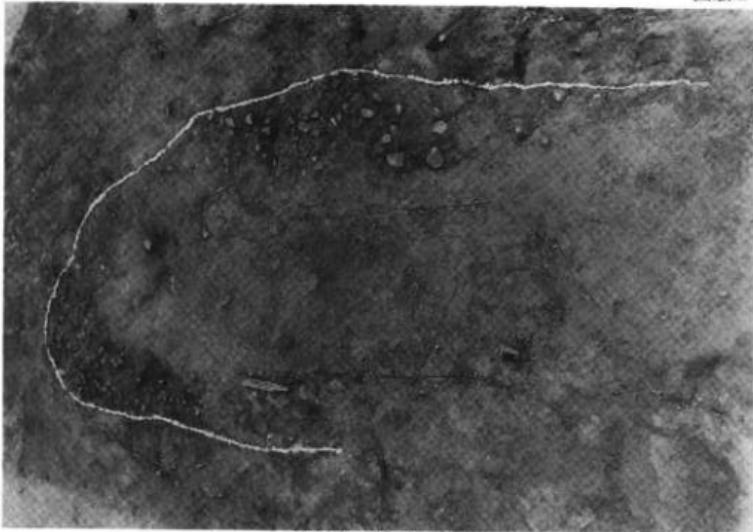
図版 1



調査前風景 遠景



調査前風景 近景



2号墳主体部検出状況(1)



2号墳主体部検出状況(2)